

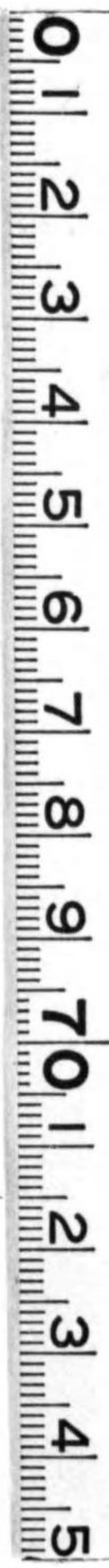
289-G56ウ



\*1200800290325\*

289

G56



始



207 110

612

289  
956

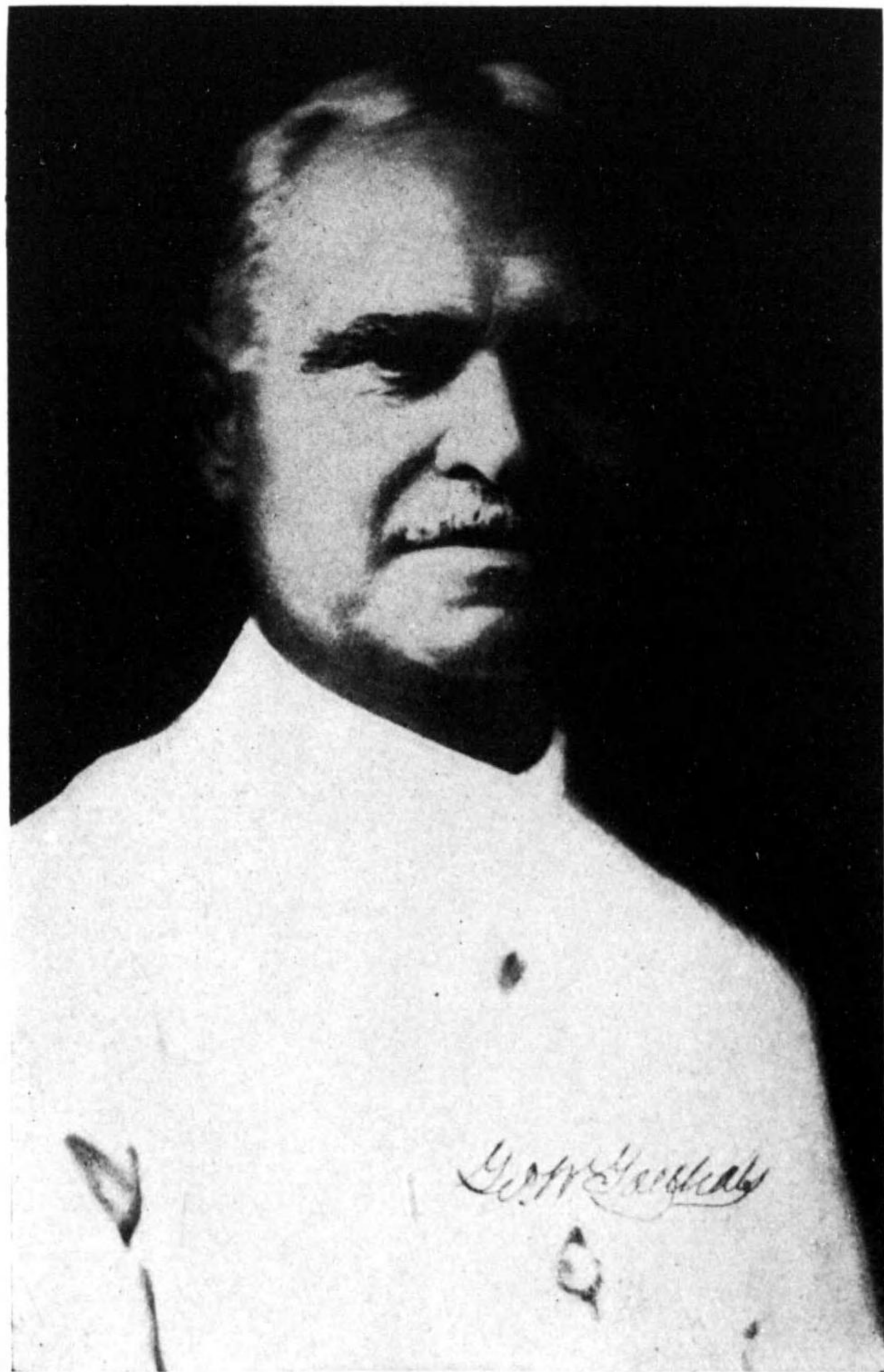




今宵の風

フアンパ  
ラ・ピ  
ンショップ 著  
朱田坂  
書二  
店郎  
譯



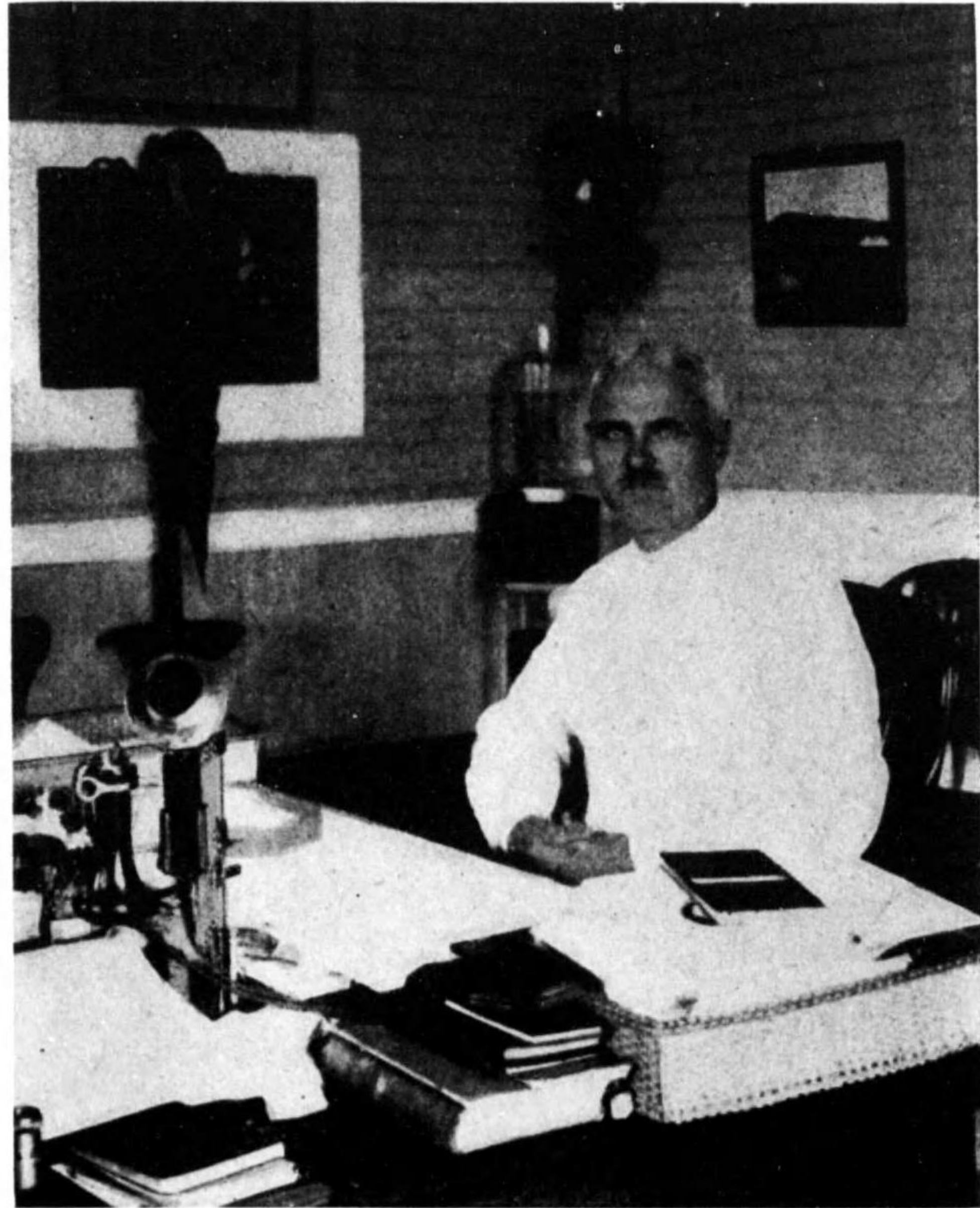


地峽運河委員會委員長兼技師長 ゴータルス大佐

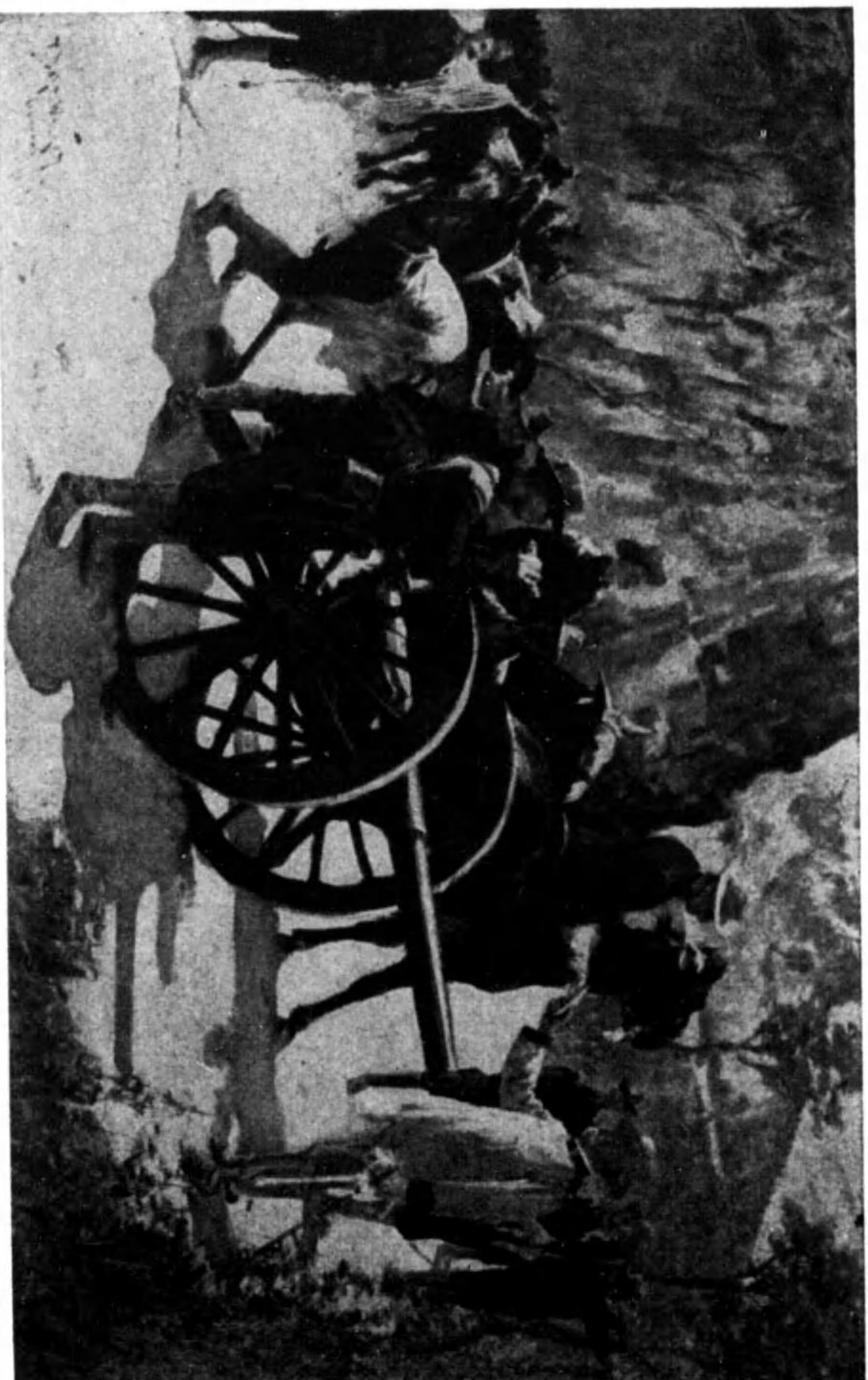


Copyright of  
W. A. Rogers  
Jan 17 1871

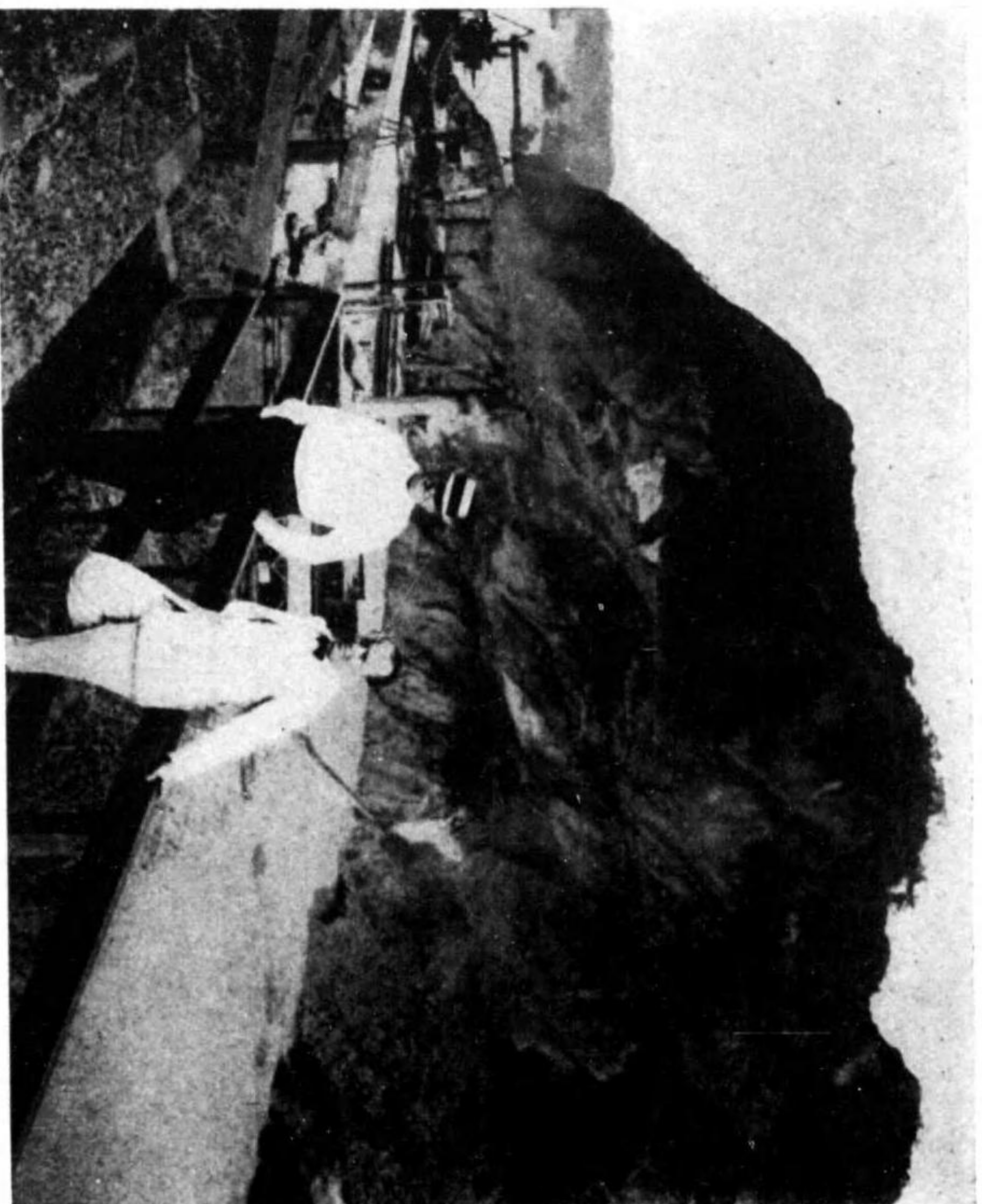
小鳥が將軍にさゝやくことに——  
「鋼鐵船を造れ！」ロジャース畫  
「かれらが木造船を造らうとしてゐる樹には、まだ鳥  
が巢を作つてゐる。」ゴータルス（漫畫説明）



キュレブラの地峡運河委員会本部で執務中のゴータルス大佐



「ボート・リコ戦の劇的終結」 テー・ダートウオーカー畫  
——テルツク司合官（乗馬）休戦協定成立の報告を受く——  
（野砲の手前に立てるがゾーダルス義勇軍中佐）



ガイラルド (舊稱キエレラ) 切割に意ふエーダルス大佐(左)  
[位置は切割の西岸・對岸はエーラルド・ヒル及びビクラクラシヤ地這の跡]



炎天下、魔の黒沼に闘ふ測量技師



大西洋と太平洋を結んだ大陸横断鉄道の先駆者・パナマ鐵道

## 譯者の言葉

太平洋は、その名に背いて、いま暗澹として波騒いでゐる。

楔形に打ち込むわが南進勢力と、パナマ運河、眞珠灣軍港、シンガポール軍港を東西に連ねる敵性英米の生命線が、西太平洋に直角にクロスして、一觸即發の殺氣を漲らしてゐるからだ。

太平洋問題が日米問題に限局されてゐた時代は、すでに過去となつた。そして、「太平洋新秩序」の建設は、わが東亞新秩序と、大東亞共榮圈建設の前提たり、結果たる關係において、來るべき世界新秩序の不可欠な基底的要件となつたのである。

西半球の咽喉であり、太平洋の眼であるパナマ運河も、洋自體の變質に伴なつて、著るしい變貌を呈してきたことは當然である。

いよいよ熾烈をきはめつゝあるこの世界變革戰の進行過程において、「パナマ運河」と題する一書を世に贈ることができたのは、譯者の特に喜びとするところである。

x

x

パナマ運河は漏斗の先である。その漏斗には、口が二つある。——東と西に。

ちよつと珍型な、アメリカ製漏斗である。

大西洋といふ大盆の水は、この漏斗を通して太平洋の水と握手し、「わが太平洋」の水は、ヨーロッパ、アフリカと、西半球の東岸を洗ふ潮と合する。

東洋と西洋と、米洲の東岸と西岸とは、かくしてパナマ運河によつて結ばれた。

青年國アメリカは、このパナマ運河の開通によつて、三つの空前の大利益を獲得した。その第一は、アメリカ外交の大原則をなすモンロー主義の確立、モンロー主義による汎アメリカニズムの建設、すなはちラテン・アメリカの把握に成功した。その主なる理由は、——アメリカ東部の工業中心地と資源豊富な未開發の市場南米西岸との距離を半減したにある。

ニューヨークから南米南端のホーン岬を迂回して、チリーのヴァルパライソに至る舊體制航路は、九千哩もあつたものが、パナマ運河經由によれば、僅か五千哩以下に短縮され、もつと北のペルー、コロンビアなどへは一層近くなつた。「文明は距離の短縮である」といはれるが、この劃時代的な短縮が、南米西部諸邦を完全にアメリカ文化圏に取込んだことは當然であり、南米全體がヨーロッパよりも、アメリカのドル文化に歸屬せられるに至つたことも當然の歸結である。そこに、モンロー主義確立の基本的要件がある。

第二、パナマ運河は、日本以下のアジア諸國と、アメリカの工業中心地との距離を著るしく短縮した。ニューヨーク・上海間は、スエズ航路によれば、リヴァプール・上海間より二千哩遠いが、パナマ經由によれば

ば逆に二千哩だけ近くなる。この事實は、アメリカ外交のもう一つの原則であり、現にもつとも頑迷にわが東亞新秩序の建設を妨害しつゝある。門戸開放、機會均等主義の支柱をなしてゐる。

第三の利益は、アメリカ自身の東西兩海岸を海路數千哩短縮し、高率の横斷鐵道に代る新らしき運輸交通路を提供するとともに、大西、太平兩洋におけるアメリカの海軍力を、一躍二倍以上に増強する結果を齎らした。この事實が、一般にはそのドル外交、帝國主義的膨張政策、特に底止するところを知らぬ對日攻勢の強化、太平洋制覇の野望に拍車してゐることは、改めて説くまでもあるまい。

かくして、パナマ運河の建設は、アメリカのあらゆる領域における飛躍的發展の基礎をなし、今日みやるやうな、世界國家への進展のスターティング・ブロックとなつたのだ。英國植民地時代のアメリカと、英米聯合勢力の歴倒的な指導者として、われらが世界新秩序への努力に眞向から抗争しつゝある今日の姿とを比較するならば、パナマ運河が、アメリカにとつていかに絶大な推進力であつたか肯づけるであらう。

そこで、今日の敵性英米の勢力を結成せしめた抑もの原動力が、パナマ運河そのものであるといふことは、何等誇張でも譬喩的表現でもなく、世界の凝視がいまこの一條の人工水路にフォーカスをおいてゐることも、決して複雑怪奇な現象ではない。

諸刃の劍といふものがあるが、パナマ運河はいまや、同時に日本と盟邦獨伊に砲口を向けた諸口の巨砲と

化したのだ。

有史以來空前の、世界一海軍の兩洋作戦は、極めて象徴的にこのパナマ運河に表現せられ、最高度に現實的に、パナマ運河によつて制約されてゐる。國家總力戦となり、無距離戦、無時間戦に飛躍した近代戦は、パナマ運河を巨砲と高射砲と、飛行機と、潜水艦の、世紀の一大饗宴場に化粧させた。軍事小説のフェゾリット・テーマである運河の爆破閉塞が、傳へられる第五列の暗躍によつて、刻々現實化への途を奔りつゝある時、世界舊秩序の守護者をもつて任ずるアメリカが、そのシンボルであるパナマ運河に新兵器の甲冑をよるはせ、泥濘式に運河閘門の増設に狂奔しつゝあることは、アメリカニズムの至上命令に基づくのである。と同時に、そのアメリカニズムなるものが、いかに貧困、粗製濫造的な世界觀であるかは、パナマ運河の本質的脆弱性と、この頸動脈線を通過するアメリカ兩洋艦隊の致命的缺陷に具象されてゐるともいへやう。

x

x

けれども、パナマ運河の神話時代は、決して諸口の巨砲ではなかつた。それは、東西の財貨を交流させ、未知の世界を拓き、芳醇な文化のカクテルを醸し出すシューカーであつた。

「光は東より」といふが、その頃の「東」は、太平洋を越えたパナマの方に當つてゐたといつてもよからう。文字通り、パナマ運河は「人類福祉の増進に寄與した」のであつた。

それは、ゲーテのいだいてゐた巨大な夢からも明らかに窺へやう。三つの科學的、平和的な、政治經濟

的な夢であつた。——軍事的な夢想ではなく。

その第一は、——いやその三つとも、ゲーテの親友フンボルトの「新大陸踏査記」からヒントを得て、フンボルトとの清談ちうに述べてゐるのだが、——その第一がパナマ運河であり、第二は、イギリスがスエズ運河を獲得すること、第三が中欧を縦に貫くライン・ドナウ運河の開鑿である。

ゲーテはこの三つの運河を、人類史上最大の「自然征服」として夢想してゐた。しかも、「自分は、もうだいぶ歳をとつてゐるから、それをこの眼でみるまでは生きてゐられまい。あゝ、もしそれを見ることができたら、どんなにうれしうかなあ」と、繰返し繰返し、少年のやうな憧憬と悵歎を洩らした。果せる哉、かれはその一つをだにみることでできずじまつた。が、その靈魂は、その後幾年かして、遙か十萬億土で會心の笑を洩らしたに違ひない。それは、三つの夢が、次々に現實になる日がきたからだ。

順序からいへば、後の鳥が先になつて、第二のスエズ運河がトップを切つた。——フランス人レセップスの仕事である。

第二がパナマ運河の建設、——アメリカの工兵將校ゴータルスの仕事である。開通したのは、ゲーテの豫言から八十七年目であつた。

第三のライン・ドナウ運河は、まだ實現されてゐないが、これを成し遂げるものこそ、ヒットラー・ムッソリーニ樞軸以外の何人でもない筈であると、筆者は期待してゐる。

そこで、タイトルの「パナマ運河」に戻るとしよう。

スエズ運河のフェルチナン・ド・レセップスは小學校の讀本にもでゝゐるが、パナマ運河の建設者ゴータルス少將の名は、知つてゐる方が不思議なほど馴染がない。それが、筆者がこの譯業を思ひ立つた理由の一つでもある。

今日まで、かれの名をもつとも印象的ならしめたものは、寡聞にして「パナマ運河物語」の一篇以外に知らない。——(山本勇三氏著「心に太陽を持って」の巻頭篇)

それは、實に感に堪へない、羨ましい人間愛と、逞ましい科學的闘争の物語である。子供たちのためには、勿論これが第一書であり、恐らく唯一の書であらう。

ちよつと私事に互ることを許していただきたいが、私はつひ御近所に住ひながら、一度も拜晤の機に恵まれてゐないが、拙息浩一が山本さんの令嬢玲子さんと小學校が同級であつた關係もあつて、山本さんの「パナマ運河物語」には敬意を表し、人そのものにも常に敬愛をいだいてゐる。で、この「大人のためのパナマ運河物語」ができれば、まづ最初にみていただきたい一人として、視力の衰へに悩まれるといふ先輩の名を書留めてゐる。

x

x

パナマ運河は、ゲーテの夢を待つまでもなく、すでに紀元一五二〇年頃、イスパニア王チャールス五世治下のアントニオ・ガルヴァムの企圖に端を發し、その後歴代のイスパニア王がその計畫を支持してきたが、多少とも現實に工事に着手したのは、やはりレセップスその人である。けれども、平沙運河のスフ入りエンジニヤは、山嶽運河の反撃に脆くも一敗地に塗れ、七年の苦闘に二萬二千の生靈を熱帯の原始林に奪はれて旗を捲いた。そして、その古戰場に三度目の血闘を挑んだアメリカ人によつて、はじめて有史以來最大の自然征服は完遂されたのである。

人類の偉大な事業といへば、まづピラミッド、バビロンの宮殿、萬里の長城等が擧げられるが、何萬年の昔から、凡そ人間が地殻に刻み込んだ鑿の跡のうち、パナマ運河ほど巨大なものはないのみならず、これほどに凄まじい人間力の發揮を必要とし、科學の鐵人の格闘力と、そして特に組織力とを要請した自然との白兵戦は、人類史上にかつて例をみない。最大難關のキエレプラ<sup>カッタ</sup>切割の如きは、「熱帯の炎熱と土の氷河と闘ふ地獄の咽喉」として恐れられ、果しなき濕地のひろごりは、まだ豫防法の知られてゐない黃熱病のエルサレムであり、——そこは世界一の不健康地であり、労働者は、運河を掘る同じシャヴェルで、自分の墓穴を掘つてゐたのだ、——魔の熱帯河は年中所嫌はず溢れだす上に、一夜にして數ヶ月の労働を埋めつくす大地の逆襲と、——人間力の微弱さを嘲笑ふ大自然の暴威は、スクラム組んで、その微かな鑿の跡を抹殺し去らうとした。この大自然との格闘がすでに、數萬の大軍を向ふに廻す戦場の戦ひより幾倍も深刻殘忍な死

國であるのに、兩洋潮位の大差を征服し、蜿蜒九マイルに互る岩山を貫き、世界最大の軍艦と商船とを泛べるだけの水を支へる大閘門——その五十の鐵扉は一つ一つ、六階建の大ビルに匹敵する重量がある——を建設していつたのだ。

が、こゝに屋上屋を架するやうな細説を試みるのが筆者の意圖ではない。たゞいはんとすることは、これほど凄烈壯大な戦ひも、結局單なる科學のみの勝利ではないといふ一事である。地峽地帯の建設軍は、アメリカ人、ニグロ、メキシコ人、イタリア人、ギリシヤ人等々の複雑なる一大雜軍である。これに統一ある組織を與へ、盛り上がる熱情のまゝに、挺身的な職域奉公を實踐せしめ得たものは何であつたか？

それは科學ではない、——人間である。人間同志の理解に基づく眞の協力であり、偉大なる組織力の勝利である。パナマ運河成功の秘訣こそは、いま喧ましく叫ばれてゐる下意上達の實踐であり、協力によつて自然を征服せんとした指導者の正しき意圖と、不屈の信念である。日本の「科學する心」はますます鍛えられねばならぬ。が、科學はあくまで手段であり、武器である。根本にあるものは、科學を文化と人間福祉のために驅使する人間であり、科學はその政治性の故に、政治と結びつく場合においてのみ、最高の威力ともなり、最大の福祉ともなるものであることを銘記しておきたい。國家總力戰、高度國防國家、眞體制建設の妙諦も、本書に示唆されるところが非常に多い。

船舶局長として、世界大戰當時の船腹擴充計畫遂行の衝に當り、さらに兵站總監として未曾有の大戦を賭

つたゴータルスの體驗も、戦時下日本の他山の石たる資格を十分備へてゐる。

x

x

パナマ運河は大ルーズヴェルトの下に、大戰の申し子として生れ、ルーズヴェルト現大統領の下に、世界舊秩序死守の要石の役割を演じてゐるのも、一種の奇縁とでもいふべきか。ゲーテの夢が、その祖國ドイツへの、——世界新秩序への挑戦基地として現實となつたのも歴史の皮肉である。

二道運河のパナマは、いま急速に第三の海軍専用閘門の建設を急いでゐる。この新閘門は現在のもとの並んで——攻撃の危険を分散するために、現存閘門との距離を一マイル半とつてゐる——幅百四十フィート長さ二百フィートあるから、最近起工された四萬五千噸級主力艦（長さ八八〇フィート、幅員一〇八フィート）でも悠々通航できるやうになる。現在閘門の幅員は一一〇フィートで、主力艦ネヴァダ（幅員一〇七フィート一インチ）、航空母艦サラトガ（幅員一〇五フィート六インチ）級は、損傷の危険に脅やかされつゝ、やつと通航できるほどの窮屈さである。現運河工費の半額以上に上る二億七千七百萬ドルの巨費と、四年半乃至六年の長年月を要するこの擴大工事が、世界一海軍の兩洋作戰に貢獻し得る日を迎へた時、果してアメリカ自身の運命がどうなつてゐるかは、太平洋の底に棲む魔神にでも尋ねるほかはあるまい。

だが、心せよ、——われわれは、太平洋を脅やかすこの巨大なる銃眼から、一瞬も眼を放してはならない。皇紀二十世紀の第一年は、世界決定戰の年であり、「パナマ運河の年」でもある。

本書の刊行に當つて、抑も事の起りから一切の援助を吝まなかつた長友阪本勝氏、貴重な資料と助言とを與へられた石丸藤太、高梨菊二郎兩氏、装幀を擔當された柳瀬正夢氏、特殊のテクニクの教示を受けた家兄早坂一郎、それから困難な諸條件を克復して、刊行一切の任を遂行された栗田書店永田周作氏に對して、深く御禮を申上げる。

皇紀二千六百年双十一祝典の日

吉祥寺にて

早坂二郎

一、本書は、Joseph Bucklin Bishop, Farmham Bishop 父子共著「Goethals — Genius of the Panama Canal」の全譯である。

一、【】は譯者註

## はしがき

——父子二代の述作に序す——

ゴータルス將軍は、「ジョン・フリッツ賞牌受領者列傳」に出てゐるやうな短い略傳以外には、自分の傳記を書くことを許さなかつた。晩年にいたつて、自ら回顧録の執筆を企てたが、延引あまり久しきにわたつた。當時その仕事に當つたのは、ゴータルスの親友であり、セオドル・ルーズヴェルトの傳記作者たる、私の父ジョセフ・バックリン・ビショップである。しかし、父はすでに高齢に達してゐた。ウエスト・ポイントでゴータルスの葬儀が行はれた日、頽齡八十歳の父は、半歩刻みの歩調で靈柩彈藥車の後に従ひ、嚴冬の吹きさらしのなかを、脱帽して、墓穴の側に立つてゐた。主治醫のアレクサンダー・ランバート博士は、父が健康を害つたのはそれ以來であると診斷した。

父が、本書第五章冒頭の數頁まで書いただけで亡くなつたことは、歴史にとつての一損失であつた。ゴータルスやルーズヴェルトをはじめとして、その他、父自身が重要な役を勤めたこの劇の、舞臺や樂屋裏で活躍した大小の役者連について、父がもつてゐたほどの知識をもつてゐる存命者は一人もない。もし父がもつたと長命で、ゴータルスの一生ちうのあの偉大なる時期、——パナマ運河建設の部分を書けたならば、一層機

はしがき

一

微に通じた物語を傳へ得たであらう。私は責任をもつて、ルーズヴェルト大統領に対する父の秘密報告の抜  
萃を、こゝにはじめて發表することとした。

これらの報告の引用を許されたことに對して、私はセオドル・ルーズヴェルト夫人に感謝する。議會圖書  
館の、これら文書の管理係であるイー・ケー・フィッツパトリック夫人に對しては、熱心な御助力に對して  
謝意を表したい。ゴータルス家の方々は、將軍の個人秘書たちが非常に用意周到に整理した將軍の書類を、  
全然自由に閲覽させて下さつた。故人の令息ジョージ・アール・ゴータルス大佐には、専門的な細目を調べ  
るお手傳ひを願つた。ルーズヴェルト記念協會は、私に靜かな一室を與へ、圖書館の使用を許し、ルーズ  
ヴェルト館の全館員のサーヴィスを供與されたが、この人々は及ぶ限りのあらゆる援助を與へて下さつた。

私は、資料蒐集に關して個人的助力を與へられた合衆國船舶局長デー・ヴィー・オコンナー氏、パナマ運  
河ワシントン事務所長イー・エル・フリント氏に對して、さらに前大審院長ウィリアム・エチ・タフト氏以  
下數十氏の御厚意に對しても謝意を表する。パナマ運河知事エム・エル・ウォーカー將軍外、ゴータルス將  
軍の下に勤務せる數氏編纂の、美麗なる記念帳よりは多くの貴重なる材料を得た。

ファインハム・ビショップ

目次

譯者の言葉.....一

はしがき.....一

——父子二代の述作に序す——

第一章 運河の「大佐」<sup>カーネル</sup>.....一

第二章 騎士魂のニューヨーク兒.....三

第三章 ウェスト・ポイントの迎年ストーム.....三

第四章 青年將校時代の土木工事.....四

第五章 ポート・リコ島の無血戦.....五

第六章 海をゆく參謀將校.....五



第七章 ゲーテよりゴータルスへ……………五

|| 受け継がれた「バナマ」のバトン ||

第八章 前 兆……………二六

第九章 「兵とともに進まう！」……………二九

第十章 足を大地につけて……………三三

第十一章 地殻に挑む技師長……………三七

第十二章 情知る専制王……………四〇

第十三章 世紀の偉業成る日……………四六

第十四章 大西洋を跨ぐ橋……………五〇

第十五章 木と鋼の火花……………五二

第十六章 大戦を賄ふ……………五五

第十七章 死の床の顧問技師……………五九

第十八章 最後の榮譽……………六八

### 第一章 運河の「大佐」

辛抱できねえ目に遭はされたつて？

大佐にいつつける、

奴らの仕打ちをぶちまける、

おいらの大佐に。

情ねえこと悲しいことは、

みんな大佐にもつて行け、

わかってくれるし、御承知なんだ、

おいらの大佐は。

——バナマ運河労働者小唄、一九二二年——

第一章 運河の「大佐」

ゴータルスは少将になり、民間技師として世を終つたが、われわれパナマ地峡で苦樂をともにしたものに  
とつては、かれはいつまでも「大佐」なのだ。運河地帯には、他にもたくさんの大佐がゐた。ガツンのサ  
イバート、キユレプラ切割のガイラルド、アンコンのゴーガス、ラス・カスカダス駐屯の歩兵第十聯隊長、  
それからトム・クック大佐などである。けれども、だれかに「大佐」のことを話してゐる運河の従業員が  
あれば、われわれはいつでも、簡単に、あれはゴータルス大佐のことだとなづいたものだつた。

そこで、旅行者の方々が、先を急ぐ旅でもなく、パナマ鐵道の汽船のデッキに、或ひは委員連のアイスク  
リームから一時の汽笛が鳴るまでの間、地峽委員會の俱樂部の玄關に、たゞ暇つぶしをられるのだつた  
ら、それこそその暇に、この古顔がおとつときの大佐の話をお聴きになるといふ。話のすゝむところには、  
その古顔は、十人もそれ以上もの人間に、ギッシリ取巻かれてゐるであらう。その連中は、みんなその話も  
聴きたいが、それより自分も乗り出して、御大に關する自分だけの見聞を一席辯じたがつてゐる連中なのだ。

その一例として、車輛修繕工場のシューティーをもつてこよう。幾臺もの鑿岩機は、リッチャーウッドの  
峽地から人間の脚ぐらゐの長さの岩つかけを掘り起すし、何臺もの蒸氣掘鑿機は、オリヴァーの捨石場に五  
トンもある岩塊を落としてゐるので、シューティーはじめ車輛修繕工場の連中は、毎日々々うんとこさ仕事  
を持ち込まれて、とてもその日のうちにはこなし切れない有様だつた。ところが、監督は白人のアメリカ勞  
働組合員を増員せずに、本式の車輛修繕の仕事に、ジャマイカの黒人の手傳ひを雇ひはじめたので、普通の

賃銀を拂つて半熟練労働しか得られず、職工一人當りの成績もグッと落ちてしまつた。そこで、組合労働者  
の側から抗議がでたが、監督は満足な回答を與へなかつた。

「そこで、おいら集會を開いたんだ。」と、シューティーが語つた。「その結果、次の日曜の朝にキユレ  
ラに乗り込んで、大佐に話しようつてことになつて、おれもその委員の一人に擧げられたんだ。大佐はみん  
なに煙草を廻して、それから、おれたちの考へを聴かうつてわけさ。おいらはかういつた、タフト大統領は、  
運河工事のうちで、白人のアメリカ労働組合員を使へる仕事には、全部組合労働者を使ふつて、組合と協定  
を結んだ筈ぢやないかつてね。その通りだつて、大佐はいつた。そこで、車輛の修繕もその種類の仕事ぢや  
ないか、銀建賃銀のジャマイカの土人どもでなくて、金建のアメリカ人を使ふべき筈の仕事ぢやないかつて  
いつたんだ。その通りだつて、大佐はいつた。そんならひとつ、この問題を大佐に自分で調べていたゞきた  
いもんだがと切出したんだ。大佐が急に例の笑ひ顔をして、うなづいてみせたとき、おいらもみんなニヤニ  
ヤしちまつて、すぐ帽子をつかんで、すつかりいゝ氣持になつて、部屋をでたんだよ。

ところが、觀面にその翌朝さ、騒々しいリッチャーウッドの工場の仕事場から這ひだして、うーんと身體  
を伸ばした途端に、——すぐ傍に、大佐が突立つてゐるぢやあないか。だれもその姿をみたものもないし、  
足音を聞いたものもないんだ。なあに、大佐は足音を忍ばせてやつてくるやうな方ぢやありやしない。ど  
ころか、脚は速いし、それに、檢分にくるとき、樂隊を先に立てゝくるやうなことは絶對ないんだ。たゞそ

ここに突立つて、あたりを見廻してゐるんだよ。」

「で、見廻したゞけで、どの程度に工場のことがかつたものかね？」いさゝか横柄な、疑ひ深さうな顔付した事務員が口を挟んだ。「大佐は、それで、工場のなかのことを何もかも呑込んちまつたんかい？」

「工場にや、大佐の知らない道具はひとつもありやしない、——實によく知つてゐるんだ。」ショーティーは、すこぶる眞剣な調子で答へた。

居合はせた工夫どもは、その通りだといふやうに、大きくうなづいた。工場には、大佐の知らない道具はひとつもない、——實によく知つてゐるのだ。

「で、大佐あなんてつたい、ショーティー？」鑿岩機係の男がたづねた。

「『ジャマイカ人に、他の道具に手を觸れさすな。』——これが大佐の御託宣さ。監督の奴を叱り飛ばしたんだ。」

「ですが、……どうも、……それぢや、アメリカからもう七十五人、……八十人ほど、賃銀の高い組合労働者を呼ばなきゃなりませんまい。」と、監督がムニヤムニヤいつた。

「早速電報打つて、ニューヨークから呼びたまへ。」大佐は落着きはらつて相手の顔をみつめながら、命令した。「最初つから、さうすべきだつたんだ。責任は君にある。ぢや、失敬！」

さういつて、大佐はでゝ行つたんだ。」

事務員が、恐ろしく知つたかぶりをしていた。

「うむ、だが、タフトから自由手腕を任されてゐたとしたら、大佐は監督の肩をもちやしなかつたかな？」

軍人精神なんて、……」

「おいつ、お前、バナマへやつてきてどれほどンなるんだい？」大男の鑿岩機係が、恐ろしい剣幕で呷鳴りつけた。「ヘン、やつとこさ六週間だつて？ こちとらアやつてきたなあ一九〇五年でな、その前にや、群島の駐屯軍の兵隊で、軍人精神にやお馴染なんだ。大佐あウエスト・ポイント出だが、一體どんな精神をもつてゐると思ふんだね？ 勿論、大佐あ軍人さ。勿論、組合なんかぶつぶしちまつて、労働者はすべて、列を作つた兵隊みたいにな、萬事命令服従の関係でやつていきはることは山々だらうさ。ゴータルスが大統領だつたら、シャグル河でスケートのやれる世の中ならねえかぎり、組合と協定なんか結びやしなかつたらうさ。だが、……さあ、こゝが肝腎なんだぜ、おい、……ビッグ・ビル【大統領ウィリアム・タフトの愛稱】が政府としての約束をした途端に、その瞬間からだ、その約束は、大佐にとつて、職務上の法律となり、規則となり、慣習となつたんだ。大佐あ未だかつて、どうすれば約束の履行を免れられるかなんて思案に、一分間たりとも費やしたことなんかありやしない。お前はお前の仕事にありついたので、その仕事をやつていける。お前はお前の権利を握つたんだから、その権利通りにやつていける、いつもこれなんだ。」

「大佐にとつちやあ、ほんのちつぽけな問題なんだが、おれんところでも、うまく取計らつて貰つたことが

あるぜ。」と、友愛會の男が證言した。「ガツンの土取場でトロの綱をひつばつてゐるてえと、線路の傍をやつてくるのは、ほかでもねえ御大ぢやねえか。ぶらりぶらりエンジンのとこまではひつてきて、水を一杯くればつてわけだ。」

運轉室の冷蔵庫の奴を一杯ついでだと、「ひどく暑いな。」つて御挨拶だ。

「まったく暑いです。みんなあ、毎朝こいつに水を十斤づゝほりり込んでる筈だと思つてゐるんですが、近頃ぢや一斤以上は手にはひらないんでしてね。」と、おれがいつたもんだ。

大佐はなんにもいはずなかつたよ。だがいゝかい、翌朝にや氷の山をひつばらされることになつたんさー！」

「さうさう、ほかの連中も、ありやあ儲けもんだつて喜んでたぜ、確かに。」と、次に控えてゐた男が合槌打つた。「覚えてるかね、ピーター・マギル(註)の工夫頭をさ、ガレゴスの連中を追ひこくつてた、——奴あ、給料日毎に、輩下のもを一人々々出頭させてやがつたんだ。その連中が結束して、どうやらかうやら英語をこなせる奴を何人か代表に選んで、キュレプラに乗込んで、大佐に談じ込んだのだ。ところが、工夫頭の奴さん、足もとの陥し戸がバツと口をあけて、あつといふ間もなく陥ちこんぢまひ、陥し戸が跳ね歸つたときによ、どこへいつたか、姿は消えつちまつてゐるつてわけさ。今ぢやその男は、仲間の懲役と鎖繋ぎになつて、運河地帯の道路工事をやらされてるよ。」

(註) 運河地帯に通用する「ド・ド・ド・ド・ド」の發音。

「それを、僕の角度から一瞥するとだね、」誂へ仕立の制服に、新しいステットソン帽をほんの心持斜にかぶつて、氣の利いた風をした、威張りくさつた運河地帯の巡查が口を挟んだ。「僕あ二十年かといふもの、軍人或ひは警官を勤めてきたがね、これは僕の携はつた職業のうちもつとも廉潔方正な職業だね。僕は警官が好きだ。今ある人間を逮捕しようとする場合にもだね、まづもつて、その人間の政黨關係を調べなきゃならないなんて必要はないんだからね。キュレプラで古くからの同僚の、マツクのことを話したことがあつたつてかね？ そのマツクが、あるとき巡邏をやつてゐると、パカパカと大きな蹄の音がして、二人の若いものが勢ひよく飛ばしてくる。そこは、妻帯者の住宅區だから、そんなに飛ばしちや、その邊の子供を蹄にかける惧れがある。よしつといふので、マツクは咄嗟に停止を命じ、亂暴な乗馬をやつたといふ廉でひつばつていつた。署の内勤の警部が二人の若いものゝ氏名を訊問したところが、その一人はトム・ゴータルスで、もう一方はガイラルドの息子だといふことがわかつた。そこで、警部はそのまま二人に歸宅を許して、處罰をしなかつた。」

二人は家に歸つてから、ずいぶんいろんなことをいつたもんだらうと思ふがね。とにかく、大佐はその話を聞いて、一も二もなくまわつちまつたんだ。大佐のはつきりした性分は、だれでもよく知つてゐる通りだからね。そこで、大佐は二人を並べておいて、もう一度こんなことをしでかさうもんなら、馬を取上げつちまつて、テクラせるから、さう思へと申し渡した。それから、まったく思ひ切つたやり方だが、鼻息をう

かどつた警部を免職して、警官の職責を盡した功を賞して、その金筋をマックに與へたもんだ。

いゝかね、これが僕のいふ公正なんだ。だが、あの人の世界ぢや、かういつたやうな公正ぶりは枚擧に違なしなんだからね。」

公正、——これこそ、かれらが大佐について話す幾百もの話の、殆んどすべてに通ずる基本語である。かつてわれわれが、道路の向ふの、黒赤塗分けのトタン屋根の教會堂のなかで、ジャマイカ土人の我鳴る讚美歌に聞き入りながら、キュレブラ驛で南行の汽車を待つてゐるとき、ある古顔が、大佐は大技術者だといつたが、かれの部下たちは、その人などゝは違つて、大技術者としてのかれを記憶してゐるのではない。

「おれは二十五年間鐵道の方に勤めてきた。」古參の男が、回想的な調子で語りだした。「だが、この地峽の鐵道以上に美事にやつてゐる鐵道にや、お目にかゝつたことがねえ。おれあジム・ヒル以來歴代の社長の下で、全線を上り下りして働いてきたが、なんといつても、大佐ほど曲つたことの嫌ひな大將はねえな。」

大佐が理非曲直の纏れを裁くときのやり口は、メイン州のハリー・ニップスがよく語つてゐた、ホース・エヴェリー老を彷彿させる。春になつて、ドツと伐りだされた材木は、よく河の彎曲部にひつかゝつて動きがとれなくなつてしまふことがある。激しい急流は、後から後からたくさん材木を流してくるので、五十萬本もの丸太がギツン押し詰まつて、巨大な材木の山を盛り上げるが、いよいよ伐採夫たちの手に負へなくなつてくると、親方は大急ぎでホース・エヴェリー老を迎へにやる。やがてやつてきたエヴェリー老は、

岸のところにしやがみ込んで、ちつとその材木の山を吟味する。その間、みんな老の後に控へてゐるので、老はたつた一人で材木の山と睨めつこをやつてゐる。しばらくすると、エヴェリー老はツカツカとその材木の山に登つていつて、竿で探りをいれる。よくよくの場合には、發破を一發か二發喰はせる。と、みるみるうちに材木の山はほぐれはじめ、無数の丸太はドツと流れだす、——ホース・エヴェリーはカンどころの丸太を見當つけて、鮮やかにそいつを叩きつけたのだ。

大佐は、ちやうどそれと同じやうな、問題の根本を見抜く分析力をもつてゐた。そして、一度びそのカンどころの丸太を發見すると、問題はたちどころに解決した。大抵の場合、かれは軽く問題を片づけた。單に、すべての關係者に問題の真相を眞實の關係において眺めさせることによつて、その争論を根こそぎ笑ひ飛ばしてしまつた。ユーモア氣分は、人をして人生の愉快な不調和に眼を開かしめる調和の感覺にほかならない。ゴータルスはこの貴重な天稟を具へてゐた、——そして、それをナブキンにくるんでおきはしなかつた。日曜の朝毎に、キュレブラのかれの事務所に不平や不満をもち込んでくる陳情者たちが、十人のうち九人まで、シューティーやその仲間のやうに、大佐の別れ際の笑顔に、ニヤニヤ相好を崩してでゝくることは、だれでも知つてゐる評判の事實である。かれは眼で笑ひ、唇でも笑ふ。かれはいつでも、相手とともに笑ふが、斷じて相手を嗤ふやうなことはない。【大佐の日曜日の會見日は、日曜裁判所として有名であつた。】

しかし、その大佐の事務所は、もつと嚴格な種類の會見が行はれることでも有名である。あるとき、隣家

の夫人と醜關係を結んだある大幹部が、キュレブラに喚びだされた。ちつと相手の眼を見据えながら、冷然たる態度でかういふ宣告を下した大佐の鋼色の碧い眼には、いつもの上機嫌が影を潜めてゐた。

「君は、今度の船で北へ歸りたまへ。君の休暇は、その出帆當日からはじまることにする。ニューヨークに到着したら、休暇明けの日附で辞表を書いて、送つてよこしたまへ。辞表は受理することにする。」

その男は、猛然と抗辯しはじめた。大佐は、たゞかう附加へたゞけだつた。「ブランク夫人は、君より先に乗船させられた。」

その男は一言もなく、帽子を掴んでゝいつた。

狭量といはうか、ヴィクトリア中世風といはうか、ピューリタンのといはうか？ どう呼ばうと、御隨意である。大佐の眼には、罪のもつとも憎むべきところは、罪人の利己主義に存すると映するのだ。かれは自分一個の情慾を満足させるために、同僚の幹部のみならず、あらゆる運河工事従業員を、また運河開鑿の事業に助力させるためにかれを地峡に派遣した、あらゆるアメリカ國民を裏切つたのだ。この男は助力するどころか、仕事の妨害をしたのだ。だから、辭めて貰はなけりやならない。眞つ先にくるものは仕事で、それ以外のものは一切後になる。これが大佐の信條であつた。

大佐の個人秘書であり、その在任ちうを通じて、キュレブラにある出張所の主任を勤めてゐたダブリュー・エチ・メイは、その片腕として親しく接してゐたので、大佐の人となりことを知ること實にいたれり盡せり

である。現在ルーズヴェルト館の地下室に收藏されてゐる浩瀚な書翰類、命令書、その他のゴータルスの文書を、緻密な正確さと情愛のこもつた注意とをもつて、分類し、整理し、カタログを作つたのはかれであり、その勞に對しては、世の傳記作者は、いひ表はしやうもない感謝の念をいだいてゐる。運河工事の進行してゐる當時、ある晩キュレブラで語つた、このビル・メイの感想は、よく大佐の特徴をとらへてゐる。

「大佐は、書類をたくさんもつてこさせて、机いつばいに散らかさせ、それから寫眞屋を呼んできて寫眞をとらせ、いかにも忙しさうなところを世間にみせようなんて芝居氣は微塵もなかつた。僕の勤先には、現にその手をやる人間もあつたが、大佐は、そんな連中とは種が違ふ。」

ゴータルスは、そんな人柄ではなかつた。お體裁を飾らない人間の素つ破抜きをすること、もつて生れた性分で、まったく口先のお上手のない人間の生涯を貶しつけることは、かへつて困難である。が、さういふ人間を神様扱ひするといふ、反對の危険を免れることが一層困難であることはいふまでもない。ゴータルス崇拜といふものが存在することは否定し得ない事實であり、その熱心な信者は古い運河工事従業員である。かれらはその存命ちうは大佐を崇拜し、大佐が世を去つた今日では、その死後の名聲に禮拜を捧げてゐる。かれらはざつとばらんにセンチメンタルで、感情的であり、その信仰の對象を冗談扱ひにしたところで、あの僧侶と法師の間に行はれた、キリスト教とユダヤ教の功德争ひの公開討論に臨席した、信心深い中世の諸侯よろしく、すこぶる安全なものであつた。その討論の席上で、法師が四福音書の據りどころに關するいさ

さか突込んだ高等批評をはじめたところが、領主は、「嘘つけつ、この穢れた不敬者奴がつ！」と呶鳴りつけて、矢庭に演壇に飛び上り、戦斧をふり上げて、法師の頭をぶち割つてしまつた。

傳記作者は、主人公の信者であつてもいけなければ、叛逆者であつてもいけない。大佐は、どんな禮讃賦も必要としなかつた。かれは他の人々に對して公正な態度をとつたが、自分も正しくその公正な取扱を受くるに足る人物である。けれども、あの運河地帯の巡査のいつたやうに、「かういつたやうな公正ぶりは枚擧に違なし」なのである。

## 第二章 騎士魂のニューヨーク兒

サラセン人の恐怖たりし舊姓ボニ・コレは

主君より賜はりしゴータルスの名の下に、

三人の若き捕虜の命をサラセンの武將の手より救ひ、

己が紋章をその處女らの初々しき頭もて飾らしめられぬ。

——ル・マニール「ベルギーの榮譽」第八頌

當時の駐米フランス大使ジュール・ジュスラン氏がパナマ地峽を訪問して、ある日曜の午前をキュレブラで過したとき、ゴータルス大佐が、やつてくる陳情者の一人々々に對して、卽座に、手輕に裁きをつけてやつてゐる様子を眺めて、この學者肌の外交官は、大佐は、ヴァンサンヌの櫛の木の下で人民を裁いたサン・ルイ王に比すべき人物だと、力をこめて語つた。さういふ比較がであるのも、このアメリカ人のデスクの椅子のうしろに、鎖子鎧に身を固めた、フランドル【今のベルギーのフランダース】のジャスタス・ゴータルスの幻

のやうな姿が立つてゐるからだ。昔の年代記作者の誌すところによれば、この人は、「一二五〇年、フランス國王サン・ルイに従つて、異端者回教徒に對する第一回の十字軍に従軍し、拔群の殊勳によつて、明鑑の譽高き國王より騎士の稱號を授けられ」た人物である。

ゴータルス家の家系は、家系史の驚異のひとつである。始祖であるローマの元老院議員ホノリウス以來、千年以上も續いてゐる古い家柄である。ホノリウスは、片手を白の長い外衣の胸に突込んで雄辯をふるふ、型通りの元老院議員とは全然違つたタイプであつた。言葉も、だいぶ初期のイタリア語になりかゝつてゐた、非常にモダンなラテン語を使つてゐたが、かれがチラと元老院に姿をみせると、口舌の徒は先を争つてローマの町を逃げだすほど恐れられてゐた。ホノリウスの時代のローマは、野蠻な、墮落した九世紀のローマで、聖都は地上のもつとも穢れた場所のひとつであつた。當時のローマを支配してゐたものは、ところ嫌はず市街戦をおつはじめめるやうな無頼の徒の一味であつたから、その政治も紊亂の極に達してゐた。不逞な悪黨の親分どもは、自ら諸侯だ、元老院議員だと稱し、完全にその勢力下にある法王はじめ、地方の高官を選挙する會議を開くたびに、その期のローマ元老院を構成するといふ風であつた。かれらがセント・ペテロ寺院の法座に挙げたものゝなかには、まつたくびつくりするやうな人物もあつた。さういつた選舉で、ホノリウスがどんな投票をしたかは知らないが、戰場においては、勇武な聖海の防護者となつた。紀元八八〇年、サラセン人がアフリアに侵入してきたとき、ホノリウスは進んでこれを邀へ撃ち、敵將と一騎討ちで渡り合

つた。サラセン人の偃月刀は、イタリア人の頸をめぐけてふりおろされたが、ホノリウスが鐵の頸甲を當ててゐなかつたら、バツサリやられてゐるところだつた。ホノリウスは立ち直る暇も與へず、一刀の下に回教徒を斬り捨て、勝名乗をあげた。イタリアはニクネームの國である。で、ホノリウスの後裔は、爾來「ボニコリ」「立派な頸」の意」と呼ばれるやうになつた。——かれらはみな頑丈な頸をしてゐた。おそらく、つむじ曲りの強情な奴らだといふ意味で、反對派の連中がつけた綽名であらう。

ホノリウスは八九〇年、ローマを去つてフロレンスに移り、六年の後、そこで一生を終つた。その子ジツファンノは、中部イタリア、トスカニーの伯爵となり、孫ピエトロ・ボニコリは、「しばしば乗馬模擬戦で勇名を轟かした後」、フランドル伯アーノルド二世に従つてガンに移り、市外に領地を賜はつた。この領地は「ミュード」と呼ばれ、ピエトロの直系の後裔は、三世紀にわたつて「ミュード領主」を稱してゐた。

一〇七八年に、ゲレム・ボニコリが生れたが、この人の代に、ボニコリ姓をフランドル語に譯して、ゴータルスと稱した。かれが第一回の十字軍に従軍して、コンスタンチノーブルに滞留ちう、あるベダンチックなトルコ人が、それを「ユートラケロス」といふギリシャ語に譯し、さらにそれがラテン語化されて、「ユーロラス」といふ呼び方もできた。フランドル語の「ゴータルス」「Goethals」は、「Goet」(善知)と、「hals」(頸)との合成語であるが、「hals」と「als」(總て)の語呂が合ふところから、「ゴータルス」を逆さにして、「アン・アルス・ゴート!」(「すべてに善きことを!」)といふ言葉を、ゴータルス家のモツ



トトと戦場の関の聲に使つた。フェレ僧正の歴史辭典には、ゴータルス家は史上、ギーダルス、ゴルタル、アルダタス、ユーコラス、ユートラケロス、バナガトス等、種々の違つた名によつて知られると述べてある。第四代のミュード領主で、はじめてゴータルスの家名を用ひたゲレムは、剛勇をもつて鳴る勇士である。フランス史によれば、第一回の十字軍に従軍したときは、僅か十七歳の弱冠であつた。「兄弟がみな死んで、たゞ一人残つた子ではあるが、膂力衆にすぐれ、武藝に秀でたかれは、神聖遠征軍に従軍した。」そして、コンスタンチノーブルでは、「數人の篤信な騎士たちに勝利を獲、その膂力と、乗馬模擬戰、馬上の槍仕合における敏捷さを謳はれた。」一〇九九年、エルサレムの攻撃には、「キリスト教國の槍と劍」と呼ばれた、主君フランドル伯ロベール二世に従つて、聖都の城壁を乗り越え、その功によつて騎士の稱號を授けられた。盾にあらはす名譽の徽章を授けられたのも、それから間もないことであつた。一一〇〇年の年號の下に、かう記録してある。

「騎士ゲレム・ゴータルスは、ジャッファにおいて、狂信の一サラセン人が偽豫言者マホメットの前に犠牲に供へんとしてゐた三人のキリスト教徒の處女を、その手中より救ひだした。主君フランドル伯ロベール二世はその行爲を嘉賞し、ゴータルス家の紋章の赤地を、三輪の赤薔薇の咲いた枝を握る回教徒の上に、三人の金髪の處女の半身像をあしらつた圖柄をもつて飾らせた。かういふわかりやすい紋章ができたために、このフランドルの騎士の立派な英雄的行爲は、子々孫々にいたるまで永く語り傳へられた。

ゲレム・ゴータルスは、一子を遺して一一六五年に世を去つた。父の名を貰つたその遺孤は、一一七七年、主君アルサスのフィリップの十字軍に従つて聖地に遠征し、一一九〇年には、フィリップの下にふたゝび十字軍に従軍し、有名なアスカロンアスカロンの激戦はじめ、數々の戦ひに殊勳を樹て、その功によつて騎士を授けられた。「ブルガル人その他の蠻族に對する」第三、第四の十字軍に従軍したのち、二世ゲレム・ゴータルスは現役を退き、一二二六年、七十七歳をもつて歿した。フランス國王サン・ルイの下に仕へたジャスタス・ゴータルス——ユースタチウス・ゴータルスと稱したこともある——は、この二世ゲレムの次男である。

兄のヘンドリックは、「篤信な騎士」として知られてゐた。一二一七年の生れで、有名な學者「有徳者」アルブレヒトに師事し、トマス・アキナスとは相弟子であり、奴隸教團の創立者聖フィリップ・ベニティの親友である。哲學と聖書の教授として令名高く、後一二五七年、有名なパリのソルボンヌ大學の神學教授に招聘された。このヘンドリック・ゴータルスは、「教會史および世界文學の權威」であり、「嚴肅な教授」の名によつて、後にはドールニクドールニク(トゥールネイ)の大副監督として、有名になつた人物である。一二九二年に歿し、「ドールニク大寺院の、高價な大理石の墓石の下に葬られた。」

暗黒時代より光明と文化の中世へ、文藝復興の赫灼たる光輝と、宗教改革の凄慘とを通して近世へ、——この由緒古き名門累代の後裔は、「すべてに善きことを」といふモットーを守り續けてきた。この一門の人は代々連綿として、ガン市の市參事會員兼判官を勤めてきた。一族のうちからは、百五歳といふ珍らしい

長壽を保つた尼院長ジャスタ、學識高い僧會員、幾人かの法學博士、醫學博士が一人、——ギリス・ゴータルス——ルーヴァン大學、ドゥーエイ大學の教授たち等がでゝゐる。「海の乞食」と嘲けられる、オランダ人新教徒の海軍兵が、ガンに新政權を樹てたとき、出仕を拒んで投獄され、耳を斬られて追放された上に、莫大な財産を没收された殉教者ジユドカス・ゴータルスもその一人である。

ナポレオンが、エルバ島を脱出して歸國したとき、それを迎へる歴戦の勇士らのなかに、カール・オウガスタス・エカネスト・ゴータルスの乗馬姿があつた。レジヨン・ドノール勳章に輝やく勇士で、一八一四年の暗黒期には、獵騎兵第三十六大隊長の中佐であつた。ウォーターローの大戦にも参加したが、一八一五年には、ランの第九大隊長、大佐として、ネザールンツ聯合王國の陸軍に入り、トントン拍子に昇進して、「ベルギーの名譽革命」が勃發したときは、師團長、歩兵檢閲總監、參謀本部の首脳部に任ぜられてゐた。

これら幾多の愛國者、篤信者を輩出した、ゴータルス家の歴史を書いた公刊の文獻は二種ある。その一は、一八三〇年、ガンの市民テー・エー・エル・シェリンクの編になる六十八頁の質素な一小冊「ゴータルス家年代記」であり、もう一種は、一八三九年パリで出版されたフランス語の大冊「記録」である。これはエム・レイネの編纂になるもので、「フランス貴族の家系的、歴史的」とサブタイトルがついてゐるが、そのなかに「フランドルのミュード、ニウラント等の領主ゴータルス」と題する八十八頁の一章があり、その章のタイトルの下にゴータルス家の紋章がでゝゐる。

フランドル語、フランス語、いづれの家系史も、共通の資料に據つてゐるので、内容は實質的に同一であるが、各々他にでゝゐない若干の名を含んでゐる。どつちをみても、騎士の武勇傳とか、學者の學界における偉大な業績とか、篤信や睿智の故をもつて寺院の高位に任ぜられた、といふやうなことが記録されてゐない人物は殆んどない。編纂者の信仰は純真であり、堅固であり、絶對的なので、その人々の武勇、睿智、美德を記録する態度は、まったく崇拜的である。この編纂者たちが権力者であつたなら、盲信家、一徹な忠義者の資格がある。反對するものは悉く異端者であり、なんでもかんでも卑劣者、悪者なのだ。シェリンクとレイネとは、古い運河工事従業員の禮讓に先を越して、その上をいつてゐる。ゴータルス崇拜は、パナマ地峽で生れたものではなくて、カロラス皇帝と同じやうに、富裕な都市ガンに生れたのであつた。

このゴータルス家の年代記は、一個の歴史として、象と綽名されたハタイの語つた物語に對する、モーグリの批評を想ひ起させる。それは、物語としての脂肪を落してゐない。ピエトロ・ボニコリと雖も、まだ乗馬模擬戦がはじまつてゐない十世紀に、しばしば乗馬模擬戦で勇名を轟かすことができないことは明らかであり、十一世紀の、——ちやいつの世紀の回教徒でも、豫言者に人間の犠牲を供へるなどいふことは決してなかつた。かういふ小さな具體的な尾端は、多分中世の終りごろにでも附け加へられたものであらう。その時代は、板金鎧に、パヴィア製の羽毛飾りの兜をつけたトロイのヘクター卿が、馬上に槍を上げて乗りだし、スクアン門前の防塞でアキレス卿と渡り合つたと、世間一般が考へてゐた時代であり、敵側の罪惡

ならなんでも信じた、あの世界大戦當時と同じやうに、キリスト教徒が、回教徒の罪惡なら、一も二もなく熱心に信じ込んだ時代である。各時代とも、その時代特有の傳説と神話をもつてゐる。今日では、ドイツ人が獨斷的に、パナマ運河の建設者はドイツ人だと主張してゐる。その理由は、ゴータルスはドイツ人の姓だからだといふわけである。それなら、ゴータルスの始祖はホノリウスだから、かれはイタリア人だとか、ユウトラケロスの姓を稱へたことがあるから、ギリシャ人だとか、或ひはサン・ルイ王の臣だからフランス人だ、シャルル五世に重用されたからスペイン人だ、フランドルはかつてオーストリア領ネザールンツといつたから、オーストリア人だ、いや、今はベルギー領だからベルギー人だとか、またはアムステルダムに分家があるからオランダ人だとか——ゴータルス大佐自身も、その分家の子孫だと思つてゐたことがあつた——いふ方が、一層理屈にあふだらう。かれは、たまたまアメリカ人であつたのだ。

フランドル語の家系史は、今日プロバガンダと呼ばれる、この近代的な、合成傳説のお馴染の臭ひがする。突飛なことには、これはさういふ性質のものだと、正直にレッテルが貼つてある。ガンは、重心の偏つたネザールンツ聯合王國內における、オランダ人でカルヴァン派新教徒の、オレンジ家の横暴な支配に反抗する、カトリック教徒ベルギー人の運動の中心であり、その抗争は、戦後一八一五年に、この人工的な畸形兒が生まだされて以來、一八三〇年、暴力による決裂をみるまで續いた。あらゆる「善を愛する同胞」に對して、この「愛國的にして篤信な一族」の勳功を一層普及せしめんとするシェリンクの公然たる目的、昔の罪惡の

暴露、「ベルギーの名譽革命」に言及しなかつたこと、參謀本部の一員たるウオーターローの戦ひの勇士に對する、いかにも望みを囑するやうな讚辭、——これらはすべて、かれが、今日のわれわれが熟知してゐる、熱烈敬虔な愛國的プロバガンディストであつた事實を物語つてゐる。

しかし、この系圖家が地方的矜持と偏見に訴へたといふ事實それ自體が、自ら地方的知識に左右される結果を來した。大學の記録がまだそつくり残つてゐる當時に、ルーヴァン大學に偽學者連を送り込むことは危険であつたし、シャルル五世のやうな非常に有名なフランドル生れの皇帝に對して、作りものゝ國王をもつてきて戦争させることも、安全な方法ではない。そこで、かれは、地方の寺院にある中世の名士たちの墓にも、殆んど觸れようとしなかつた。一例をあげれば、學識高い博士であり僧會員であるギリス・ゴータルスが、「生前自費を投じて建立した、サン・バヴォンの三聖王禮拜堂——それは當然ゴータルス禮拜堂と呼ばれた——に」埋葬された事實の如く、ちやうどロバート・フルトンの傳記作者が、ニューヨークのレクター街の北側をブロードウェイにむかつていけば、トリニティー教會の墓地の柵の間からみえる墓石について述べたほど、確實だと感じない限り、敢てそれに觸れようとはしなかつた。最後に、かれは、十字軍勇士らの母の都市であるガンの、遠征勇士の創作にも慎重な態度をとらざるを得なかつた。

教化の目的をもつて書くのであるから、シェリンク、レイネの兩編纂者も、從來の系圖家と同様、教訓にならぬ細々とした記述は一切省略せねばならなかつた。同時に、かれらが關心をもつてゐるのは貴族だけで

ある。かれらが擧げた數ある聖徒のなかに、罪人はなかつたであらうか？ 貴族のなかに庶民が、生活のために外にで、働かねばならぬ者たちはなかつたやうか？ 一六三六年にニュー・イングランドに移住してきた、一組の多産な清教徒の夫婦者が、二百五十年後の一八八六年に、一萬倍以上に達する子孫を合衆國に殖やすことに成功したとすれば、ダレム・ゴータルスのやうな強健な系統は、八世紀の間には、有名なフランスの稠密な人口を、眼立つほど増加させたに違ひない。それは、現在でも變りがない。低地國【オランダ、ベルギー兩國】のある地方では、ゴータルス姓は、スコットランド低地方のある地方のジェームソン姓と同じほど眼につきやすい。

ゴータルス姓をもつたものうち、最初にアメリカに移住したものは、一八四八年に渡來した、木細工を職とするジョン・ゴータルスであつた。かれはこの國の國狀が非常に気に入つたので、歸化願をだした。そして、同國人のマリー・バロンと結婚して、ゴータルス一族のアメリカの分家の始祖となつた。二人とも、ガンを首都とするベルギーの東フランデル州生れである。

ジョージ・ワシントン・ゴータルスは、一八五八年六月二十九日、ニューヨークのブルックリンに生れた。二つ年上の兄ジョンと、二つ年下の妹アンニーがあつた。ジョージが十一の年、一家はイースト河を越えてニューヨークの市街に引越し、イースト・サイドのD街四十七番地に居を定めた。當時イースト・サイドには、閑靜で上品な住宅區域があり、そこには、大抵造船業やその關係産業に従事する人々が住んでゐた。プ

ルックリンの公立小學校に通つてゐたジョージは、ニューヨーク市の公立小學校に轉校して、勉強を續けた。同級生のなかに、アンドリュー・マカリストといふ少年がゐたが、この少年は後にアナポリス海軍兵學校に入學、一八八一年に卒業して、合衆國海軍の少尉に任官し、一八九六年には引退したが、世界大戦にはふたゝび現役に復して、少佐に昇進、大戦が終るとともにふたゝび引退した。このマカリスト少年はよくゴータルスの家に遊びにきたので、一家の人々に關するその想ひ出は、少年時代のゴータルスを圍む家庭の感化力を量る上において、すぐれた材料を提供してゐる。

両親は揃つて、丈夫なフランデル・タイプであつた。——父親は碧い眼で、脊が高く、非常にユーモア氣分に富んだ、熱心な家族思ひ、母親は情愛の深い家庭的な婦人で、「ジョージを非常に可愛がり」、その大望を激勵したが、級友のマカリスト少年に對しても、顔をみるたびに、一生懸命勉強して、きつと志望のアナポリスに受かるやうにと勵ましてゐた。

「私は今にいたるまであの女を追想して、尊敬してゐる。」とマカリスト少佐は語つた。

ジョージは、遊び好きではなくて、落ち着いた勉強好きな質ではあつたが、人見知りしない子で、學校友達の間には人氣があつた。同じ年配、同じ人種系の、もう一人の落ち着いた勉強好きな少年は、そのころ、東二十番街にある父親の鳶色の家の、ガス燈のともつた書齋で、リヴィングストンの「傳道旅行記」とウッドの「繪入り博物學」を、何度も何度も讀み返してゐたが、それによつて、知らず識らずの間に趣味を養成さ

れ、將來の生涯に影響を受けつゝあつた。それらの本は、セオドル・ルーズヴェルトの人物を構成する上に大きな影響をもつてゐたといふので、現にその家に保存され、展覧に供されてゐる。シェリンクの「ゴータルス家年代記」は、果して、ジョージ・ワシントン・ゴータルスに對して、それらに匹敵する影響を與へたであらうか？

かれはルーズヴェルトと違つて、自叙傳も書かなければ、自分自身について語ることも嫌ひであつた。ゴータルスはある點において、他の人々が外向性であると同じ程度に、完全に内向性であつた。運河に關する一般の理解を増すことには非常に力を入れてゐたし、ゴータルスが個人的に嫌ひな部下でも、立派な仕事をやつた場合には、十分にその勞を買つてやらねばならないと、恐ろしく熱心に主張した。だが、自分の個人的な事柄に關する質問を受けるや否や、眼にみえぬ鋼鐵製の防火幕が、大佐と對談者の間におろされるのが常であつた。かれは自負心が強いと同時に、反面非常に内氣だつたのだ。

大佐は、フランドル語はもう讀めなくなつてゐたが、シェリンクの「年代記」は一冊もつてをり、その内容も知つてゐた。外國人の兩親をもつた、大抵のアメリカ生れの第二世と同じやうに、かれも、一ヶ國語以上の言葉を話せる利益がわかる年配にならないうちに、兩親の母國語を忘れてしまつた。子供に語つて聞かせたり、讀んで聞かせたりする話として、またいつまでも印象を残させる物語としては、あの「ゴータルス家年代記」の物語ほど面白くて、打つてつけのものは容易にみつかるものでない。子供はいつも、自分がそ

の物語のなかの英雄になつてしまふものだが、英雄の名と自分の名が同じな場合などは殊更さうである。しかも、その昔の英雄たちは、みな自分の御先祖なのだ。みんなゴータルスといふ苗字なのだから。

一八八〇年代のはじめ、ジョージ・ゴータルスが合衆國陸軍の少尉になつたとき、同族の一員として、ベルギーの名門の一分家の主人に宛て、手紙を書き、更めて親戚關係を結んでいきたいと盡力をたのんでやつた。返事はつひにこなかつた。が、このアメリカの若い少尉が、一族の名を世界に有名ならしめる運命を荷つてゐたことを思ふと、返事も無いといふことは、いかにも皮肉であつた。

かれもまた沈黙を守つてゐた。同姓の勇士たちが、十字軍に従軍したことは決して忘れなかつたが、その勇士たちのことは口にだしたことがない。それより遙かに小さな刺戟にあつても、大抵の人間は鼻持ちならぬ紳士氣取をやるか、手のつけやうのない困りものになるか、思ひ上つた能無しになるものだ。けれども、ゴータルスとしては、現實逃避の世界である、虚偽の架空的事實などを必要としなかつたらしい。かれは、D街の家でも、パナマ地峽でも、あるがまゝの人生を楽しみ、人生に打ち克つた。ベンジャミン・フランクリンと同様、官廷の儀式など一向不案内なかれは、かつてある皇后が接吻を許すために、いとも優雅にその手を差し伸ばされたとき、その手を握つて、熱心にふつたことがある。かれは、同じ姓をもつたあの中世の騎士たちの、外部的な特徴などを眞似しなかつた。それよりも、遙かに困難な、遙かに立派なことをやつた。——かれは、身をもつて先祖傳來の理想を守り通したのだ。

運河工事が進行してゐる當時、ある大金持の有名な請負人がパナマにでかけていつた。歸つてきて、運河に對する感想を叩かれたとき、かれはかう語つた。「確かに大事業だ。だが、ゴータルスつて男は始末に負へぬ馬鹿者だね。僕の方へきてくれるなら、百萬ドル提供しようともちかけたところが、蹴りをつたよ。」

(註) この逸話は、海軍少將ウィリアム・ハーバート・ブラウンソン氏が保證して提供されたものである。

友人のだれかゞ、その百萬ドル問題について大佐に話しかけたとき、かれは笑ひながらいつた。「僕の技術といひ、教育といひ、悉く公費のお蔭なんだ。ブルックリンとニューヨークの月謝なしの學校、ニューヨークの市立大學から、ウエスト・ポイントの合衆國陸軍士官學校とね。運河が竣工するまでこゝに踏み止まることは、國民に對する僕の義務だよ。」

祖先の騎士は、主君に對して「不動の忠誠」を捧げてゐた。またルーヴァン大學の哲學の主任教授であつた二世ジャドカス・ゴータルスは、故郷に錦を飾つたとき、ガンの判官たちから祝ひに贈られた銀の水入れ（注）といふ金の銀貨を、早速市の城門のところまで底を叩いて、貧民のために贈つた。大佐のさういふ心構へ以上、これら祖先たちの篤行をそっくり現代にもつてきたやうな話は、容易にみつかるものではない。それは遺傳の結果であらうか、それとも、理想化された英雄たちの物語の、少年の心理に及ぼした影響であらうか？ なんてあるにせよ、その意氣はつひに山を移したのだ。

フランドル伯麾下の武將であつたと、ガンの同業組合員であつたとを問はず、ジョージ・ワシントン・

ゴータルスのフランドルの祖先について、ひとつ間違ひのない事實は、いづれも強いガッシリした血統であつたに相違ないといふことである。そのアメリカ生れの後裔は、身の丈六フィートで骨格逞ましく、亞麻色の髪に碧い眼をした、紅顔の美青年であつた。その髪は、年をとつて白くなつてからすつと後、きれいに縮れた卷毛になつたが、そのために、顔が變に子供っぽくみえることがあつた。

「かれの大學生活ちう、ちよつと變つた出來事は、たつたひとつしか記憶にない。」と、一八七三年一緒に市立大學に入學した、ゴータルスの同級生の一人が書いてゐる。「それは、老人のケルナー教授が、美學と美の理論の講義をしてゐる教室であつた。教授は、唇の紅味、皮膚の滑らかさ、髪の豊かさをもつた青春は、それ自體が美であると語り、青年時代には、手脚に一種の若々しい不恰好さがあるが、それは、もつと成熟した立派な姿態を約束するものであらう、と述べたばかりのときであつた。急にジョージ・ゴータルスの方にむかつて、「君、起つてくれたまへ。」といつた。ゴータルスは起ち上つた。ケルナーは學生たちの方にむかつて、「こゝに、私がいつたことよゝ例がある。」と語つた。ゴータルスは眞赤になつた。教授は、「君、かけてよろしう。」とさつて、エピソードはおしまひになつた。」

きれいな顔だといはれてテレた、青春期の青年の感受性を考へれば、それは斷然教授の側の無作法な行爲であつた。だが、全體としては、ジョージはすこぶる先生運がよかつた。かれは幾年の間、稀らしい親切人で、自分の仕事を愛し、生徒に好學心を起させ、鼓吹することを最大の喜びとする、生れながらの教育家

の感化の下に教育を受けてきた。その先生は、第十五小學校の校長ネーザン・ビー・ピアーズである。ゴータルス少年が示した理解力の速さ、知識欲の旺盛さ、社會にでゝ活動しようとする決意は、ピアーズ先生に非常な興味をいだかせた。少年に對するかれの興味は、少年が大學にはひつてからもその後を追つてゐたが、あるとき突然、以前の教へ子に力添へをしてやれる機会が訪れたとき、ピアーズ先生は、時を移さずその機會を握つた。

ジョージはそのころ、まだ何にならうか決心がついてゐなかつたが、ひとつの點についてだけは、はつきり決心をきめてゐた。——それは、どうしても確實な職業のひとつを選ばねばならぬといふことであつた。あるときは醫者にならうと思つたが、また法律をやらうと思つたこともあつた。その後、數學に對する興味と能力を發見してからは、強く工科の方に傾いた。かれは小學さへ卒業しないうちから、お金を儲けて貯金しておき、それを自分の職業教育の費用に充てた。大學の學生々活ちうはよく、なんでも構はずみつき次第の仕事をやつて、夜間、土曜日、休暇を労働したものであつた。封筒書きや包紙の宛名書き、事務所と事務所間のメッセンジャー・ボーイ、——電話のない時代であつたから、何百人もの子供がその仕事に使はれてゐた——あるときは帳付けや現金出納係の手傳ひもやつたが、どんな場合でも勉強の時間をみつめて、いい成績を落さないやうに努力してゐた。

一八七六年の一月に、ウエスト・ポイント士官學校を受験する推薦學生に、一人缺員が生じたといふこと

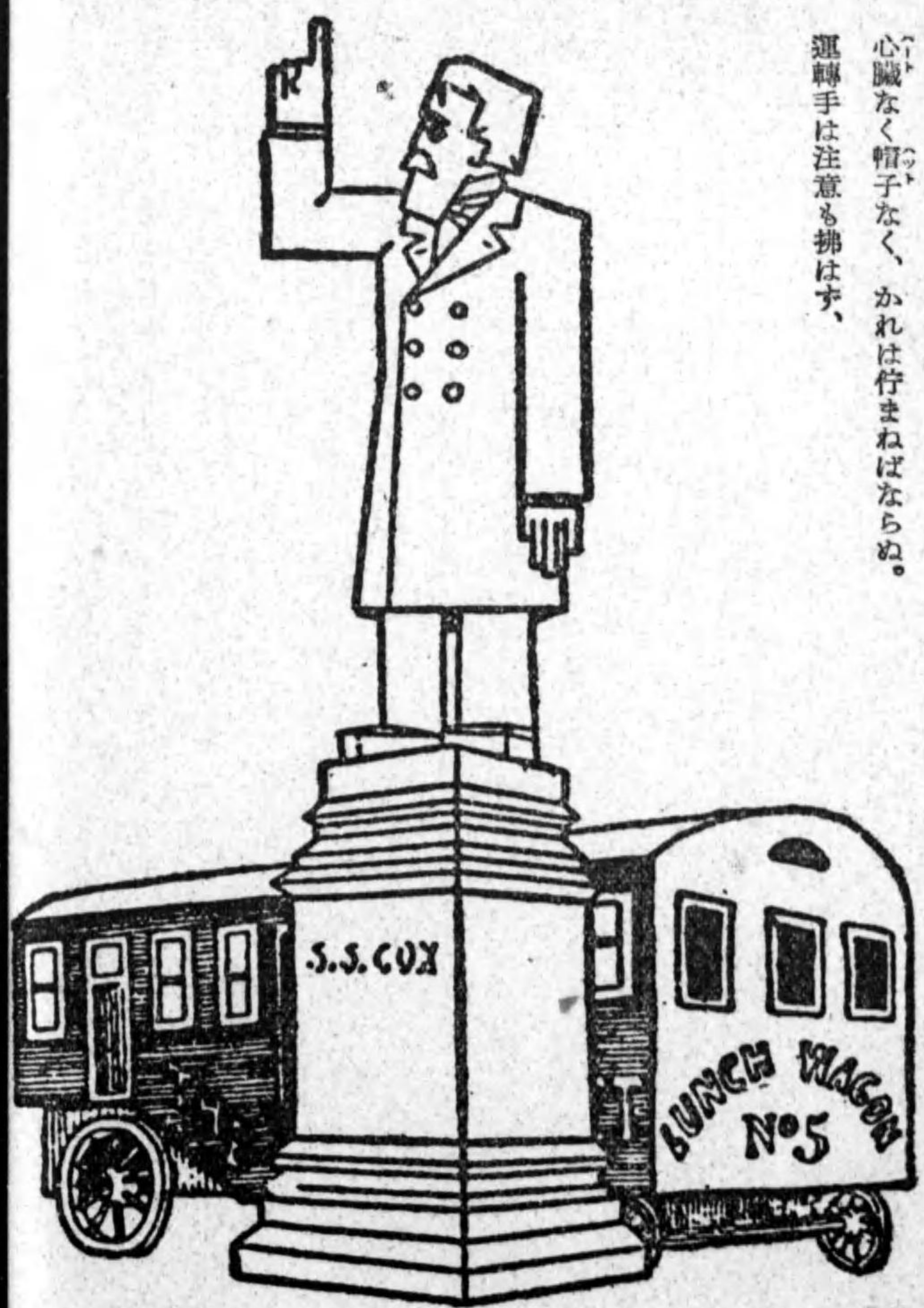
が大學にわかつた。それは、區選出の代議士が推薦してやつた學生が、試験に失敗したためであつた。市立大學には、ウエスト・ポイントの傳統が濃厚であつた。初代の學長ホレース・ウエブスターは、一八一八年級のウエスト・ポイント出であり、ゴータルスの在學當時在職してゐた二代目の學長アレクサンダー・ウエブ將軍もウエスト・ポイント出で、かつてゲッティスバーグで殊勳を樹てた。市立大學の高等數學の講義、懲戒制度、教授法は、みなウエスト・ポイントの型に倣つたものである。

ピアーズ先生は缺員ができたといふ話を聞き込むと、迅速有效な行動を開始した。早速ウェブ學長の承認と評議員たちの賛同を得てから、その足で、區選出の代議士サミュエル・サリヴァン・コックス氏に面會しにいつた。このコックスは、長髯を蓄へ、長いフロックコートを着た、金ピカ時代の政治家ちうでもともと風采堂々たる一人である。ある演説で、落日の空の燃えるやうな輝やきのことを話したのが崇りをなして、「夕暮れの」コックスといふニックネームがついてゐた。薄給で過勞の郵便配達に對する、かれの非常に實質的なサーヴィスは、「郵便配達の友」としてのかれの恐ろしい顔をした青銅像によつて——本人としてはひどいと思ふだらうが——酬いられた。その青銅像に胸打たれたゲレット・バーガスは、かう歌つた。

忘れられて、一人アスター廣場に立つ

裕かなる慈悲の姿をみよ！

天をさせる指もて訴へつゝ、  
心臓なく帽子なく、かれは佇まねばならぬ。  
運轉手は注意も拂はず、



名高き政治家の傍を過ぎゆく。

その呼びかけに心留める二輪馬車の馭者もゐない、——  
かれらは悉くかれを無視してゐる。  
最後の車も遠く消え去つた。

あはれなサンセット・コックスは夜を明かさねばならぬ。

かれが生きてゐないことは幸福だ！

ヤキモキしたとて、そこに停る車はあるまい、

食堂車第五號のほかは。

コックスはすでに、この區からウェスト・ポイントに送る補缺の推薦學生は、競争試験によつて、公立諸學校の學生ちうから選抜するといふことを言明してゐた。ピアース先生は、ゴータルスの小學校から大學にいたるまでの成績表を提出し、大學當局から推薦を得てゐる旨を話した。コックスは、入學を許可されたら、かならず卒業させるといふ保證ができるなら、推薦してあげようと答へた。ゴータルスはその通り誓約した。かれの小學校、大學の成績がよかつたので、競争試験は沙汰止みとなり、直ちにゴータルスが推薦されることになつた。



この推薦を受けたのは、ちやうどいゝ時機であつた。それは、勉強と労働の二重の過勞から、少年が健康を害しはじめてゐたときだからだ。學長のウェップ將軍は、ウエスト・ポイントは「健康の建設者である」し、醫學や外科學は卒業してからもやれるのだから、ぜひその推薦を受けるやうにと勧めた。そのとき、ゴータルスは市立大學の四年生で、六月には卒業になるのだが、四月にそこを退學して、ウエスト・ポイントに入學したのであつた。

ゴータルスは常に、その大學生々活に對して感謝に満ちた想ひ出をいだいてをり、後年、事情の許す限りは、その學位授與式禮拜に出席した。が、いつもきまつて、人の眼につかぬやうに、遠慮勝ちに昔の級友たちの間に割り込んでゐた。大學の人たちなどの眼に留まらうものなら、演壇の上の席にひっぱり上げられて、自分が命名した「蠟細工」の仲間入りをさせられるからだ。

かれが物故した年、一九二八年九月の學位授與式禮拜には、市立大學同窓會から母校に對して、ゴータルスの青銅の胸像を贈呈した。その贈呈に當つて、同窓會長シグマンド・ポリッツァーはかう述べた。

「學長閣下、この胸像を贈呈したのは、故人の偉大さを表する記念碑としてのつもりではありません。かれは、自分自身の不滅の記念碑をパナマに建てました。この像は、この市の青年たちの眼につく場所に飾つておいたならば、人類に對するもつとも偉大なる奉仕をなす機會は、勇氣と、勤勉と、奉仕せんとする意志をもつた、すべての人に對して開かれてゐる、といふことを想ひ起させるよすがとなるでせう。」

### 第三章 ウェスト・ポイントの迎年ストーム

一、二、三、四！ 一、二、三、四！

タッ、タッ、タッ、タッ！

列を作つてゐるときも、一人で歩くときも、士官學校の校庭では、士官學校生徒は軍隊式に速歩の歩調をとつて歩かなければならない。二つの歩調が、二本の道路の交叉點で出會つた。鼠色の外套を着た二人の青年が、一緒に活潑な歩調で進んでゆく。二人の磨き立てた黒い靴踵が、バリッバリッと凍りついた砂利を踏みつけてゆく。ちやうど一八七九年のクリスマス週間であつた。そこに現はれたのは、「ゴート」と「スタップ」といふ二人の生徒である。

「ゴート」「山羊」といふのは級長のゴータルス、「スタップ」「切株」といふのは、普通の生徒のヒュイットで、二人とも一年生であつた。もう二三ヶ月もすれば、鼠色の生徒服から藍色の軍服にかはらうといふときである。

「ゴート、僕あ、よく、交代順を繰つてみたんだが、君はニュー・イース・イーツ【年越しの晩】の當直に當つてゐるな。」

「さうだよ、だれか病人でもでなけりや、僕が當直だ。」

「可哀さうだが、折角の舞踏會がファイになつちまふな、ゴート。」

「うん、まつたく可哀さうだよ、なあスタッフ。」

「だが、衛兵所は、當直のものが腰かけて、コツコツ勉強するのにもつてこいの場所だぜ。ガス燈をつけて坐り込んで、本を讀むんだね、夜中までぶつ通し、——まあ、君がさうしたけりやなあ、ゴート。」

スタッフが最後の條件文に力をいれていふと、ゴートは、いつもかならずやるやうに自分の方を見上げてゐる相手の顔に、複雑な表情で笑ひかけた。かれがこんな風にゴートの顔を見上げるのは、ゴータルスは幅の利く六月組として、ヒュイットがそれに一目おかねばならない九月組として、一緒に一年生になつてこの方のである。八〇年級【一八八〇年卒業の組】の六月組は、ウェスト・ポイント開校以來一番幅を利かした六月組である。といふのは、その期の入學生を、短期間の猛訓練によつて、獨立戰爭百年祭の閱兵式にでられる程度に仕上げようといふので、七六年の四月に繰上げ入學が行はれたからだ。朝から晩まで、ひつきりなしに分隊教練が行はれる。射撃教練の第一日には、四人の生徒がぶつ倒れたが、いづれもまつたく疲勞の結果であつた。獨立戰爭百年祭の、のべつ幕なしに閱兵式の行はれた強行軍の十週間、——やうやく百年

祭が終ると、ある小伶俐な政府の役人が、この六月組は、正規の入學期の六月までは入學の宣誓をしてゐないのだから、あの血のするやうな苦勞をしてきた期間は、法規上士官學校生徒たる資格は全然ない、従つてその二ヶ月間の食費は生徒の手當のなかゝら差引かなければならないといふ計算をたてた。——そのお蔭で、この組が二年生になつての休暇の小遣は、まつたく惨めなものになつた！ 白髮の將軍連のなかには、今なほこの卑劣極まるベテンを口を極めて罵つてゐるものがある。その人たちは大抵、その九月に、私服を着て、肩身狭さうにヒョロヒョロしてゐた憐れつばい級友たちから、その話を聞かされたのだ。

ヒュイットは、フランス語班ではじめてゴータルスの顔を知つた。教官のウッド大尉が、「このなかで、今までフランス語を習つたものがあるか？」ときくと、一人の背の高い生徒が起立した。

「どこで習つたかね、ゴータルス君？」

「ニューヨーク市立大學です。」と、その背の高いのが答へた。軍隊式のテキパキした口調などはテンでない、ゆつくりした、音楽的なだるさうな口の利きやうである。それはイースト・サイド獨得のアクセントにも似てゐるが、同様に南部のノロノロした調子を眞似たやうな口調であつた。D街に家のあるゴータルスは、いつか使つてゐたといふ覺えもないそんな口の利きつぶりを、いつの間にか覺えたのだらう？

すつと奥地の方に家のあるヒュイットは、かれを都會育ちの氣取屋だと思つてゐた。

ところが、間もなく、この背の高い美少年の氣取屋は、決して九月組苛めをやらす、かへつて、自分を一



あつた。後には、いかなる形式による煙草の消費も絶対禁制になつた。けれども、七〇年代の士官學校生徒は現在と同様、自由時間には煙草を喫んでもよかつた。しかしかれは、人前で煙草を喫むときはかならず標準煙管で喫み、決してほかのパイプで吸つたり、葉巻や巻煙草の形で喫んだことがない。が、それは御本人以外だれも知らない、何か奇妙な理由からである。

その朝の便で着いた新聞の帯封を切りながら、ゴートはいつものやうに巻煙草の紙がはひつてゐるのみつけた。鼠色の小型な略帽の汗取革のなかに、キチンとその紙を挟むと、いつもの夕方の散歩にでかけていつた。胸を張つて、いかにも元氣さうに、ゆつくりゆつくり歩いていく姿は、もう、背だけ伸びすぎて肩の落ちた青年ではなくて、立派に精力の溢れる大人である。一點非のうちどころのないほど正確に、あらゆる細々した規則に従つてゐるのだが、それでもなほ、かれは、士官學校の生徒や軍隊の連中がいふ「軍隊」型には、ちつともはまつてゐなかつた。この級長には、プロシヤの週番將校のいかつい、無愛想なギゴチなさといふものがなくて、大膽で、柔軟性のある氣樂さが感じられる。B中隊の教練をやつたり、工學の勉強に馬力をかけたりするときと同じ圓滑な能率をもつて、ゴータルスは五本の巻煙草をまいて喫んだが、「生徒班長」に喫ぎつけられもしなければ、罰點を一點つけられたこともなかつた。かれは、シオンの聖山で氣樂にやつてゐたのだ。

士官學校附のジョン牧師が禮拜堂で説教してゐる。——そこはウェスト・ポイントのオールド・チャペル

といつて、世界ぢうでたつた二ヶ所しかない、英軍から鹵獲した聯隊旗の飾つてある場所のひとつである。生徒大隊は妙に緊張して、牧師の言葉に聴き入つてゐた。それは、この日曜には、ホーリー・ジョン十八番の説教のうちどれがでるかといふので、賭が行はれてゐたからだ。ジョン牧師の説教は、當直のやうに、順番に廻つてくるのであつた。けふのは「棄てられた女」かな？ さうぢやない、また「かの盾飾り」【盾形の紋地】にはひらうとしてゐるところだ。

參觀者たちは、オールド・チャペルの壁にかゝつてゐるひとつの名のない盾をみて、感にうたれる。ワシントン、ウェー、ノックス、サリヴァン、——革命軍の少將たちは、獨立戦争ちうの決定的戦闘において決定的非難を浴びせかけられた一人を除くほか、みんなそこに祀られてゐる。軍人の盾を飾る名譽の場所であるが、賣國奴の名は消されるのだ。

「そこで、あそこにかゝつてゐる盾の本人にして、もし名譽を重んずる士であつたならば、……」表面だけは、いかにも整つた、聞き飽きたホーリー・ジョンの言葉を聴いてゐるやうな風をしながら、ゴートは、年とつた人間は、なぜあんなことをのべつ幕なしにしゃべつてゐなけりやならないんだらうと、癪にさはつてゐた。奴がまたこゝへ戻つてきて、卒業式に他の蠟細工どもと一緒に演壇の上に神輿をすゑても、斷じてあんな下らない演説なんかやらせるものと力みかへつてゐた。

(一九一二年六月十二日の卒業式に、ゴータルス大佐は卒業のクラスに對して、名譽と忠誠に關する非常に感銘深い演

説を行つた。その演説は、政府の命令によつて印刷に附された。——合衆國下院文書第九〇四號、第六十二議會第二會期）  
ニュー・イーアス・イーヴがきた。當直は、ガス燈のついた衛兵所に、たつた一人腰かけてゐた。乗馬巡檢はやつたが、冬期の慣習に従つて、すぐおしまひにした。生徒舎の廊下の巡檢は、午後九時半の初夜巡檢の喇叭が鳴るまでしか行はれない。生徒舎に圍まれた廣場は、今夜はひっそり閑としてゐる。生徒舎からこの廣場にむかつて開いてゐる八つの扉には、門がかゝつてゐる。衛兵所は廣い空地を隔て、生徒舎の反対の側にある。

遠くのホテルでは、樂隊が「ブリュー・ダニューブ」を演奏してゐる。マハンの「築城と石材規矩法」の章に讀み耽つてゐたゴートは、風に流れてくる音楽のメロデーが耳にはひつたので、すつかり嬉しさうにニコニコしてゐる。かれは決して舞踏會にいかない。ダンスはほかの教練同様必修科目であるのに、未だかつてダンスを習つたことがない。かれはほかの連中と一緒に列を作つて、體操場まではゆくが、決してだれとも組にならうとせず、そこに腰かけてニヤニヤ笑つてばかりゐる。どうしたわけか、ヴィゼット教授の眼にもつかなかつたものらしい。ゴートがかつてサボつた義務は、たつたひとつこのダンスの稽古だけである。スタッフは、獨身倶楽部の會長と彌次つた。ポイント切つての美少年は、不思議にも娘のやうなはにかみ屋であつた。

が、かれは男に對してもはにかみ屋で、だれか知らない人間のくる集會には、どうしてもでたがらなかつた。全然運動などしたことがないので、かれは一年生以來ずつと級長を通した。級指環はかれの意匠したものである。それから五十年後、スタッフは、その組では一度も選舉をやつたことがない、いつもゴートが簡単に級長をさらつてしまひ、つひぞ落されることがないと語るであらう。ゴートはたゞ微笑するだらう。

消燈十五分前の準備喇叭、——消燈喇叭が鳴る、——舞踏會にいつた連中がドヤドヤ歸つてくる。衛兵所のガス燈のほかは全部消燈された。そこでは、ギタールスが、もつと巻煙草を巻く紙を送つてくれと家に手紙を書いてゐる。かれは非常に煙草が吸ひたかつた、そして、今ならこつそり一本やれるのだ。が、勤務ちうは煙草を喫んではいけないのだ。突然、小さな物音がした。屹となつてむかふをみると、デブのステュワートが衛兵所の扉から隙見してゐるではないか。帽子をかぶらない頭はモジャモジャで、むきだしの向脛は、外套の裾とスリッパの間に赤くなつてゐる。それでわけはわかつた。が、デブは消燈後に衛兵所のあたりには用はない筈だ。かれはギタールスの一番古くからの友だちである。二人はD街以來の遊び友だちであり、一緒にウェスト・ポイントにはひるまでは市立大學の同級生だつたのだ。二人の眼は出會つた。ステュワートは縮み上つて、眞暗ななかを生徒舎へ逃げ歸つた。そして、仲間失敗だつたと報告した。また指令が下る。「君の假面をかぶつて、あの扉のところに歩哨に立つてゐる。スタッフが歸つてきたら、あれだけなかへいれて、後からだれがこやうとかまやしないから、ピシヤツと扉を閉めて、門をかけたままへ！」眞暗な廊下には、えたいの知れぬ仕掛がいつばいしてあつた。

時計が十二時を打った。その最初の音がボンとなると同時に、攻城砲臺の三十斤パロット砲は轟き、小銃はボンボンと鳴り、喇叭は嘯唳と響き渡り、生徒舎からは大きな喊聲があがった。

「エー、エー、エー！ 新年おめでたう！」

藍色燈と點火装置は胸壁にそつて煌々と輝き、廣い空地を劇場のやうにまばゆく照らした。そこへゴートがやつてきた！「生徒班長」の「亞麻色髪」がやつてきた！

ようし、あの連中にお見舞申さう！ ローマ蠟燭と三本脚の流星花火を眼の高さに差し上げ、手で鼠色外套の方へ狙ひをつけながら、藍色外套が並んで詰めよつてくる。言ひ傳へによれば、ゴートはすこしも身じろぎしなかつたといふが、投げつけられた花火が「フラクシー」の脚の間に飛んでいくと、かれは傳令の方へ跳んでいつた。扉はどこも閉め切つてあつた。「傳令！」カンカンになつた生徒班長が唳鳴つた。「大急ぎで、あれもつて来い、……」

両方の間の地面で、パンパンと十インチの疝癩玉が破裂したので、語尾ははつきり聞き取れなかつたが、傳令は敬禮して、駈歩で飛んでいつた。一人の生徒が、扉のそばの一階の窓から乗りだして、ガーンガーンと鐵の階段に響く、殷々たる砲聲に負けないやうな聲を張り上げながら、ゴートの行状や先祖のことをみんな「フラクシー」に話した。

「ゴータルス君、あれはだれだね？」

「知りません。假面をかぶつてゐるもんだから。」

だれもかれも、敷布を裂いた布で作つたマスクをかぶつてゐた。それは、第二次マルヌ會戰の第三師團、サン・ミールの第四軍團、アルゴンヌ戰の第一軍團、ライン駐屯のアメロック部隊のディックマンであつたかもしれない。或ひはアメリカ遠征軍の第八十一師團長ベイリーか、同じく第四十師團長のストロングか、それとも第三十三師團長のベルであつたらうか？ 恐らくは、九九年に南阿のポーア軍に投じて戦つた、アイルランド人旅團の旅團長ジョニー・ブレイクであつたらう。が、レヴィアザン號に乗船してゐた運輸總監である筈はない。といふのは、かれは、六門の攻城砲に裝填して五門だけ發射した、スタッフ・ヒュイットともう一人の勇士のために門をはづしておいた、裏口の扉を押へてゐたからだ。一同はビクビクもので、三、四町もある、月明りに照らされた雪の積つた空地を、慌てゝ逃げ歸つた。が、だれにもみつからずに、生徒舎へ飛び込むことができた。ちやうどそのとき、さつきの傳令が息を弾ませながら、建物の反對側のところへ戻つてきて、應接室のマッチを三つ、恭しくフラクシーの前に差し出してゐるのがみえた。「フラクシー」はそれを受取るなり雪の上に叩きつけ、戦争ダンスをやつて踏み潰してしまつた。

「やい、この間抜け新兵、斧をもつてこいつていつたんぢやないか！」

ブリブリした「生徒班長」が唳鳴りつけた。

それから、落ち着いて禮儀正しく注目してゐる當直に命令した。

「非常呼集の太鼓だ！」

「デブのスケュワートが狙つてゐたのは、あれに違ひない。」ゴートは、四角張つた敬禮をして戻つてゆくとき、獨語をいつた。「衛兵所の太鼓をもちださうしてやがつたんだ。」

ゴートは「鬼婆」【管鼓隊の練名】の寝てゐる場所を知つてゐた。で、早速管鼓隊の隊員を廣場にひつぱりだして、まだ火をつけない花火が残つてゐるうちに、非常呼集の號音を鳴らさせた。生徒舎の八つの扉はバターン、バターンと押し開けられ、四ヶ中隊は、月明りと薄れかゝつた藍色燈と點火装置の光に照らされた廣場になだれこんだ。廣場は、あらゆる階級の「生徒班長」で藍色になつた。生徒隊指揮官の「お祖母さん」もでゝきた。校長のシヨフィールド少將の顔もみえた。だが、役付の生徒は、完全な服装をした級長ゴータルス以外には、たゞの一人も顔がみえなかつた。

「衛兵隊を編制！」

ゴートは早速編制した衛兵隊を指揮して、「七月四日」の臭ひのする生徒舎の廊下を「七月四日はアメリカの獨立祭」、行方不明の師團長や旅團長連を捜索しにいつた。その連中の部屋はどの部屋も、扉の框に銃身の長い七三式スプリングフィールド銃を渡し、それを内開きの扉の握りにしつかり結びつけてあり、一人残らず、マンマと部屋のなかに閉ぢ込められてゐるのであつた。釋放された役付の生徒たちはすぐその位置に立つて、點呼がはじまつた。

「全員集合しました！」

「ドーン！」だいぶ後れたが、攻城砲臺六番砲の轟然たる砲聲が響いた。

「もう一度點呼をやれ！ 代返する奴がないやうに、氣をつけて！」校長が命令した。

「全員集合しました、閣下！」

校長は、奇蹟にでもぶつかつたやうな顔をした。

遊歩場の樹の蔭で、一人の不逞な男が、月にむかつて何かわからぬことを口走つてゐた。砲煩砲術部の一職員であるが、他の將校たちが、最初の砲聲を聞くと同時に廣場に駆けつけたとき、かれだけは、職業的本能から攻城砲臺へ惹きつけられたのであつた。だが、そこへ駆けつけたときには、なんのためにやつてきたのかすつかり目的を忘れてゐた。この先生は、生徒たちが大砲を發射する前から、獨身者集會所の同僚連とかなり景氣のいゝ、仲間だけの新年宴會をやつてゐたのだ。混亂の霧に包まれてゐるうちに、ふと砲尾にぶら下つてゐる曳繩が眼についた。そして、それをひっぱつてみたいといふ馬鹿げな衝動に従つたのであつた。爾來數年の間、かれはその一件については牡蠣のやうな沈黙を守つてきた。

生徒舎の屋上の砲塔のひとつに、トロフィー・ポイントで造つた、一門の小さいコーホルン式榴彈臼砲がある。これまでのニュー・イース・イーズにもみんなやつてみたが、どうしても發射できなかつたものだが、つひに、次の朝の七時ごろまでかゝつて、發射に成功したものが現はれた。その問題を解決したのは、

最後まで頑張つたこの年のがむしやら連であつた。

(註) ある人は、それを禮砲發射用の大砲だといつてゐる。諸説あるも、一致してゐない。

全然關係のないことが明白な、ごく少数の生徒以外には、それから四月までの間、舞踏會にゆくことは一切禁止、休暇は全部取消といふことになつた。ゴートはお咎めなしの組であつたが、その連中は一人として、苟しくもさういふ特赦を利用することが、士官學校生徒の本領に背かぬ行爲だと考へるものはなかつた。いくら調べても、全然犯人はあがらなかつた。で、退校を命ぜられたものは一人もなかつた。このニュー・イアス・イーヴ事件は今日にいたるまで、士官學校の歴史ちうもつとも猛烈な悪戯として、——犯人は一人もあがらず、處分を加へることもできなかつた珍事件として聞えてゐる。

ゴータルスは、ロバート・イー・リー將軍と同様、卒業に際して一點の罰點もなく、完全にウェスト・ポイントの生活を楽しんだといふ、驚嘆すべき成績をあげた。それは、一定の期間罰點をとらなかつた生徒に對しては、過去の罰點を何點か成績簿から消してやるといふ、當時行はれてゐた制度のお蔭であつた。ゴータルスの例における如く、卒業の際に無疵の成績ででられるのは、その制度があつたからだ。とはいへ、無疵で卒業できるものは極めて稀だつた。【卒業の席次は二番であつた。】

ゴータルスは卒業するとすぐ、自分をウェスト・ポイントに推薦してくれた區選出の代議士を訪ねて、禮を述べた。それは主として感謝の念からでたことではあるが、恐らくは、士官學校に入學を許された當時の、

かならず卒業するまで在學するといふ誓約を實行したことを、みて貰ひたかつたからであらう。「夕暮れの」コックスは、ゴータルスが、自分などには會つてくれさうもない、陸軍總司令官などのところへ押しかけてゆくことはいやだといつて、辭退したにかゝはらず、どうしても、ウィリアム・テカムシー・シャーマン將軍へ紹介狀を書いてあげようといつて肯かない。しばらくの間は二の足を踏んでゐたが、やがてかれは大いに勇を鼓して、將軍を訪ねていつてその紹介狀を差し出した。

シャーマン將軍は親切に迎へてくれて、會話の間に、この新任の陸軍少尉に、何兵科にはひつたかとたづねた。

「工兵であります、閣下。」

「へーっ！」シャーマン將軍は意外さうな顔をした。「だが、君は工兵科にはひつたところで、將來國家のために盡す日がくるだらう。」



## 第四章 青年將校時代の土木工事

一八八〇年六月に士官學校を卒業すると、ゴータルスは陸軍少尉に任ぜられて工兵團に編入されたが、その年の夏から秋までの間、天文学の助教として母校に残された。十月には、ニューヨーク州ウイレッツ・ポイント（現在フォート・トッテン）の應用工科學校に、將校學生として入學し、約二年間在學した。

「ここで、最近の數期の若い卒業生たちが、將校としてはじめて顔を合はせた。われわれは當然、新入生の一人々々に對して興味をいだいた。」七九年級のフィーバー大佐が書いてゐる。「われわれは間もなく、ゴータルスをクラスの人気者たらしめた性質を發見した。人を惹きつける人格をもつたかれは、威嚴はあるが友誼的であり、謙遜ながら自信に満ち、尊敬すべき廉直な資質、愉快な氣分をもち、受け答へがテキパキしてゐて、いさゝか愉快さうな皮肉味を帯びてゐる。態度風采は軍隊的で、着こなしは上品であり、言葉でも吐き出し、決して下卑た眞似をやらない。その忠誠心と素直な服従的態度は、上官の間における人望をかためた。氣質は藝術的であり、趣味は藝術的な美にむかつてゐた。かれは音楽が好きで、自身テナーの美聲を

もち、われわれ仲間の多くのものが、シーズンちう一週間に幾晩も通ふ、ニューヨークの古い音樂學校のオペラを何よりの楽しみにしてゐた。」

一八八二年十月、ゴータルスは工兵將校としてコロンビア軍管區附を命ぜられた。司令部はワシントン州（ワシントン州）になる以前、ヴァンクーヴァー兵營にあり、司令官はネルソン・ニー・マイルズ將軍である。ゴータルスはそこで、實地踏査、測量、天文学關係の仕事に従事してゐた。着任後間もなく、雪解け水の洪水のために、スポーケーン要塞に通ずる唯一の近道にある、スポーケーン河の橋が流失したので、できるだけ早く架橋せよといふ命令がゴータルスに下つた。

「あれは、今まで手がけた仕事のうちで最大の難事業であつた。」ゴータルスは四十年後になつて、かう述べた。「それ以來手がけた仕事は、あれに較べれば、どれもこれも容易なものだつた。それは、私が再架橋を命ぜられたその橋が、特に難物であつたためではない、——延長百二十フィートの、桁構への木橋に過ぎないのだ。何も新しい點はないし、その種の橋は、現にあちこちにザラにある代物だ。しかし、私はそれまで橋といふものを架けた経験がなく、あまり架橋工事のことを知つてゐなかつたのだ。それが困難の一部であつた。加ふるに、架橋の場所が、木材以外のあらゆる工事材料の供給所から非常に離れてゐるのに、できるだけ早く仕上げるといふ註文であつた。この仕事こそ、かつて私が命ぜられた仕事のうち、飛びつ切り一番困難な仕事であつた、経験を積んだ橋梁専門の技師であつたなら、何も困難な仕事ではなかつたらう。

どうすればいいかといふことを、正確に呑み込んでゐるからだ。ところが、私はさうではなかつた。工事を進めながら、先々の手順を発見していかなければならなかつたのだ。で、徹夜で本を讀んでは、一日ちう命令を下してゐた。だが、われわれはつひに橋を架けた、——しかも期限までに。それが命令であり、事は命令通りに運ばれたのだ。けれども、それ以來のどんな仕事も、あれほど困難だと思つたものはなかつた。

それが工學技術の方法である。技師として眞にやる價值のある仕事は、かならずしも巨大な眼覺ましい仕事ではない。……單に巨大であることだけがものをいふ場合もある。が、さうでない場合の方がすつと多い。偉大さを生みだすものは、征服された困難である。自分のしてゐることを知つてゐるならば、何も困難なことはない。私の手がけた最初の橋が深く記憶に刻みつけてゐるものは、自分は自分のしてゐることを知つてゐなかつたといふ事實である。最大の名譽に値ひする人は、いかにそれが拙からうと、はじめて、何かの仕事をする人である。その後に従ふ人々は重役か管理人であり、——發起人ではないのだ。」

(註) 一九二二年一月號「アメリカン・マガジン」所載サミュエル・クロウザーの一文

間もなく、陸軍總司令官ウィリアム・テカムシー・シャーマンが檢閲に廻つてきた。ゴータルスは非常にびつくりしたが、——はじめて會つたときの將軍の言葉を思ひだして、——將軍は、これから北西部の各地を檢閲して廻るが、その間すつと隨行して貰ひたいといつて背かなかつた。あのときの「へーっ！」といふ呆れたやうな聲は、恐らく新らしい部下の「人間」に對して投げかけられたのではなく、あたら美青年が全

軍の花形たる歩兵でなく、工兵などを選んだことに對する、老野戰砲兵のムカムカした氣分を漏らしたのであつたらう。

「私は非常な興味をもつて、ゴータルスを眺めてゐた。」シャーマンは一八八四年、ある手紙に書いてゐる。「それはかれが、私の非常な親友であり、私とその輝やかしい將來を豫言した、マクファーソン將軍に非常によく似てゐるからだ。」同じころに書いたもうひとつの手紙には、「かれ(ゴータルス少尉)は、太平洋沿岸におけるもつとも優秀な青年將校だ。」と折紙をつけてゐる。

この青年將校のマイルズ將軍との關係は、それほど愉快なものではなかつた。ゴータルス少尉がコロンビア軍管區から異動になる二三月月前の一八八四年五月に、マイルズ將軍はかれをアラスカに派遣しようとしたが、ゴータルスはそれを拒絶した。その前年の夏に、マイルズ將軍がアラスカ探險に派遣した將軍の副官のある少尉が副官を辭任したので、かれは非常に不快に思つてゐた。この少尉からゴータルスにきた手紙には、アラスカ探險には武裝の十分な部隊が必要なのに、マイルズ將軍は、護衛として兵一名と軍醫一人しかつけてくれないと書いてあつた。マイルズはゴータルスを招んで、その未完成の仕事を受け取つて貰ひたいと切出した。どういふ事情の下にその内交渉が行はれたかについては、一八八四年五月四日附のゴータルスの手紙のなかにかういつてゐる。

「マイルズ將軍は、私を招んで、アラスカ派遣のことを切出されたが、私は受けたくなかつた。將軍は、

私がおか誤解してゐるのだと思つたといひ、ゆつくり再考する餘裕があること、決心を變へるのは今からでも遅くないといふことを話された。私は、この前決心をお話して以來、決心を變へるべき理由は起つてゐない、私を派遣したいといふお考であれば、閣下が命令をおだしになりさへすればいいのですと答へた。將軍は、命令はしたがらなかつた。といふのは、何か事件が起りやしないかと思はれたからだ。『派遣將校が土人の捕虜になつたり、殺されたりするチャンスは同じくらゐだ。その責任を背負ひ込みたくはない。』といふ。いさゝかでも危険にぶつかつていきたがるやうな風をみせる將校に對しては、警告を與へなかつた。それは、將校といふものは、自分で危険を發見すべきものだからといふわけである。將軍はある程度打ち明けて、その勤務はすこぶる不愉快な勤務で、退屈で困難な仕事だといひ、ポーブ將軍も、肚の底から喜んでゆくものでなければ派遣できない、といふ自分の意見に同意してゐたといふ話をされた。

この一件は、ゴータルスが、一生を通じてその性格上の特徴となつた性向を、早くも青年時代からもつてゐたといふ事實を示すエピソードとして價値がある。一旦かうと決心すると、かれはどこまでもその決心を變へない。上官の明確な命令に對しては、常に従順なかれではあるが、責任をもたぬ權力や、権力をもたぬ責任には用がなかつた。かれがいつでももちだす大嫌ひなものは、昔から行はれてゐる勤務の不公平であり、責任回避である。

一八八三年の夏に、將校の官舎町に一人の訪問者が現はれた。ニュー・ベッドフォードの陸軍大尉トマス・

アール・ロッドマンの娘エッフィー・ロッドマン嬢で、兄のサミュエル・ロッドマン少尉——八二年級のウエスト・ポイント出——を訪ねて、遙々極西部までやつてきたのであつた。獨身將校連がよく遊びにゆくなかつたの「獨身倶楽部の會長」もまじつてゐたが、かれはその地で、そのとき以來、會長の資格を喪つてしまつた。二人は翌年の十二月三日、ニュー・ベッドフォードで結婚した。一八八六年三月四日、ウエスト・ポイントで長男が生れ、二人の名をとつてジョージ・ロッドマン・ゴータルスと名をつけた。次男のトマスロッドマン・ゴータルスは、一八九〇年の十二月十四日ニュー・ベッドフォードで生れた。

一八八四年九月、ゴータルスはコロンビア軍管區から呼び戻され、オハイオ河の改修工事主任をしてゐたウィリアム・イー・メリル大佐の助手を命ぜられた。本部はシンシナチにあつた。この新しい任務についたとき、ゴータルスは、全然氣づかずにゐたが、後年かれをして、パナマ運河建設の大事業に對するすばらしい適任者たらしめた、あの特殊知識と實地の經驗を獲得する、重要な第一歩を踏みだしつゝあつたのだ。工兵團はこれまで百年近の間、その種の仕事を擔當してきた。十八世紀の非常な重大問題であつた、水路に關する各州間の猛烈な争ひを斷つために、憲法によつて、可航水路の管理權を聯邦政府の手に收めた。ウエスト・ポイントは、アメリカの土木工學、軍事工學兩方の母である。毎年々々その優等卒業生たちが工兵科にはひり、ミシシッピー河とその支流に對する果しなき戦ひに奮闘してゐた。

一九一九年ゴータルスが現役を退いてからしばらく後、ある工科學生の團體でかういふ講演をしてゐる。

「ウエスト・ポイントの合衆國陸軍士官學校は、フランス陸軍の工兵の指揮指導の下に設立された。同校は、アメリカにおける工科學校の嚆矢であり、しばらくの間は唯一の工科學校であつた。工兵と砲兵の將校の養成學校として設立されたものではあるが、初期の卒業生たちはわが土木界の重鎮となつてゐる。ウエスト・ポイントの卒業生は、最初の大體横斷鐵道の建設豫定線の測量と實地踏査に當つた。かれらの手によつて着手された事業は、後に合衆國地質研究所、沿岸測量測地所に發展した。カレッジや諸大學が、社會の需要を滿たすために技術教育を開始したとき、その講師や教授のなかにウエスト・ポイントの卒業生たちがをつた。かれらは今も、わが國要塞の設計及び建設とともに、河川港灣の改良工事監督の任に當つてゐる。」

(註) この講演の草稿は、かれの死後その私文書のなかより發見されたが、講演の場所及び時日は不明である。

一八八〇年代、メリル大佐は、アメリカにおける開門と堰堤建設の最高權威として知られてゐた。オハイオ河の改修工事は、測量と、堤防、堰堤、開門の建設が主であつた。ゴータルスがメリル大佐に對して職務上の報告を行つたとき、かれは肩から吊す金モールのことについて、率直に二三の注意を與へた。かういふ仕事に軍服を着てゐては、それだけハンディキャップがつくといふことがわかつてくるだらう、肩章のことなど忘れてしまつて、進んで民間の技手の下について仕事をはじめれば、工事の現場方面について學び得るところがあるだらう、さうでなければ、事務所に閉ぢこもつて、紙上の仕事をするだけだといふ話であつた。ゴータルスは、即座に勞働着を着る決心をした。

かれは水路測量の照尺手を振出しに、だんだん進んで測量班の主任、コンクリート工事の監督、築造工事主任の地位についた。そして、現場の實地體驗によつて、教科書や製圖室のなかでは得られない知識を學び得た。それから四分の一世紀後、あの車輛修繕工場のショーティーが、「工場にや、大佐の知らない道具はひとつもありません、——實によく知つてゐるんだ。」といつた、その時期にむかつて、かれは致々として準備を積みつゝあつた。ゴータルスは、またいつでも金モールをぶら下げてゐない——比喩的にさへ——といふことの價値も會得したのであつた。

オハイオ河改修工事の勤務一年ちよつと足らずの後、一八八五年の八月、ウエスト・ポイントの母校に轉任を命ぜられ、最初は土木工學及び軍事工學の教官、それから助教教授に昇任した。八〇年代のその教へ子の一人であるシー・デー・ローズ少將は、教室におけるゴータルスのかういふ逸話を述べてゐる。

「古くなつて、今にも倒れさうな校舎、——そのなかにあるかれの小隊室には、ギシギシきしむ床のまんなかに、小さな節穴がひとつあつた。不精らしく背中を椅子の背にもたせかけたゴータルス少尉は、われわれ生徒が何か暗誦してゐる間眼を半眼に見開いて、ちいつとその節穴をみつめてゐる。と、ときどき一匹の小さな鼠が、チヨロチヨロつとその節穴からでゝくる。それを狙つて、ゴータルスは、手に用意してゐた白墨をちぎつて、ピシヤリとぶつつける。最前列の席にたつて、滔々とやつてゐた生徒は、その亂暴な鼠砲撃のために言葉を中斷され、ドギマギして、今述べてゐた工學の問題の筋道がわからなくなつてしまふ。いつ

もその心理的クライマックスを狙つて、ゴータルス少尉はいつたものだ。「ちつぽけた鼠なんか気に氣をとられてはいかんよ、ブランク君。君の議論をドシドシ進めていきたまへ、鼠なんか全然おなかつたかのやうに。——」勿論、そのときには、全小隊は沈黙のヒステリーに陥つてゐるのであつた。」

ゴータルスが在任ちう、生徒のなかに、チャールズ・ヤングといふ黒人がゐた。一九二二年そのヤングが死んだとき、士官學校同窓會の年報にその略傳が載つたが、次に掲げるのはそのなかの一節である。

「かれのクラスの卒業期、一八八九年の六月に近いころ、生徒ヤングは、教授會議から工學の點數が及第點に達しないことを申し渡されたが、そのために、退學を命ぜられることは辛うじて免かれた。しかし、教授側も生徒たちも、その牢固たる堅忍不拔さと不撓不屈の決意とには、多大の感動を受けてゐた。その結果として、かれは同年の夏ちう學校に残り、點數不足を申し渡した當の教官について、不成績な學科の指導を受けることを許された。この教官は、高い正義感とフェア・プレーの精神を發揮し、ニグロ青年を助けて、その不成績な學科を征服せしめるのに、炎熱の二た月を捧げたが、その教官こそは今日のジョージ・ワシントン・ゴータルス少將であつた。ヤングはその八月三十一日に、八九年級の一人として卒業させられた。」

卒業後におけるヤングの業績は、ウェスト・ポイントの卒業證書を獲させるために與へられた、その助力に對して恥ぢぬものであつた。その経歴ちうには、騎兵第七、第九聯隊附としての内地及びフィリッピンにおける勤務、參謀本部長、ハイチ及びベリアの公使館附武官があり、一九一六年のメキシコ膺懲戰には、

パーシング將軍麾下の遠征軍に、騎兵第十聯隊の中佐として従軍し、世界大戰の終結後は、ふたゝび現役に復歸させられ、イリノイ州グラント兵營の開発部隊長を命ぜられた。ヤング大佐は、ニグロ種族に課せられた社會的ハンディキャップにもかゝはらず、その一生を通じて、上長から部下から尊敬と褒賞を贏ち得てゐた。」

一八八九年の八月、ゴータルスは、カンバーランド及びテネシー諸河川の閘門、堰堤の設計と建設の助手を命ぜられた。主任はジェー・ダブリュー・パーロー大佐で、本部はナッシュヴィルにあつた。かれがはじめて獨立の工事指揮を行ひ、かれとして最初の斯界の大工事に當つたのは、この仕事においてであつた。翌年の一月、かれはテネシー河改修工事の主任を命ぜられた。そのなかには、マスケル<sup>マスケル</sup>洲運河の完成、コルバート<sup>コルバート</sup>洲閘門の設計と建設とが含まれてゐる。本部はアラバマ州ローレンスにおくことになつた。工兵團司令官トマス・エル・キャシー將軍が、ゴータルスにこの工事の主任を命じたとき、マスケル<sup>マスケル</sup>洲運河の竣工及び開通の豫定期日はたびたび變更され、開通期日はそのたびに延期されてきた事情を話した。最近に決定した期限は、チャッタヌーガで工事進度に關する事件の審理が行はれる直前の日に指定されてゐた。處分を軽くして貰ふためには、それまでに、運河を通ずる可航水路の存在してゐることが必要であつた。キャシー將軍は、その期限以前に運河を開通させるやうにと、ゴータルスに命じた。

ゴータルスは、晝間と夜間の二交代制をとつて、夜間の方は直接自分が監督に當つた。そしてつひに、命

令の期限までにその運河を完成させた。糧食を満載してセント・ルイスを出帆した一艘の船が、新しい運河を通過してチャッタヌーガに到着したのは、あたかも事件の審理が行はれる前日であつた。

今は工兵大尉に昇進してゐるゴータルスは、引續きテネシー河の水路を維持し、マスケル<sup>マスケル</sup>洲運河の工事を進めつゝ、三年近の間その大工事監督の任に當つてゐた。この工事で、かれは鐵道建設の最初の經驗を得た。といふのは、元來は建設工事に、延長十四マイルの鐵道を敷設し、運轉したからで、その鐵道は、しまひには物資の運搬用と、運河を通航する船舶の曳船用に使はれるやうになつた。

そのころ、ニュー・イングランドに家を一軒建てゝゐたが、暇をみてでかけていつては、中央の階段その他の内部の木造部分を造つてゐる、アラバマの大工たちの仕事ぶりをちつと眺めてゐた。ゴータルス夫人はベッドフォード生れで、コッド岬南岸の沖のマーサ島のヴァインヤードで、娘時代の大部分を過ごした。ゴータルスは一八八九年の夏、夫人と一緒にはじめその島を訪ねたが、それから四年の間、島民の部屋を借りたりホテルに泊つたりして、夏を過ごした。ゴータルス大尉はその土地が氣にいつたので、九三年の夏にヴァインヤード・ヘーヴンに地所を買ひ、翌年の夏一家で住ふの間に合ふやうに、一軒の非常に頑丈な木骨家屋<sup>シラミックス</sup>を建てた。それ以後、ヴァインヤード・ヘーヴンを法律上の住居、生活の本據とした。かれは、その土地以外では投票したことがない。ゴータルス一家はもう避暑客ではなくて、——立派な島の住民なのだ。かれは地方のパナクル俱樂部に入會した。その後七年間パナマ地峡で仕事をして、世界的名聲を博した後、

しばらくの間島に滞在してゐたところが、その俱樂部員の一人で、ずつと以前船長を勤めてゐた老人が、「大尉殿、あんた今どこにゐなさるんぢやな？」と、愛想よく聲をかけたものだ。

九〇年代の話に戻つて、——テネシー河のゴルバート洲の工事は、自分で設計をして、リヴァートン<sup>リヴァートン</sup>門を築造したが、かれはこの仕事において、つひにはかれを並ぶものなき土木界の大御所に押し上げるにいたつた、すばらしい才能を發揮した。かれがゴルバート洲<sup>ゴルバート洲</sup>の工事の責任者になつた當時、テネシー河には開高<sup>開高</sup>【開門によつて高められる水位の高さ】十二乃至十四フィートの開門が十一ヶ所あつた。そこへリヴァートンに、開高各十三フィートの開門を二ヶ所増設するといふ案がでゝゐたのだが、ゴータルス大尉は前代未聞の破天荒な計畫を建言した。——開高二十六フィートの開門一ヶ所案を。猛烈な反對が起つたにもかゝらず、その計畫は採用された。開高二十六フィートに達する開門といふのは、當時アメリカは勿論、世界のどこにもなかつた。が、ゴータルスはそれを設計し、建設し、——開門は具合よく動いた。このリヴァートン開門こそは、高開高開門の先驅をなしたものであり、その性能が非常に優秀だつたので、それに倣つて廣く各所に築造されるやうになつた。一九〇六年、開高合計八十七フィートに達する三段の開門をパナマ運河に築造するといふ案がでたとき、有力な反對がひとつも起らなかつたのも、すでに多くの實證があがつてゐたからであつた。リヴァートンは、ガツンへの道を切り拓いたのだ。

開門の築造契約は、大尉が非常に反對したにもかゝらず、最低入札者に與へられた。かれは、その請負

人が無能な人間だったので、まあまあ我慢してゐた。工事が開始されるや否や、その無能ぶりはたちまち暴露される。巨大な水閘岸壁の基礎たり得るものは、堅固な岩盤以外にはないが、そこに達するには、下半部が流砂層になつてゐる、深さ約四十フィートの土砂を掘り除ける必要があつた。請負人は簡単に、掘り除ける區劃の周囲全部に板杭をうちこんでおいただけだつた。いよいよ流砂層にぶつかつて、二、三フィート掘り下げていつた途端に、周囲にめぐらした板杭の柵が、全部一齊に穴のなかに倒れこみ、そのために、閘門敷地の穴の周囲全體に土砂崩れが起り、崩壊區域は、掘り起す豫定線から三十フィートも、それ以上の先まで擴がつた。

ゴータルス大尉は、早速契約を取消して、雇傭労働によつて工事を完成すべきことを進言した。その進言は両方とも容れられ、大尉自身が全工事の監督に當ることになつた。そして、ウィリアムソンといふ民間技師を助手として、一部の監督に當らせることとし、まづ、契約解除を喰つた請負人がう、つち、やら、かしにしていつた、手のつけやうのない混亂の跡片づけから着手した。それから、ウィリアムソンの助力によつて、試掘坑を岩盤まで掘り下げるといふ方法を案出した。

ゴータルス以前には、だれもさういふ工法を試みたものがない。流砂は板柵の隙間から漏れだし、穴の底から噴き出し、——釘孔からさへも流れ出す。流砂が流れ出すために、底の方ががらん洞になるので、穴の周囲の上層の土砂が崩れだし、それが支への板柵に恐ろしい壓力を加へてくるので、穴の底で土砂を掘つて

ゐる工夫連は非常な危険に曝されるといふわけだ。

ある朝、試掘坑を覗いてみたゴータルス大尉は、その坑底の光景を一目みてひどく驚いた。そこには、助手のウィリアムソンが踏み鉄を握つて、シャベルで揚卸機ホウキの土取り桶バケツに砂をほうりこんでゐる、一團のニグロの間にまじつて働らいてゐるのだ。大尉はその行爲にびつくりしたものゝ、その場では一言もいはなかつた。労働者のゐる前で、部下に叱言ヒキゴトをいふべきものではないからだ。が、後で晝食ひるめしの食卓で差向ひになつたとき、ゴータルス大尉は技師に注意を與へた。

ウィリアムソンは氣拙さうな顔をしたに違ひない。それからすつと後、バナマでもかういふことがあつた。ワシントンからやつてきた技術委員會の一行が、ペドロ・ミゲルとミラフロレスの、水平面から水平面に登つてゆく中空の斜道「勾配のある隧道」をちよつとみて、ある老土木技師は、中世の寺院建築家の時代以來はじめてみる、美事な斜道扶壁を築造した驚嘆すべき手腕を激賞した。ウィリアムソンにしてみれば、たゞ重量を減じ、材料を節約しようとしたに過ぎなかつたのだ。それ以來何週間もの間、あの何マイルも先からみえるほどひどく赤い顔をしたといふ、バップ小唄のピーターのやうな思ひをして暮らした。さういふウィリアムソンだから、リヴァートンでも同じやうな氣分を味はせられたに違ひない。で、やつとのことでこれだけいつた。

「あなたは、——あなたは、岩盤まで掘り下げようとしてらつしやるんでせう？」

「さうだよ。」

「ところが、ニグロどもはとても入坑をこはがつてゐるんで、僕がついていかなきゃ入坑しないんです。」  
それは、ゴータルス大尉の考へてゐたことゝは違つてゐたのだ！ ウィリアムソンの行爲は、部下を率ゐて敵陣に突入する將校の行爲であつたのだ。そのとき以來、ゴータルスは終生、かれをあらゆる重要な仕事に股肱として重用した。爾來、ゴータルスとシドニー・ビー・ウィリアムソンとの仲に水を差さうとした不心得者は、いづれも自分がハンマーと鐵砧てつせきの間に挟まれてゐるのを發見するのが落ちであつた。二人は力を合はせて、コルバート洲の流砂を征服し、つひにリヴァートン開門の建設に凱歌を奏した。

ウィリアムソンは、後年ゴータルス大尉の仕事について述べたなにかういつてゐる。

「かれがワシントンに轉勤を命ぜられたときは、開門はまだ完全に竣工してはゐなかつた。しかし、設計は一切出來上り、従業員は揃つてをり、建設方針の問題はちやんと解決されてゐたので、工事は、かれがその地を離れる前から、順調に進んでゐた。一青年將校に過ぎなかつた時代においてさへ、かれは組織的才能とあらゆる従業員に對する公平さとを發揮した。その特質こそは、爾來一層大規模な工事においてますます鮮やかに發揮され、かれの有名な特長となつたものである。」

ウィリアムソンは、次のやうな個人的な回想も述べてゐる。

「ゴータルス大尉は、めつたに社交的な會合などに顔をだしたことがないが、アラバマ州のフロレンスとその近傍に非常にたくさん友人ができた。フロレンスでの一番の親友は、南部聯邦同盟の名譽の負傷をした老勇士、ジョン・アール・プライス大尉であつたらう。この人は、負傷のために非常に歩行の困難な身體になつたので、よく小馬に曳かせた馬車乗り廻してゐた。いかにも軍人らしい顔のゴータルスとこのプライスとが、小さな馬——ゴータルスがすこし力をだせば、少なくともその合棒は勤まりさうな——に曳かせた馬車に合乗りで、その邊を乗り廻してゐるのは珍らしいことではなかつた。

かれはその當時、パナマ運河に適用したと同じ正確さをもつて、視察にくる下院委員會の委員連を扱つてゐた。委員連は、實際上かれの作つたスケデュール通りに動いてゐた。私の記憶にある唯一の時間延長は、ケンタッキー選出のベリー議員が、マスケル洲運河第三開門の河床に生えてゐる薄荷を摘みたいと頑張つたときである。で、その註文に應じた後、船は運河を通過したが、その後検査を受けた工事はみな、委員連の眼に一層立派に映つた。

だが、師團所屬工兵のエチ・エム・ロバート大佐に、スケデュール通り全工事をみせて廻つたときだけは、あまりうまくいかなかつた。大佐は愉快極まる好人物で、大のおしやべり好きで、『根掘り葉掘り屋』ときてゐる。なんでもかんでも、事細かに説明しなければ納まらぬ性分だが、説明が腑に落ちないとすると、多少にかゝらず議論の必要も起つてくるし、質問の點を説明してもやらねばならない。

ロバート大佐は、工兵團の青年將校たちにとつては、まあ親爺といつた格である。ゴータルス大尉はこの



人物が非常に好きで、大佐がゴータルスの同期生を前にして、例の親爺らしい調子で、上官の悪口をいふといふ問題について訓示をやつたときのことを話しては、興がつてゐた。工兵團には、もう一人相當なやかまし屋の大佐がゐるが、ロバート大佐が話を終つたとき、一人の青年將校がかう返答した。

「でも、大佐殿、自分は未だかつて上官の悪口をいつた覚えがありません、ブランク大佐のことですへ、あの罰當りのやかまし屋のことさへ！」

## 第五章 ポート・リコ島の無血戦

ゴータルス大尉がテネシー河でやつた工事は、工兵團司令官トマス・エル・キャシー將軍の監督の下に施工されたのであつた。將軍は、特にリヴァートン閘門の築造において示された、ゴータルスのエネルギーと才能とに深い印象を受け、工事がまだ竣工しないうちに、——成功の見透しはつてからのことだが、——大尉をワシントンに招んで、工兵團司令部勤務の自分の補佐官に任命した。補佐官としてのゴータルスの特別任務は、土木工事の仕様書、契約、湖水測量、工兵管區全體の金銭出納の検査、報告であつた。この仕事は、大規模な土木事業における貴い體驗をかれに與へ、パナマ運河の建設に當つてもつとも貴重な知識となつた。

大尉は、一八九四年十月から九八年五月までその地位にあつて、キャシー將軍、ダブリュー・ビー・クレイグヒル將軍、ジョン・エム・ウィルソン將軍と、三代の司令官の下で働らいた。工兵團司令官は、大尉の作成した一八九七年度能率報告書に、かう書きつけた。「この將校と毎日接觸してゐた結果、大尉はもつと

も高潔な人格者であり、顯著な能力と卓越せる判断を有する技師であるといふ事實を印象させられた。かれは、苟しくもわが陸軍將校に——それがいかに高級な將校であるかを問はず——任せ得る仕事なら、いかなる仕事にも特別に適任であると、私は信ずる。」

一八九八年四月米西戦争が勃發したとき、ゴータルスは二人の將官から懇望された。その一人は、義勇軍第一軍團のジョン・ラッター・ブルック少將であり、もう一人は、キューバ派遣軍の准將「大佐と少將の間の階級、旅團少將ともいふ」ウィリアム・ラッドローである。ブルック將軍の幕僚にといふ交渉には、義勇軍中佐に昇進させるといふ條件がついてゐたので、かれはその方の申出を受けた。

かれが工兵團司令官の役所を去つたとき、當時の司令官ウィルソン將軍は自筆の個人的な手紙を與へたが、その手紙には、上官たちがいかにかれを尊重し、愛してゐたかを語る雄辯な證據が示されてゐる。

コロンビア區ワシントン

合衆國陸軍工兵團司令部

一八九八年五月二十五日

合衆國工兵團大尉

義勇軍中佐ジョージ・W・ゴータルス殿

ゴータルス中佐足下

過去十八ヶ月間、貴下が私に對して與へられた、熱心、誠實、有能にして徹底的に忠實なる御助力に對する、私の深い感謝の意を公式に表明することは、軍の規則によつて禁ぜられてをりますが、貴下の御昇進が、貴下の聰明で精力的なる御助力をこの司令部より奪ひ去ること、また私が直接の公的の公友のなかより一人の友人を失ふこと、——私がそのエネルギーと、熟練と、才能に對して感嘆し、尊敬することを學んだ友人であり、完璧なる軍人、非常に禮儀正しい紳士、誠實なる友人を作り上げるあらゆる品性を謙遜に示すことによつて、私の熱烈なる個人的好感をかち得た友人を失ふことに對する、私の大きな個人的な遺憾の念を表明することを禁ずる法律も、規則もありません。

私は、立派にその價值ある貴下の御昇進を迎へて、工兵團のために祝意を表します。

神よ、貴下が名譽の榮冠を戴いて、——貴下は、かならずその榮冠を贏ち得られると信ずる——無事に愛する友人たちのもとに歸り來ることを許したまへ。そして、貴下の御將來が、健康と、幸福と、繁榮に満たされることを許したまへ。 敬具

ジョン・エム・ウィルソン

合衆國陸軍

工兵團司令官准將

ゴータルス中佐は、この手紙の書かれる一と月近前から、ブルック將軍の幕僚の技術將校として、ジョージア州チックカウガ・パークのジョージ・エチ・トマス兵營に軍隊を收容する準備で多忙な日を送つてゐた。ブルック將軍は、陸軍長官に對する報告でかう述べてゐる。

「主なる困難のひとつは水の供給であつたが、それは、ポンプと給水管を設備し、チックカウガ・クリークより多量の水を引くことによつて克復された。その水は、分析の結果良質であることがわかつてゐた。さらに、多數の井を掘鑿し、右の方法によつて良質の水を供給することができた。それにもかゝらず、この人間の集團のなかに、間もなく各種の疾病が續々發生するにいたつた。事前にあらゆる衛生的豫防法を講じたのであるが、つひに及ばなかつた。」

一八九八年當時のいはゆる「衛生的豫防法」は、進歩した現代の醫學からみれば、憐れなほどお粗末で、恐ろしいほど不十分なものであつた。トマス兵營は、大抵の兵營と同様、戦慄すべき傳染病の巢と化し、アメリカの將兵にとつて、どの戰場よりも遙かに危険な場所になつた。軍醫監の年次報告によれば、トマス兵營に發生したチブス患者は三、四二六名の多數に達した。けれども、その責任はゴータルス中佐の給水管と鐵桁をはめた井ではなく、「大部分飲用を禁止されてゐた、——しかも、兵士たちは勝手に飲んでゐた——多數の地表泉」に歸せられた。監督軍醫のウッドハル大佐は、「炊爨所から三十ヤード以内にあつて、非常に危険な下水溝」をあげてゐるが、それと同時に、蠅の大群や山のやうな塵埃が、危険な微菌を自由に營舎

のなかに撒き散らすし、その營舎がまたすこぶる亂雑で、裝備の不完全な、それ以上に訓練のなつてゐない義勇軍の數ヶ聯隊が、雨の多い夏に、ジメジメした森林のなかの、土間の平屋に詰りなつてゐるのだ。ウッドハル軍醫は、豫防法については意味ありげに沈黙してゐるし、チブス豫防注射の如きは、一八九八年には夢にも及ばなかつた。さういふ事情の下では、傳染病の蔓延は避けることができなかつた。恐らく第一軍團の技術監の権限内にある何ものをもつてしても、それを豫防することは不可能であつたらう。

世界大戰の單調な能率にひきかへ、米西戦争は、愉快にも偶發的な家庭的出來事のやうなものであつた。一九一八年の、訓練を積んだ參謀將校なら、まさか海外派遣軍の行動を、ゴータルス中佐のやうに、すこぶる開けつ放しに手紙のなかでしゃべつたりするやうなことはなかつたであらう。が、中佐は十二になる息のジョージに、チックカウガからかういふ手紙をだしてゐる。(一八九八年七月二十二日)

「われわれはポート・リコにゆくことになり、私は明日午後二時半ニューポート・ニュースにむけて出發します。そこで數日間滞在し、それから、セント・ルイス號で目的地にむかひます。……」

ヘインズの旅團(第一軍團第一師團第二旅團)を割載した他の運送船數隻とともに、船團は七月三十一日にポンスに到着した。そこで、ブルック將軍は、麾下の部隊を、ポート・リコ島の西南角に近い一小港アロヨに上陸せしむべしといふ、マイルズ將軍からの命令を受けた。その港には埠頭がなく、激浪の打ち寄せる開けつびろげの海岸だけであつた。派遣軍には、曳船や汽艇の用意は一隻もなかつたが、錨地には、砂糖積

込用の平底の大型舢舨が五艘つないであつた。ブルック將軍から船着場を急造せよといふ命令を受けたゴータルス中佐は、一枝隊を率ゐてその舢舨を一艘占領し、それに砂を填めて沈没させて、船積場の基礎にした。兵隊たちは非常に迅速に仕事を運び、ゴータルスの命令で二艘目の占領にかゝつてゐた。これで、船着場の基礎は出来上がる豫定であつたが、そのとき一人の海軍大尉が現はれて、この五艘の舢舨はすでに海軍の手によつて拿捕され、戦利品として海軍が保管してゐるものだといふことをゴータルス枝隊長に通告した。のみならず、陸兵揚陸の掩護に當つてゐる戦艦の艦長たる司令官からの、拿捕舢舨を使用すべからずといふ中佐宛の命令をもつてきてゐた。

ゴータルス中佐は、自分は自分の司令官の命令の下に行動してゐるのだから、それ以外のだからも命令を受ける謂はないと答へ、大急ぎで二艘目の處分を済ましてしまつた。艦長のところへ報告に戻つたさつきの海軍大尉は、またやつてきて、中佐が命令に服しなければ、戦艦の火蓋を切るぞといふ艦長の言葉を傳へた。中佐はそれに對して、撃つなら撃てといひ放つた。艦長もさすがに撃ちはしなかつたが、ブルック將軍にねちこんできたので、舢舨は使用しないやう、木材を手に入れて波止場を完成すべしといふ命令が、更めて將軍から下つた。中佐は、木材はどうしても手にはひらなないと答へ、構はず舢舨を使つて、ドシドシ仕事を片づけてしまつた。そこで相手から、軍法會議にかけるぞといつて脅かされ、爾來數年の間、後には提督に昇進したその艦長殿から非常な不興を蒙つてゐた。勿論その當時は、相手は口も利かなかつた。が、

ゴータルス中佐はつひぞ一度も軍法會議には曳き出されなかつた。

ブルック將軍指揮下の騎兵、砲兵、輜重兵の全部を乗せた二隻の運送船が、殊な海圖のないボンス港内に擱坐したので、アロヨ港に到着するのが數日間遅れ、さうでなくてさへ遅々として進まなかつた揚陸行動は、そのために一層の遅延を來した。ヘインズ將軍麾下の歩兵數ヶ聯隊が奥地に進撃して、スペイン軍の小部隊を撃退し、八月の五日にグアヤマの町を占領した。三日の後、斥候が、グアヤマからキャヴェーに通ずる道路を扼する要害に、堅固な陣地に據る敵を發見した。そこはパプロ・ヴァスケツの珈琲園の近くで、道路は山の中腹を縫つて、峠の頂きにむかつてゐる。

やつとこのことで、麾下の騎兵と、野砲と、輜重車を上陸させたブルック將軍は、パプロ・ヴァスケツのスペイン軍の正面から攻撃を加へるために、八月十三日の未明、グアヤマから行動を起した。ヘインズ將軍はそれに呼應して、一列側面縱隊を作つたオハイヨ第四聯隊を指揮して、峠の稜線、敵陣地の背後に通ずる山麓に進んでいつた。南北戦争のヴェテラン、ブルック將軍は、幕僚とともに、徒歩で本隊の先頭に立つて進み、間もなく、八月八日に斥候隊が射撃を受けた道路上の地點に達した。そこで、先頭の野砲隊（ピッツバークのB大隊）に、前車を取り外づして射撃を開始せよといふ命令が下つた。

ゴータルス中佐は、他の幕僚とともに、カーヴした道路の端に立つて、双眼鏡でちつと峠の方をみつめてゐた。藍色のシャツを着たアメリカ軍の斥候散兵が、スペイン軍の塹壕のなかやその附近にチラホラみえる、

白服の姿めがけて前進してゆくのが手にとるやうにみえる。背後には、車輪の輾り、砲兵隊の慌だしい靴音、金属的な物音、命令の低い聲、尾栓を閉ぢる音などが入り乱れてゐる。――やがて、疲れたギャロップの蹄の音がして、一人の見知らぬ軍人が大聲あげながら駆けつけた。

「閣下、重要報告！」

ゴータルス中佐は、双眼鏡をおろして後をふりむいた。通信兵團の乗馬將校が一人、ブルック將軍に一通の封書を手渡ししてゐる。將軍はこの内容を黙讀してから、いちばん手近にゐる幕僚にそれを渡した。内容はかういふ文句であつた。

一八七八年八月十三日

ボンス港にて

アロヨ

ブルック少將閣下

大統領よりの命令により、敵に對する一切の軍事行動は停止せられたり。交渉は完了に近づき、議定書は、唯今兩國代表によつて調印されつゝあり。一切の司令官はその議定書の下に律せらるべし。

マイルズ少將閣下の命に依り通牒す

准少將 ギルモア

口惜しがつて口々に罵りながら、ベンシルヴァニアの砲兵は前車を取付ける、ヘインズ將軍の部隊は呼び戻される。全軍はグアヤマへ引揚げた。そこで、「ハーバース・ウィークリー」誌の特派畫家デー・ダートウォーカーが「ポート・リコ戦の劇的終結」といふ二頁大の記念畫をかけた。ゴータルス中佐は、息のジョージへの手紙にかう書いた。「私は、ブルック將軍を圍む幕僚としてボーズをとらせられました。御覽の如く、將軍のすぐ右にゐます。」

一瞬硝煙彈雨の巻と化さうとしたその場所から、明らかな失望をいだいて引揚げようとしてゐるその武人らしい姿は、ゴータルスのすぐれた肖像畫であるのみならず、その全軍人生活のシンボルでもある。戦闘精神の旺盛な軍人でありながら、つひに實戦の體驗を知らず終らねばならなかつた。かれの勝利は、戦場における勝利ではなかつたのだ。

二た月後の十月十八日、ゴータルス中佐は、ポート・リコの主邑サン・ファンの中央廣場を蹴下ろす、インテンデンシアの屋上の、旗のない掲揚柱のそばに立つてゐた。ブルック將軍の幕僚一行とともに、護衛兵を従へて、グアヤマから騎馬で北進し、撤兵委員會の委員長に任命された司令官の任務を輔佐してきたのであつた。その委員會も、今は任務を完了した。その朝、要塞から兵營から、最後のスペイン喇叭が鳴り響いた。千六百名のスペイン軍將兵は、城壁外の乗船場に行進していつた。寺院と市廳舎の時計から、十二時の最初の打音が響くと同時に、街々や廣場に整列してゐたアメリカ軍に、氣をつけ！ の號令がかゝつた。そ

れと同時に、ゴータルス中佐はじめ、各要塞や公共建築物における名譽の任務を授けられた參謀將校たちは、一齊に掲揚索を握つた。そして、十二目の打音が響くと同時に、星條旗を高々とポート・リコの空に掲げたのであつた。

そのときゴータルス中佐が掲揚した國旗は、後にブルック將軍から寄贈され、現に同家に所藏されてゐる。

## 第六章 海をゆく參謀將校

ポート・リコ島の無血戦から凱旋した年（一八九八年）の十二月三十一日をもつて、ゴータルスは義勇軍中佐の地位を圓滿辭任した。正規軍工兵大尉の官は、従來通り保持してゐた。これより先、その十二月十五日に、かれはふたたび母校ウェスト・ポイント陸軍士官學校の、實用軍事工學の教官に任命されてゐた。その翌る年、九九年級の卒業生は、フィリップピンで叛亂が勃發したため、ふたたび急激な戦時擴張状態にあつた陸軍が、將校増員の急に迫られてゐたので、卒業期を繰り上げて二月に卒業させられた。さういふ事情なので、かれの擔任の科目も非常に切り詰められることになつた。その結果、生徒のいはゆる「P・M・E」【實用軍事工學の略稱】の、九九年四月ちうにおける授業は一九〇〇年級だけに限られ、その範圍も軍用通信と舟橋の架橋に局限された。六月には、一九〇〇年と一九〇二年級が、フランスのルイ十四世時代にヴァウバンが大部分建設した、古來の正式な防禦工事法を習つた。ゴータルス大尉が年次報告に列擧した項目のなかには、「東柴、編條、堡籃（柴製及び鐵製）【圓筒籠に土をいれて野堡の築造に用ひる】、東柴編條被覆」など、

恐ろしく微臭い名の項目もあつた。しかし、「銃眼、砂囊被覆、單純壕及びその擴大……(實物大)」などは、斷然將來に富んだ名稱であつた。

いつのころから傳はつてゐるのかだれも知るものはないが、陸軍に傳はつてゐるこんな話がある。——ウエスト・ポイントのある軍事工學の教官が、生徒に對して新設の營舎にはひつた指揮官が、練兵場に國旗掲揚柱を建てる時はどうすればいゝかといふ問題をだした。念入りな答案が提出されたが、教官はみんな落第だといつた。指揮官たるものは、選抜兵を指揮する軍曹に對して、「國旗掲揚柱を建てろ！」と、一言命じさへすればいゝ、といふのが教官の答であつた。

ある匿名の雜文家が、二三年前に、ゴータルスとその主人公に仕立て、その話を雜誌に賣り込んだ。ゴータルスは、自分はそんなことをいつた覚えはないといつて、繰返し繰返し眞向から否定した。自分の「P・M・E」の生徒は、問題を紙の上で解くやうなことはなく、攻城法や架橋術の實際の仕事をやつてゐた。塹壕や舟橋舟に國旗掲揚柱を建てたりする人間などあるものかといふわけだ。

ゴータルスの教授法と紀律勵行法に關する眞真正銘の逸話は、一九〇〇年級のアール・イー・ウッド將軍によつて提供されてゐる。

「當時大尉であつたゴータルス將軍は、私がウエスト・ポイントの一年生當時、一八九九年六月から一九〇〇年まで、實用軍事工學の教官であつた。

われわれはみな、かれの嚴格で公明なことを知つてゐた。生徒仲間でのニックネームは「海龜頭」といつた。

私の記憶は、ひとつの出來事のほかは非常にぼんやりしてゐる。われわれ一年生の野營が行はれた一八九九年の夏ちう、ゴータルス大尉からP・M・Eの指導を受けてゐた。いろいろ作業が行はれたなかに、ハドソン河の下流に舟橋を架けるといふ大仕事があつた。七月のあるひどく暑い日であつたことを覚えてゐるが、クラスが集合したところで、ゴータルス大尉は一同に作業開始を命じた。生徒のうちの數人が、子供のやうに、架橋作業をやるには暑過ぎるときめこんでしまつた。そして、四、五人のものは、太い杭の後の日蔭に腰を下ろして、だらしなく休んでゐたが、ひよいと顔をあげたところが、いつの間にか教官がやつてきてゐるではないか。われわれは一齊に飛び起きた。教官はわれわれの顔を見廻して、すこぶるわざとらしい微笑をうかべながらいつた。「君ら青年紳士諸君は、いま野角【丸味付の角材】の運搬を割當てられてゐる【野角は橋を支へる重い木材だ】、で、君らはこれから駈歩で野角運搬をやりたまへ。」そこで、われわれは次の四十五分間といふもの、駈歩でその重たい材木運びをやつたが、ひどく息が切れて、しまひには舌がグラリと垂れてしまつた。それ以來私のクラスには、ゴータルス大尉の時間に二度とサボるものは、だれもなかつたと思ふ。」

その「すこぶるわざとらしい微笑」は、士官學校長に對するゴータルスの年次報告ちうにある、いさゝか

不吉な一節に光明を投じてゐる。「小官が中隊の指揮に任じて以來、脱營事件が六件あつた。そして、どの事件においても、中隊の側が勝利者であつた。」【脱營兵が悔悟して歸營したの意】

橋梁の材料、攻城法の材料を用意し、實用軍事工學の生徒の作業を助けるのは、今日「合衆國陸軍士官學校工兵分遣隊」と呼ばれてゐる、工兵第二大隊のE中隊の任務であつた。この部隊は一八六一年創設以來連綿たる歴史を有し、三度の戦争に出征した名譽あるレコードをもつてゐる。ジョージ・ワシントン・ゴータルスがその中隊長になつたとき、隊はサンチャゴ戦から凱旋したばかりのところ、そのなかには、南北戦争にまで互る長い想ひ出をもつた老兵たちがゐた。世界大戦ちうの一九一七年、大佐の息ジョージ・アール・ゴータルス大佐が、父と同じやうにその「分遣隊」の指揮官になつたとき、父の時代からの老下士が、まだ四人も現役で勤めてゐるのを發見した。それが一九二九年になると、その四人もずつと以前に退役年齢に達してしまつたが、令息大佐時代の部下であつた軍曹は、まだ何人か同じ中隊に勤務してゐた。このやうに、同じ中隊に父子二代勤務したといふ例は、合衆國陸軍には殆んど絶無といつてもいゝほど稀であつた。

一八九九年當時のE中隊は、實用軍事工學の授業の手傳ひのほか、種々雑多な任務をもつてゐた。まづ毎日下士二名兵十一名の衛兵をだすほか、こみ過ぎる營舎内の整頓もやれば、營庭の手入れ、菜園の耕作もやり、在營者子弟の特設小學校の先生をだしたり、攻城砲臺の作り替へ、豫備砲臺全部の手入れ、新しい射撃場の建設も引受ければ、生徒の射撃演習の監的手も勤めた。南北戦争戦死者記念日には、第五街まで行

進を行ひ、四ヶ月後には、デューイー提督を記念するため、グラントの墓地からワシントン廣場までの行進を行ふのが例であつた。

ゴータルス大尉は同時に、新しい水道の濾過池築造工事を監督してゐたが、非常に完全に出来上がったので、これまでのやうに、生徒が宵越しの水をとつておくと、洗面器の底に分厚な沈澱物が溜まるなどいふことはなくなつた。一九〇〇年には、士官學校の圖書館の大修繕を行つたが、それは事實上建直しともいふべき大がかりな工事であつた。

建築の點からもその他の點からいつても、士官學校も、營舎もまだ依然として、ゴータルスが七〇年代、八〇年代に知つてゐたまゝのウエスト・ポイントであつた。生徒はその時代と同じ、南北戦争型の小さな鼠色の略帽をかぶり、將校と在營兵は傳統的な藍色の軍帽をかぶつてゐた。灰色の石造の營舎と、赤煉瓦の官舎にはガスがともされてゐた。ゴータルス大尉一家は、カトリック教會のすぐ東隣りに當る、二戸建ての三階建ての東側の半分、四十二號官舎に住まつてゐた。ジョージとトムの二人の息は、將校子弟のための、一教室しかないちつぽけな特設小學校に通ひ、E中隊營舎の兵隊さんたちと仲好しになつて、遊ぶときといへば大抵兵隊さん相手に遊んでゐた。

ウエスト・ポイントの實用軍事工學の教官は、普通任期が四年であつた。しかし、「分遣隊」の中隊長を兼任する關係上、當時の教官は大尉でなければならぬ規定になつてゐた。一九〇〇年の二月七日、ゴータル



スは工兵少佐に昇進したので、職制上中隊長の地位に留まることができなくなった。そこで、ニューポートの合衆國工兵管區司令官に榮轉させられたが、その管區は當時、ブロック島からナンタケットにいたる、河川港灣一切を包含してゐた。この期間におけるかれの主要な任務は、ロード・アイランド州のウエザレル、グレイブル兩要塞、マサチューセッツ州ロードマン沿岸防備施設の完成であつた。ロード・アイランドでは、築城用の資材を運搬する建設線を敷設運轉したので、鐵道に關する知識を一層深めることができた。

沿岸防備に對する國家的關心は、米西戦争によつて著るしく刺戟された。八〇年代のエンディコット委員會の建議にかゝる恆久的施設の多くは、現に建設ちうであり、防備強化は着々進行してゐた。一九〇二年の夏、ナラガンセット灣とロード・アイランド海峽東水道において、陸海軍の聯合演習が行はれ、戰艦の一艦隊が要塞を攻撃し、オランダで造つた潜航艇を含む水雷艇隊が、防禦軍の援助に當つた。ゴータルス少佐指揮下の工兵隊は、非常に短時日の間に恐ろしく多數の探照燈を蒐め、それを据ゑつけねばならなかつたが、少佐はその任務を非常に完全に遂行して、司令官から特に推賞を受けた。

米西戦争の齎らしたもうひとつの、一層重要な結果は、合衆國陸軍の指揮命令系統の全面的再組織であつた。従來は、平時戰鬪部隊に對する指揮權を握る、いはゆる「陸軍總司令官」なる地位があつたが、この總司令官の指揮監督權は各種の軍政方面の參謀や兵站部には及ばず、その方の長官は直接陸軍長官に對して報告を提出する制度になつてゐた。これら各種の軍事機關を調整し、それを整然一個の機械として動かせる中

樞的權力が缺けてゐたのだ。いざ戦争にぶつかつてみると、陸軍は、神經中樞はたくさんあるが、實際には腦のない巨大な有史以前の蜥蜴のやうに、しどろもどろに足掻くばかりであつた。

のみならず、いよいよ米西戦争の勃發に臨んで、軍首腦部の間には、いかに行動すべきかといふ明確な具體案をもつたものが一人もなかつた。大統領は、軍をタンパに派遣する命令を下すことはできたが、鐵道の輸送力、糧食の供給力、海上輸送に充て得る船腹、或ひは敵の諸港における陸兵揚陸の便宜、——例へばアロヨ港におけるが如き——そればかりでなく、他の無數の重要な事項も、たゞあてすつぼうに見當をつけ得るに過ぎぬ状態であつた。だから、中心的命令權のみならず、相互の連絡を密ならしめる通報勤務も必要であることは明らかである。

一九〇三年二月十四日に公布された參謀本部條例によつて、陸軍總司令官といふ連絡のない官職を廢し、大統領に直隸する參謀總長の官職を創設した。參謀總長は大統領及び陸軍長官の指揮命令の下に、一切の戰鬪部隊、一切の特殊幕僚及び兵站補給機關を全部ひつくるめて管理することになつた。これらの任務が、一人の人間の頭腦で處理するにはあまり複雑過ぎることは明らかであるから、その條例は、參謀總長の輔佐役として、他の一切の任務を免ぜられた四十四名の將校團を創定した。この新しい將校團の任務は、條例においてかう規定されてゐる。

「第二條 參謀團ハ國防計畫並ニ戰時ニ於ケル陸軍兵力ノ動員計畫ヲ作成シ、陸軍ノ能率並ニ軍事行動ノ

準備状態ニ影響スル一切ノ問題ヲ調査報告シ、陸軍長官及一般將校並ニ他ノ上長指揮官ニ對シテ専門的輔佐ト助力トヲ與ヘ、ソレ等各官ノ代理トシテ、本條例ノ規定ニヨリ参謀總長ノ隸下ニアル各種ノ將校一切ノ行動ヲ報告調整シ、並ニ隨時大統領ヨリ命ゼラルルコトアルベキ、法律ニ反對ノ規定ナキソノ他ノ軍事上ノ任務ヲ遂行スルコトヲ以テ任務トナス。」

初代の参謀總長に任ぜられたのはヤング將軍であり、これを輔佐する参謀將校のうち、二名は大統領セオドル・ルーズヴェルトによつて選任された。それ以外の参謀本部員は、ヤング、チャフィー、ジョン・シー・ベーツ、カーター、ブリッス及びランドルフの各將軍によつて構成された詮衡委員の手で選任されることになつた。委員たる各將軍は、その四十二名の参謀將校を推薦するに當つて、かならずその軍事上の成績に現はれた功績を標準とする、といふ宣誓を行はせられた。

この詮衡委員から提出した推薦報告はそのまゝ承認され、選任された各將校は、ワシントンに出頭して、ヤング將軍にその旨報告すべきことを命ぜられた。ゴータルス少佐はその被推薦者の一人であつた。そのほかには、同じく工兵團のデヴィッド・デューボーズ・ガイラルド少佐——後にパナマ運河中央區の主任となる、——砲兵團のペイトン・シー・マーチ大尉——後に世界大戰當時の参謀總長となる、——後の軍法會議判士エノック・エチ・クラウダー大佐、騎兵第十五聯隊のジョン・ジェー・パーシング大尉等があつた。この初代の臨時参謀本部を構成した四十二名の將校のうち、二十五名以上のものが將官に昇進する運命を荷つてゐた。

一九〇三年八月十五日、この臨時参謀本部が廢止されるに當つて、ゴータルスは新らしい恆久的な参謀本部の部員に任命された。参謀本部第三部に配屬され、翌年一月六日には、陸軍大學校の常任の職員に兼任された。一九〇五年、二十年以前のエンディコット委員會のやつた仕事を補ふために、一般にタフト築城委員會と呼ばれる、沿岸國防委員會が創設されたとき、ゴータルスはその幹事に任命された。かれは委員會の頻繁な視察旅行で、長い間タフト陸軍長官と緊密な接觸を保つ機會を得た。委員連はその間、大西洋、メキシコ灣、太平洋沿岸の殆んどあらゆる要塞を視察して廻つた。

この視察旅行は、普通軍艦によつて行はれた。海軍では家族的な習慣に従つて、甲板士官が、「艦長殿、唯今九時であります。」と嚴肅な態度で報告すると、艦長は「それでよろうし！」と答へて、クロノメーターの動きを公式に承認するが、陸軍長官と工兵少佐には、その四角ばつた海軍の儀式がなんとなく面白かつた。ある晩、その二人がある軍艦の艦長室で話し込んでゐたとき、タフト長官は欠伸しながら、「唯今寝る時間です、閣下——將軍！」とやると、ゴータルス少佐もそれに應じて、お祈りのやうな調子で、「それでよろうし！」とやつた。

タフト長官は、ゴータルス少佐に會ふ毎に、その仕事をみればみるほど、その工兵將校の人格と造詣の深さにいよいよ敬意を深めるやうになつた。長官の受けたこの印象は、つひに世界史と世界地理の上にその痕

跡を印することになつた。それは、その當時にいたるまでの陸軍省擔當のもつとも重要な大事業は、パナマ運河の建設であつたからだ。

ゴータルスは一九一八年、出征部隊に編入して貰へない一人の若い歩兵大尉を慰めようとして、自分の生涯を回顧しながら、哲學的に論じた。

「人生といふものは、精々よくいつて、よつほど奇妙なものだよ。自分にとつて有利だと思つたことが、反對の結果になることはよく経験することだ。また過去をふりかへつてみると、義務づくでやらされたことが、損どころか、かへつて徳になつてゐる。私はウェスト・ポイントの中隊長の任務では苦しい思ひをしたが、いよいよ任務をへて實地の仕事についたとき、ウェスト・ポイントに勤務してゐたお蔭で、さうでなければとてもやれまいと思ふほど、非常に確實に仕事がやれることを知つた。私は、参謀本部員に任命されるのに反對だつた。そして、ニューポートの結構な地位やその他の有利な専門の部署を惜しい惜しいと思ひながら、在任ちうすつと不遇を仰ち續け之ものだ。だが、その任務をやつてゐなければ、決してパナマへはいけなかつただらう。」

## 第七章 ゲーテよりゴータルスへ

|| 受け繼がれた「パナマ」のボタン ||

一八二七年二月二十一日

ゲーテと會食する。かれは感嘆しながら、盛んにアレクサンダー・フォン・フンボルト「ドイツの有名な學者で、當時まだ珍らしかつた新大陸を踏査して、權威的な研究を發表した」について語つた。かれは前から読みかけてゐた、キューバとコロンビアにおけるフンボルトの仕事、パナマ地峽を通ずる運河建設計畫に關するかれの意見に對して、特別な興味をいだいてゐるらしかつた。ゲーテは語つた。

「その問題について造詣の深いフンボルトは、メキシコ灣に注ぐ河川を利用すれば、恐らくパナマよりも立派に目的を達せられさうな、他の地點數ヶ所をあげてゐる。この問題は一切將來に屬し、一人の企業的精神の旺盛な人物に俟つべき問題である。が、これだけのことは間違ひなくいへる、——もしだれかど、積載量や噸數の如何を問はず、苟しくも船舶をメキシコ灣から太平洋へ通じ得るやうな、運河の開鑿に成功した

ならば、文明人たると未開人たるとを問はず、全人類に對して量り知るべからざる利益を齎らすだらう。

だが、私は、合衆國がさういつた事業を自分の手に收める機会を逸するかしらと思つてゐる。西部進出の確乎たる意欲をいなくこの青年國が、今後三十年乃至四十年以内に、ロッキー山脈を越えた廣漠たる地域を占領し、そこに植民することは豫想し得ることであらう。さらに、すでもつとも廣大安全な天與の良灣に恵まれてゐる太平洋の全沿岸に互つて、次第に重要な商業都市が興り、支那、東印度と合衆國間に盛大な交通を促進するにいたるだらうことも豫想されやう。さういふ時代が到來した場合、これまでのホーン岬迂回の、まだるつこしい、不愉快な、しかも經費のかゝる航海よりも一層迅速な交通線を、——商船と軍艦のいづれをも通ずる——北アメリカの東西兩岸の間に維持することは、單に望ましいばかりではなく、必要といつてもいゝほどである。それ故に、私は繰返していふ、メキシコ灣から太平洋に通ずる運河を造ることは、アメリカにとつて絶対に缺くべからざる事業である。そして、私はアメリカがその事業を遂行するだらうと確信する。

あゝ、その實現をみる日まで、生きてゐられたらなあ！——だが、それまでは生きてゐられまい。私は、もうひとつみたいと思つてゐるものがある。——それはダニューブ河とライン河の連結だ。だが、これはあまり巨大な事業なので、その完成に對して疑問をいだいてゐる。特にわがドイツの資源のことを考へた場合、よけいに疑問に思ふ。それから第三に、同時に最後にだが、英國がスエズ地峽を通ずる運河をもつのをみた

いと思つてゐる。あゝ、この三大事業の實現を視るまで生きてゐられたらなあ！ その目的を成就するため、五十年以上にも互る困難と闘ふことは、十分その甲斐があるだらう。

——「ゲーテとエックカーマンの對話」よりの抜萃

【この對話はゲーテ七十九歳のときであり、病歿したのはそれから五年後であつた。】

このすばらしい豫言があつてからちやうど十九年の後、アメリカは英國と條約を締結して、ロッキー山脈以西の國境に關する多年の紛争を解決し、オレゴン州はアメリカの領有に歸した。この多事の年一八四六年、アメリカはメキシコと戦端を開いて、カリフォルニアの征服を開始したが、一方においては、最初の快走帆船「レインボー」號がニューヨークで進水し、さらにアメリカは、「地峽」【パナマ】交通權は、現に存在し若くは將來建設せらるべき如何なる交通手段によるを問はず、米國政府及び市民に對し、また米國市民に屬する如何なる產物、製造品或ひは商品に對しても、公開、自由なるべきこと」を、合衆國政府に對して保障した條約を、ニュー・グラナダ共和國【後のコロンビア共和國】との間に締結した。アメリカはそれに對して、パナマ地峽の中立と、地峽地域に對するニュー・グラナダの主權とを保障した。

この條約は一八四六年十月に締結されたが、二年後の七月にいたるまで批准をみなかつた。それから四ヶ月の後米墨戦争は終結し、カリフォルニアには金が發見され、幾千ものアメリカ人は、大陸横斷の陸路の危険と、あの「ホーン岬迂回の、まだるつこしい、不愉快な、しかも經費のかゝる航海」を避けて、みな船で

パナマ地峡にむかつた。このゴールド・ラッシュの連中は、地峡の東岸シャグル河口の、神経の麻痺した、小さなニグロ村に殺到した。そこには、サン・ロレンツォ要塞の崩れかゝつた壘壁の下に押合ひしてゐる、芽茸きの屋根のつべんに、腐つた屍體のやうなろまどもが晝寝してゐた。そこへ、新調の赤いシャツを着込んだ、眼の色變へた外國人がどつと押寄せてきて、氣狂ひのやうに上りの川舟の座席を争ひ、血眼になつてゴルゴナ街道の騾馬を奪ひ合つた。三日の間、ビシャリビシャリ蚊をたゞき、眞つ黒な裸の船頭が棹を操つるのを眺めながら、獨木舟はその一步々にシャグル河をのぼつてゆく。夜は夜で三晩の間、人間のウヨウヨする土人の小屋の、土間に敷いた生皮の上で、蚤に攻められながら明かすのだが、食事はといへば、蜥蜴トカゲの肉に、四つ一ドルもする小さな鶏卵である。ゴルゴナ街道の方も、恐ろしく荒れた悪路を、十二時間の間、脊骨も折れてしまひさうな大難行を続けなければならぬ。騾馬は、泥濘ぬかるみの穴の底のコロコロした石ころを踏んでは躓き、そのたびに、前肢の肩のあたりまで泥のなかにのめりこんだ。——が、やつこのことで、トンネルのやうな林道を抜けて、波のやうにうねる無樹原サツアツチにいれば、一望涯しなき太平洋の濃紺碧に對して、稜堡の壘壁が、赤い屋根々々が、そしてあのパナマの寺院の双兒塔がそゞり立つてゐるのだ。

無聊に苦しみながら、サン・フランシスコ行の船便を待つ間、——船はゆつくり、三日もそこに碇泊する——ヤンキー連は、十七世紀の海岸堡壘の壘壁に名を刻みつけたり、つひには二つの日刊新聞を發行するのまで現はれた。それは「スター」と「ヘラルド」であるが、しばらくの間算盤に合はぬ競争を演じた後、

合同して現在の「パナマ・スター・アンド・ヘラルド」紙になつた。間もなく、その紙面には、ニューヨーク、シヤグル間、パナマ市サン・フランシスコ間を定期に往復する外輪汽船の發着日が載りはじめた。議會は、大西洋、太平洋沿岸をパナマ地峡にいたる郵便船の航路開設を決定し、合衆國郵便物の運送料として支拂ふべき経費を可決した。「パシフィック・メール」社の創立者ウィリアム・エチ・アスピンウォールと、大西洋方面の請負をやつてゐたジョージ・ローとは、第三の出資者ニューヨークのヘンリー・チョーリンシーと提携して、地峡横斷の鐵道を建設することになつた。このチョーリンシーと、ユカタン州のマヤ遺跡で考古學上の仕事をやつた先驅者で、有名な探險家ジョン・エル・ステフェンズとは、すでにニュー・グラナダ共和國から獨占的な鐵道敷設権を獲てをり、ステフェンズは、經驗家のジェー・エル・ボードウィン技師とともにその路線を探險し、百萬ドルの費用を投ずれば建設できると報告してゐる。

一八五〇年、開闢以來の大繁忙を呈してゐるシヤグル港から延びた海岸線のカーヴを廻つて、海軍灣ナヴィーベイ、またの名ライモン灣といふ灣の錨地には、捨小舟のやうな一隻の小二櫓裝帆船と、シヨンボリした汽船のテレグラフ號が、波のまにまに、縦に横に揺れ續けてゐる。陸地の方をみれば、一面マングローヴの密生した沼澤地と繁茂した叢林が、ギッシリ壁のやうに立ち塞がつてゐるなかを、マンザニョ島の、そちこちに切株の残つた狭い林道が、唯一の隙間をあけてゐる。夕方になると、五十人ばかりのニグロと混血土人の一隊の先頭に立つた髯をはやした二人の白人は、みんな腰まで泥塗れになりながら、ぐつたりした足どりで現はれ、

海岸に引上げてある幾艘かのボートに分乗して、テレグラフ號の眼も當てられぬ廢場所をさして漕ぎ戻つてゆく。陸の砂蚤と蚊の猛襲のことを思へば、船酔ひの方がまだましだ。血を吸ふ小蟲はあたり一面に充滿してゐるので、ヴェールをかぶり手袋をはめなければ、仕事など手につかない。一面の沼澤地は、だれかの血管からマラリヤ菌を吸つては、ほかの人間に注射して廻るあのアノフェレス蚊にとつては、誂へ向の繁殖所であつた。ある時期などは、同時に仕事に堪へるアメリカ人技師はたつた一人しかないといふ状態が続いた。トッテンとボードウィンとは、何度もかはるがはる「シャグル熱」に倒れて、かはるがはる監督に當るほかなかつた。そのとき、チョーインシーとステフェンズとは、もう一艘の船いづばいに、ジャングルとの戦ひに突進する増援隊と糧食を積み込んだ。

この鐵の如き開拓者たちは、潮水の灣内から海岸の沼澤地へと、一步々々構脚を進めてゆき、たうとうモンキー山で固い地面に達したが、その先はまた一層深い、廣大な沼澤地になつてをり、そのために、數フア・ロング「一マイルの八分の一」に達する線路は、一夜のうちにすつかり埋没してしまつた。さういふ状態で、會社の資本を喰ふことおびたゞしく、マンザニョ島からガツンのシャグル河の岸にいたる最初の八マイルだけの建設に、パナマ鐵道全線の建設費として出資された百萬ドルの、最後の一セントまで叩いてしまつた。

——これからまだ四十二マイルの建設が残つてゐるといふのに。——  
そのとき、汽船ジョージア號とフィラデルフィア號の二隻が、暴風のためにシャグル河口にはひれないの

で、避難しようとしてライモン灣にはひつてきた。その船客たちが海岸の鐵道をみつけて、どうしても無蓋貨車でガツンまでいつてみようといひだした。パナマ鐵道一日の乗客運賃が、現金で千ドルに上るといふニュースが傳はつたために、その株價と信用は非常に高まつた。忙がしい、利益のある通商路は、すでに顧客をとられて、昔日の儂がなかつた。シャグルは凋落し、衰亡して、マンザニョ島が都市區域になり、アスピ・ンウォール市にまで膨れあがつた。けれども、土地の官憲は、スペイン人がコロンプスと呼ぶやうに、「コロ・ン」と改稱した。どうしてさうなつたかといへば、郵便局はかれらの手にあつたが、たうとう「アスピ・ンウォール」といふ宛所の郵便物は、今後一切配達を拒絶すると布告したからで、爾來スペイン名が通用するやうになつたわけだ。

さて、確實に後退の一路を辿つてゐた河上の交通は、今度は確實に鐵道をリードする形勢になつた。それは、シャグル溪谷を廻る二十二マイルだけでは、鐵道は採算がとれないからだ。そこで、一舉七百萬ドルの大増資が斷行され、シャグル河にはバルボアスの木橋を架け、線路はキュレブラの、大陸分水嶺のいちはん低い頂上にまで延長された。残りの十一マイルに敷設する、帶鐵の角をつけた軌條は、帆船に積んでホーン岬を廻り、パナマ市からキュレブラにむかつて敷設されていつた。いよいよ「一八五五年の一月二十七日、眞暗な夜半の雨を衝いて最後の軌條は据えつけられ、その翌日には、一臺の機關車が大洋から大洋へと走破した。」

(註) エフ・エヌ・オーティス博士著「パナマ鐵道ハンドブック」一八六一年ニューヨーク出版

こゝに、シヤグル河が海に注ぐ限り語り傳へられ、信ぜられるであらう、人口に膾炙したひとつの物語がある。それは、パナマ鐵道の建設には、枕木一本について一人の人命を要したといふ言傳へである。線路がまだ未完成のバルバコアス木橋までしか達してゐなつた一八五三年に、パナマ地峽を訪問した一英國海軍士官は、その話はすでにそのころから流布されてゐることを發見した。そこで、かれはその「枕木」或ひはわが「大西洋を距てた從兄弟」のいはゆる「枕木」の數を勘定してみた後、はなはだ信をおき難い話だと感じた。

「それは、パナマでは『口癖』になつてゐるが、私は、死者の數が『枕木』『眠れる人』(悲しい言葉の暗合だ!)によつて算へられるといふ考へだけでも、すでに非常な誇張を含んでゐると信ずる。全線に互る材木一本毎に(各一ヤードの間隔)死者が一人だといふのだ!

だが、われわれは、死者實に四萬四千人を算するやうな、こんな戰慄すべき『死亡表』は、單なる惡むべき『頭腦の作り話』に過ぎないと思ひたい。事實は、その半數にも達してゐないのでと信じたい。」

(註) 「合同軍事雜誌」一八五四年第一部三九頁

事實問題として、また記録上の問題として、最初に敷設されたパナマ鐵道全線五十マイルの單線には、約十五萬本の枕木があつた。そして、工事着手以來竣工にいたるまで雇傭された人員の總數は約六千名であり、

死者の總數は八百三十五人であつた。パナマで病氣に罹り、そこを離れて間もなく死亡したのも多數あることは疑ひを容れないが、たとひさうであつたとしても、マラリヤの豫防法が全然知られてゐない時代に、熱帯の沼澤地で勞働する人々としては、従業員の健康状態は非常に良好であつたといふべきである。——つとも、トラウトワイン技師は、その「私的覺書」において、珍らしく問題の核心に近く肉迫してゐる。

#### 熱帯地における注意

「顔にヴェールをかけることは、不完全ながら沼癘氣を防げる方法である。

乾燥した室が大切である。鐵板のストーヴ。野營の場合には、叢林の木で終夜大篝火をたくこと。

沼澤を吹き渡つてくる風の方向に開いてゐる扉や窓は、かならず閉めておくこと。特に病人にとつては非常に重要である。が、それを開く必要がある場合には、ガーゼの幕または細い銅綵の網屏を張つておくこと。鹽水に觸れても錆びないから、鐵線より銅線の網屏の方がよい。

蚊帳は、蚊その他の蟲に對してのみならず、沼癘氣に對して有効である。ポルティング布が最強最良である。」

ヴェールをかぶり、幕を張つて寝たものには比較的熱病患者が少なかつたのだから、その當時としては、ガーゼの幕が、有毒な「沼癘氣」を含んだ恐るべき夜氣を濾過するのだと考へたことは、完全に論理的な推

理であつた。オーティス博士をはじめ、他の同時代の人々のなかで、パナマ鐵道建設ちうの黃熱病について書いてゐるものが一人もないことは、注目に値する。

一八五五年の一月に鐵道は開通したが、實際は、まだまだ完成には遠い状態にあつた。溪谷にかゝつた橋梁は、林立する緑色の木材の橋脚によつて支へられ、線路には砂利がはひつてゐず、機關車も車輛も非常に不足してゐた。そこで、社長は、運轉状態を改善し得るまで、乗客運賃は一マイル當り五十セント、手荷物は一ポンドにつき五セント、貨物は一立方フィートにつき五十セントといふ非常に高い賃金をとつて、大部分の貨客を敬遠すべきことを提言した。

「ところが、驚いたことには、この臨時賃金が採用實施された。が、さらに驚くべきことは、その賃金表が二十年以上も据置かれたのだ。會社當局は、高い賃金も廉い賃金も、同様に樂にとれるといふことを發見したのだ。かくして、この鷲鳥は間もなく、あまり先のことなど考へずに、驚くほど無節制に黄金の卵を産みはじめた。全線に互つて、四、五マイルおきに保線工夫長の小綺麗な小屋が建てられ、線路はいつも整然たる状態におかれた。新しい機關車、車輛は續々増加され、便利な兩終點の埠頭その他の建物が建設され、一切は優秀な状態にあつた。」<sup>(註)</sup>

(註) 前掲「パナマ鐵道ハンドブック」

橋脚は堅牢な築堤にかはり、木橋と軌條は鍛鐵になり、バルバコアスの大構桁橋は當時の一驚異となつた。

非常に白蟻に喰はれやすい松材のかはりに、熱帯アメリカ特産の堅木リグナムヴァイティの新しい枕木が敷設された。この木は非常に堅いので、先に孔をあけておいて打込まないと、鐵の犬釘でもひん曲つてしまふ。一八五五年に敷設されたこの新しい枕木は、五十五年後の一九一〇年、線路の位置変更のために取拂つたところが、また腐らずにゐた。

この延長五十マイルの鐵道の建設費總額は、最初の豫算百萬ドルに八倍する八百萬ドルを要した。けれども、全線の敷設が完了しないうちにさへ、合計二百萬ドルの貨客運賃をあげ、開通後最初の十ヶ年間にあげた収入は總額一千百三十三萬九千六百六十二ドル・七八の巨額に達した。これは、パナマ鐵道が、大西洋の通商と、カリフォルニアのみならず、北中南米の全西岸の交易を獨占してゐた黄金時代であつた。一隊の武装兵に護衛された、銃丸のとほらぬ鐵製の貨車は、船で搬ばれてきたカリフォルニアの産金を輸送してゐた。パナマ鐵道株の配當は年二割四分の高率を示し、ウォール街ではもつとも安全な投資のひとつに算へられてゐた。

ところが、一八六九年にユニオン・パシフィック鐵道が開通して、カリフォルニアの通商を奪はれた。が、それより遙かに重大問題であつたのは、英國の太平洋汽船會社の船舶に殆んど獨占されてしまつた、中南米西岸との貿易であつた。お話にならぬ馬鹿者のパナマ鐵道の重役連は、パナマ灣のタボガ島にあつた會社の工場、造船所を閉鎖するの餘儀なきにいたらしめ、止むを得ず、社船を南米南端のマゼラン海峽を通過して、



英國に直行させることになった。が、時すでに遅く、貿易の大部分は英國の船會社の掌中に歸してゐた。パナマ鐵道は、七〇年代の終りごろにはお定まりの「二條の銹鐵」と化し、かつての花形株も、ウォール街の相場師のフットボールになつてゐた。そのとき、海のかなたから新しい顧客が現はれた。それは、アメリカのパナマ運河史上普通に「フランス運河會社」と呼ばれる、「ソシエテ・シヴィル・アンテルナショナル・デュ・カナール・アンテロセアニック・デュ・ダリアン」である。

このフランス運河會社は、一八七七年パナマ地峽調査のために、フランス海軍大尉リュシアン・ナポレオン・ボナバルト・ウィースを派遣した。ウィース大尉は、パナマからコロンにむけて、全里程の三分の二しか踏査しなつたが、この兩市をつなぐ海平面運河の完全な目論見書を携さへて歸つた。建設費自體は、總經費の一割以内と計算してあつた。ウィース大尉は、翌年ふたたび多少の調査をした後、パナマにおいてのみならず、コロンビア合衆國——ニュー・グラナダ共和國はさう改稱されてゐた——領域内の他のいづれの地點においても、兩洋を通ずる運河を建設する獨占權を、ボゴタ政府から獲得した。フランス國民が、ウィース大尉如きを相手にして、殆んどなんの知識もたぬこの大企業に數億ドルの投資をしたといふことは、信じ難い話である。かれらの眼を眩惑させたものは、今やその大事業の總帥として現はれ來つた人物、——名聲赫々たるフェルヂナン・ド・レセップスの令名なのだ。

レセップスは、スエズ運河の開鑿によつて、祖國の名譽をあげた「フランスの偉人」であり、フランス最大の人気と名譽とを荷ふ大立物である。外交上の任務を帯びてエジプトに派遣されたレセップスは、訓練を積んだ技術者ではなかつたが、地中海と紅海の間を距てる、數百マイルの扁たい砂地と淺い湖水を掘割れば、容易に船舶を通ずる運河を開鑿し得ることを看取つた。さういつた運河は、スエズ地峽が今よりすつと狭かつた西紀數世紀前のころ、紅海とナイル河の支流ベルジャク河の間に實在してゐたことがある。

フランスには運河會社が創立された。エジプトの國王が株式の過半數を所有し、幾千もの臣民を、その昔祖先たちを國王がコキ使つたと殆んど同じやうに、事實上はなんの報酬も與へずに強制勞働に服させた。かくして、スエズ運河は、一マイル當りの工費百萬ドルをもつて十年間に完成され、一八六九年開通以來、株主に對して高率な配當を行つてきた。ところが、次の代の國王が破産して、一八七五年その持株を英國に賣つた。これは抜け目ないベンジャミン・ディスレーリの策動の賜物で、その結果、かつてゲーテがその實現をみたいといつたもの、——すなはち「スエズ地峽を通ずる運河の所有」を英國に與へるにいたつた。

レセップスが最初にパナマ運河關係の問題に顔をだしたのは、一八七九年五月パリに開かれた國際運河會議々長としてであつた。多くの國から招聘された經驗に富む海軍士官や練達な技師連は、自分らがなんの力もない少數派であることを發見した。かれらはたゞ員に備はつて、すでにできてゐるレセップスの決定に、勿體をつけさせられるだけが役目であつた。それはウィース大尉の設計に基づき、パナマ地峽を通ずる海平面運河を建設する案である。議長は、パナマの閘門式運河、及び様式の如何を問はずニカラグアに運河を開

鑿することの利益のいづれについても、討議することを許さず、自分の主張する様式及び路線の採用を強行した。投票の結果は、フランス人の崇拜者の支持によつて僅かな多數を獲たが、賛成者のなかには、實地の技術者はほんの僅かしかなかつた。このからくり、會議を終るや、レセップスはフランス運河會社の社長として、堂々表面に乗出した。會社はすでに、ウィース大尉の調査費及び特許料として、二百萬ドルを大尉に支拂つてゐた。一切の事項が決定をみた後、レセップスは最後に、權威的な技術者を網羅した大掛りな技術委員會とともに、パナマ地峽に乗込んだ。

かれがパナマの土を踏んだときは、雨期のすんだ後の乾燥期の最中で、年中いちばん美しい自然に接しられるシーズンであつた。パナマ鐵道全線を一度視察旅行して、各地で多くの演説を試み、果しない宴會と乾杯を續けた後、かれは急いでアメリカにむかつた。そこにはパナマよりもずつと長いこと滞在して、運河事業に對するアメリカ人の出資を勸説したものゝ、多大の成功を収めることはできなかつた。レセップスは一八八六年に、ふたゝび地峽を訪問して見物旅行を試みた。この二度の短期間の訪問を合はせて、やつと二ヶ月にしかならないが、レセップスは、それ以外パナマに足を踏み入れたことがなく、パリの社長室から運河を掘らうとしてゐた。かれはそのころ齡七十を越え、——一八〇五年生れ——土木工學に關する知識は極めて貧困であつたにもかゝはらず、スエズ運河の成功とお追従の禮讚とは、自ら世界最大の技術者をもつて任ずるほど、恐ろしく思ひ上らせるにいたつた。そして、あの國際運河會議を支配したやうに、絶對權を

もつて盲目的に運河會社を獨裁した。レセップスは、一方の地峽の、雨のない扁たい砂地と、もう一方の岬たる山岳と氾濫するジャングルとの雲泥の差を無視して、「パナマ運河は、着工、竣工、維持ともに、スエズ運河より容易であらう。」と公言した。

豫定された運河は、海面下二十七フィート半の深さ、運河基底の幅員七十二フィート、水面の幅員九十フィートの一大堀割であつた。路線は大體、兩洋をつなぐパナマ鐵道の線に沿つていくことになつてゐる。シヤグル河が運河に氾濫するのを防ぐためには、ガンボアの河流を堰きとめる大堰堤を築造する豫定になつてをり、また兩洋の潮位が違つてゐるので、太平洋側の沼澤地を掘つて、巨大な從潮繫船池も造る豫定であつた。太平洋側の干満の差は、大西洋側の十倍に達してゐる。

パリの議會は、以上の設計による運河の建設には、工費二億一千四百萬ドルを要するだらうと考へた。技術委員會は、地峽で陽氣な數週間を過ごした後、運河は工費一億六千八百萬ドルで完成し得るといつた。レセップスは自分の一存で、この數字を一億二千萬ドルに削減し、運河は六ヶ年内に開通し、開通後最初の一年に運河を通航する船舶の通航料は、一千八百萬ドルに上る見込と公表した。この有望な數字に眩惑され、「フランスの偉人」の言葉を信じた幾百幾千もの同胞は、貯金をはたいて、運河會社の無價値な株に注ぎこんだ。この老大家の名聲を、他人の金を釣る餌につかつた詐欺師や相場師らが、塵芥だらけのパナマ市の街をうろつき廻る、腐つた屍體のやうなのろまどもに劣らぬほど、ドヤドヤ押寄せてきた。レセップスその

人は正直な人物であつたが、過去の成功の記憶に盲ひてしまつて、パナマが第二のスイズとしかみえなかつたのだ。

幾千もの労働者、幾百萬ドルもの機械は、それを迎へる現場の準備が全然できもしないうちに送り込まれた。パナマ鐵道は、同社の決めた高い賃金を支拂ふ普通貨客としてゝなければ、その労働者、材料を運ぶことはお断りとでた。このゆすりの態度のために、フランス運河會社は間もなく、鐵道をそつくり買収せざるを得なくなつた。兩終點を含む買収費總額は、建設費の三倍以上の二千五百萬ドルであつた。けれども、鐵道の組織と經營は、依然としてアメリカ人の手に委ねられてゐた。

この先見の明を缺いたことは、フランスの失敗の第一の大原因であつた。第二の原因は病氣である。會社は、パナマ市を瞰下ろす、アンコン山のスロープに乗出した臺地に一ヶ所、コロンのライモン灣の水面上に杭を打つて造つた病院が一ヶ所と、都合二つの立派な病院を建てたが、蟻やその他の蟲が、その土臺の柱を傳はつて長方形の病室に這ひ込むを防ぐために、水を張つておいた四つの小さな皿のなかに、ぼろ、ぶらが湧いてゐるのをだれも氣づいたものがなかつた。看護婦として働らいてゐた、信心深い善良な慈善協會の會員たちは、恐ろしい夜氣を防ぐために、毎晩扉も窓も全部密閉してしまひ、換氣の全然行はれない、附添のない病室に患者たちを寝かしておいた。朝になつて、ひとつならず屍體を搬び出す日は、あまり多過ぎるほどであつた。

労働者の食糧に對しては適當な注意が拂はれず、よい食物が少ないところへ、悪い酒ばかりがふんだんであつた。「惡習は横行した。あらゆる種類の賭博、その他あらゆる形式の罪惡は、夜も晝も臆面もなく行はれた。恥を感じ顔を赧らめるなどいふことは、まったくなくなつた。強姦事件が思ひのほか多くなつたことは、永久の驚異として残るだらう。しかし、不思議なことに、この腐敗墮落のカーニヴァルのまんなか(註)にありながら、生命と財産は比較的安全であつた。」

(註) トレンシー・ロビンソン著「パナマの五十年」

とはいふものゝ、八五年のコロンにおいては、生命財産も特に安全ではなかつた。フランスの失敗の第三の大原因は賄賂であつた。會社は、地方官憲からも、パリの自社の使用人、政治家連からも、殆んど甲乙のない執念深さをもつて絞られた。ボゴタの政治家連は皮肉なモットーをもつてゐた。——「パナマはコロンの乳牛だ」と。パナマ地方は、コロンビアから完全に分離し得るほど強力ではなかつたし、コロンビアまた、地峽地域の平和と秩序を維持し得るほど強力ではなかつたので、革命は慢性的であつた。ペドロ・ブレスタンとその黒と黄褐色の配下はコロンを焼き、さらに、運河材料の倉庫がたくさん立ち並んだクリストバルの、フランス人の住む郊外地區を焼拂はうとしたが、そこへアメリカ海軍の、奇妙な恰好をした古い木造コヴェレット艦【一段砲装の三等艦】が三隻到着したので、危うく難を逃れた。軍艦からは、一八四六年締結の條約の下に、地峽横斷路の平和と中立を維持するために、五百名の物騒な面をした水兵と海兵隊が揚陸さ

れた。フランス人技師のビュウヴァリが、非常に興味をもつてこの事件を観察してゐた。

あらゆる事情を綜合して考へるに、不思議に堪へぬことは、フランス人が運河の開鑿に失敗したといふことではなくて、かれらがよくあれだけでも掘鑿したものだといふことである。技師長の顔は大抵半年毎に變り、全工事は、六人の大請負人と多數の小請負人の手に分れてゐた。工事監督の技師はみなフランス人だが、もつとも掘鑿の能率をあげた二つの請負會社はフランス人ではなかつた。柔らかな土地でしか使へぬ無器用な掘鑿機と、玩具屋の店頭からもつてきたやうな、ちつぽけなベルギー製の機關車と貨車をもつて、キューブラ切割カットから驚くべき多量のバラ土を掘り出したのは、オランダの會社（アルティグ・ソンドレツガー會社）である。浚渫機、浚渫船その他の水上工器用器具は遙かに能率がよく、その多くは、後にアメリカ人が修理を加へて使用した。その浚渫機の大部分は、スコットランドで製造された。しかし、フランス人の運河の、ガツンの先の入口を浚渫したのはヤンキーの會社（アメリカ浚渫請負會社）であつた。この會社は、その工事から正直な利益をあげた唯一の請負會社であり、その巨大な自國製の木製浚渫機は、一八八九年運河會社が没落するまで、十四マイルの距離を掘鑿してゐた。

レセップスは最初一億二千萬ドルを要求したに對して、倍以上の二億六千萬ドルの資金を得て、それを費消した。運河は六ヶ年以内に完成するどころか、會社は、九ヶ年間にその四分の一以下しか掘鑿できなかつた。豫定のガンボア大堰堤には、まだ石ひとつ据ゑつけられてゐない。從潮繫船池には全然手が着いてゐな

いばかりか、技術委員會のお歴々が浚渫容易な沼澤地と折紙つけた地域の、地下僅か數フィートのところは、頑丈な岩盤になつてゐることが判明した。レセップスは、くる年もくる年も苦しい釋明を試みては、運河の開通期を先へ先へと延ばす一方、ますます多額な資金を要求し続けたが、その額はつひに、將來運河を通航する船舶がいかに多數に上らうとも、到底収益をあげ得ない程度の途方もない巨額に上つた。パナマはスエズより樂な工事であることを發見するどころか、フランス人は、すでにスエズよりも數百萬立方ヤードも多い、八千萬立方ヤードの岩石や土砂を掘り、二倍以上の工費を使つてゐた。もはや最後のときがきたことは、だれの眼にも明らかであつた。

フランス運河會社には管財人が任命され、業務状態の臨檢が執行された。フェルチナン・ド・レセップスは刑事事件で告訴を受け、審理の結果禁錮六年を言渡された。けれども、判決はこの失意の老人に對しては執行されなかつた。が、それから數ヶ月のうちに、「フランスの偉人」は死んだ。幾千もの貧乏人たちは破滅した。實際の犯罪者のなかには、自殺したものが數人あり、その他は夫々罰金、禁錮の刑に處せられた。有罪を言渡されたものゝなかには、非常に多數の上下院議員、その他フランス政府の大官連があり、それがため、一時は、革命が勃發して共和黨が顛覆しかねぬ危険さへ孕まれた。

管財人の手にある會社財産の大部分は、機械器具及びすでに地峽で施工された工事から成つてゐたので、フランス政府は、舊會社の殘骸のなかから新パナマ運河會社を設立することを許可した。この新會社は、地

峽にある一切の機械器具、建造物を引き継ぎ、一八九四年に、十ヶ年以内に運河を完成する特許をコロンビアから獲得した。だが、新會社の資金はすこぶる貧弱で、常時三、四百人の従業員と、一、三臺の掘鑿機を切割に動かし得るに過ぎなかつた。さういふ状態であるから、運河は一九〇四年までには勿論、後に延期の許可を得た一九一〇年までかゝつてさへ、完成の見込はないといふこと、會社の唯一の希望は、買収者をつけるにあるといふことが、年とともにますますはつきりしてきた。そして、その唯一の可能な買収者がアングル・サムであるといふことは、だれでも知つてゐた。

米西戦争に臨んで、戦艦オレゴンが南米の南端を迂回して急航せねばならなかつたことは、アメリカをして、大西、太平洋兩岸を結ぶ、もつと早い作戦路の必要に眼醒めさせた。議會は、新フランス運河會社の權利と財産を、四千萬ドルで買収する案を可決した。會社は一九〇三年に、飛びつかんばかりにしてこの申出を承諾した。アメリカはそれと同時に、コロンビアに對して一千万ドルを支拂ふことを申し出たが、これは同國が運河會社に賣却を許可したこと、及び新たにアメリカに對して運河の建設及び維持を許し、同時に地峽を横斷する幅員六マイルの狭長な地域の完全な主權を讓渡することに對する反對給付である。

當時のコロンビア政府の首班たるマロキンといふのは、先に副大統領に當選したが、一隊の騎兵をもつて大統領を拉致し、不衛生な牢獄に監禁して、間もなくそこで死なせた人物である。そこで、この大統領マロキンは、アメリカの提議を審議にかけねばならぬ唯一の機關である議會を召集した。コロンビア議會は權利

料が安過ぎるとなし、かつアメリカの提案による「運河地帯」に對する主權を放棄するといふ案に憤慨した。そこで議會は、地峽地域選出のオバルディア議員が、パナマは叛亂を起すだらうと警告するのを無視して、アメリカの提議を拒絶した。マロキンの回答は、普通のボゴタの山カン政治屋のかはりに、オバルディアをパナマの州知事に任命することであつた。恐らく獨裁者は、かれを身替りに立てる魂膽であつたらう。

もしアメリカがパナマ運河建設の許可を得られない場合には、一アメリカ會社がすでに特許を得てゐる、ニカラグアに運河を建設するだらうといふことは、パナマの住民が残らず知つてゐた。もしさういふことになつたならば、パナマは多年の宿望たる將來の繁榮を根こそぎ奪はれてしまふのみならず、鐵道の運轉さへ止まつてしまつて、兩洋を結ぶ一切の通商路は凋落し、衰亡してしまふほかはない。それこそ、地峽の全地域にとり、——また新フランス運河會社にとつても、經濟的死活問題である。地峽地域には、一八八五年以來殆んど引續いて、コロンビアに對する、結果の思はしくない革命が續發してをり、それが絶頂に達して三年戦争（一八九九——一九〇二年）となつた。けれども、一九〇三年の革命は、ビュナウ・ヴァリラといふフランス人技師の舞臺監督によつて、有能に演出された。<sup>(註)</sup>

(註) 「パナマの大冒険家ビュナウ・ヴァリラ」参照

地方の守備隊は、長いこと月給不渡りになつてゐたが、非常に多數の地方の友人や戀人たちのために、短時日の間に味方に引入れられてしまつた。十一月四日午後の涼しい時間を期して、革命を起すことに決定し

て一切の手筈は整へられた。ところが、その前日十一月三日の朝に、徴兵でとつた四百名の兵から成るコロンビア軍の一ケ大隊と、數人の將軍がコロンに到着した。完全な革命派のシンパであるバナマ鐵道の地方職員が現金をもつてゐないところへつけこんで、乗車賃を現金で支拂はなければ、軍隊の乗車お断りとやつた。將軍連は特別列車を仕立て、バナマにむかつたが、そこで、バナマ共和國の建設を宣言し、新國旗を押立てた革命軍のために捕へられて投獄された。

コロンに残つた指揮官のトレス大佐がその報に接したとき、直ちに各將軍を釋放し、新國旗を引卸すべきことを要求し、もし應じなければ、コロンのアメリカ人を盡殺すると宣言した。婦女子は直ちに二隻の汽船に遭難し、男子はみな武装して、かうした事變に備へて頑丈に造つてある、バナマ鐵道の石造の貨物倉庫に集合した。一八八五年の革命と、その前後數回に互る叛亂に際して、居留民の生命財産保護のために、いかにアメリカの海軍部隊が干渉を行つたかを覺へてゐるビナウ・ヴァリラにとつては、それこそまさしく思ふ壺であつた。かれはそれより先、ルーズヴェルト大統領とヘイ國務長官に對して、近く地峽にまた叛亂が起る形勢であるといふ、絶對はづれつこのない、すこぶる巧妙なヒントを與へたが、その結果、すでに砲艦ナッシュヴィルがコロンに派遣されてゐた。が、艦長は、トレス大佐が血迷つてアメリカ人を盡殺すると放言するまでは、全然コロンビア軍に對して干渉しなかつた。いよいよ事態險惡となるや、ナッシュヴィルは水兵、海兵隊六十二名を揚陸した。トレス大佐は戰鬪準備を整へた貨物倉庫に對して武力示威を試みた揚句、

アメリカ人に對する深厚な友好的精神を聲明した。そのときすでに、バナマ市にある政廳の倉庫を占領してゐた叛徒は、早速一人頭約二十ドルで、トレス大佐以下全部隊を買收し、ロイヤル・メイルの汽船オリノコ號でカルタヘナに送還した。

革命派はバナマ市のホセ・アクチオン・アランゴ、マヌエル・アマドル・ゲレロらを中心として、すでに十一月三日をもつてバナマ獨立國建設を宣言してゐた。四日バナマ臨時政府組織を聲明すると、ルーズヴェルト大統領は直ちに喜んで、新しく巢立つたバナマ共和國を承認し、「三日後の十一月七日「事實上の政府」として承認し、九日後(十三日)には「法律上の政府」として承認した。」海軍の指揮官に對して、コロン、バナマ市の兩地より五十マイル以内のいかなる地點にも、コロンビア軍を上陸せしむべからずと命令した。コロンビアは當然抗議し、同時に軍隊を揚陸して、唯一の可能な戰場において自由に戦ふことさへ許されるならば、短期間に叛徒を討伐し、然る後に、アメリカの要望するものを——バナマ鐵道線——條約によつて許與しようとして出した。ルーズヴェルトはこの提議を拒絶した。が、ルーズヴェルトはこの拒絶によつて、アメリカが一八四六年の條約において保障した、地峽地域に對するコロンビアの主權を侵害したのであつたらうか？

シカゴ大學教授ハワード・シー・ヒル博士の見解によれば、——博士の學者的な立派な論文は、この問題に對する最後の審判をなしてゐる——ルーズヴェルトは重大な國際法違犯を犯したのだといふ。私はヒル博士が述べた同じ事實を取上げて、ルーズヴェルトは派遣の砲艦とともに、國際法の支持を受けてゐるのだと

主張するものである。

(註) 哲學博士ハワード・シー・ヒル著「ルーズヴェルトとカリブ海」一九二八年シカゴ大學出版部

ヒル博士が政府記録から寫しとつた、一八四六年の米國・ニュー・グラナダ條約第三十五條の重要な條文は、次の通りである。

「……合衆國ハ、本條約ノ存續スル將來ノ如何ナル時期ニ於テモ、一洋ヨリ他ノ一洋ニ至ル自由交通ガ遮斷若クハ妨害セラルルコトナカラシメンガタメ、本條約ニヨリ「ニュー・グラナダ」國ニ對シテ前記ノ地峽ノ完全ナル中立ヲ積極的且有效ニ保障ス。而シテ、ソノ結果トシテ合衆國ハ「ニュー・グラナダ」國ガ該地域ニ保持所有スル所有權ヲモ同様ニ保障ス。」<sup>(註)</sup>

(註) ヒル著前掲書三九頁。上院記録(第二十三議會第二會期)二三八頁

そこで、ニュー・グラナダが一八四六年に、該地域すなはち前記のパナマ地峽に保持所有せる主權及び所有權とは、果してどんなものであつたらうか？ ヒル博士の論文の隣りの頁をみれば、頁の冒頭からかう書してある。

「……ニュー・グラナダ共和國が創建され(一八三二年)、パナマは新國家を構成する十八州ちうの一州であつた。憲法はパナマの分離權(パナマは一八四〇年にそれを行使した)を認め、地峽地帯はその後二ヶ年間獨立共和國を形成してゐた。」<sup>(註)</sup>

(註) ヒル著前掲書三八頁

ニュー・グラナダ共和國自身の憲法によれば、ニュー・グラナダは一八四六年においては、パナマがいつ分離して獨立共和國にならうとしたところで、それに干渉する權利は全然もつてゐなかつたやうに思はれる。——しかも、一八四〇年にはすでに先例が確立されてゐるのだ。これは非常に興味ある問題である。

ヒル博士は、さらに續けていはく、

「一八五三年改正の憲法において、各州が何時でも獨立し得る權利は再確認された。パナマはこの條章に基づき、四年後(一八五七年)に二度目の獨立期にはひつた。その獨立期は、新憲法が實施されて現在のコロンビア共和國が生れた、一八六三年まで續いた。その新憲法においても、從來の憲法と同様、分離權が認められてゐた。

その後二十年間、パナマは事實上の自治國をなしてゐた。一八八五年、パナマは他の數州とともに、ヌニエス大統領の非立憲的な暴政に對して叛旗を翻へした。が、叛軍に勝つたヌニエスは、その餘勢を驅つて現行憲法の無効を宣し、その獨裁下に憲法制定會議を開いて、新基本法を起草した。パナマはその新憲法によつて立法權を喪ひ、一切の重要事項においてボゴタ政府に隷從させられた。新事態に對するパナマ人の不満は、しばしば地方的叛亂において、また全共和國に波及した叛亂への参加において爆發した。この全國的規模の叛亂は一八九九年の革命戦で、三年間の長期に互つた。」<sup>(註)</sup>

第七章 ゲーテよりゴータルスへ

この革命戦の決定的戦鬪は、一九〇〇年七月、パナマ市の鐵道構内からその附近にかけて戦はれた。戦鬪の審判官を承つたのは、アメリカの軍艦サン・フランシスコ號の艦長であつた。かれは、朝の北行急行が普通に發車した後、轉轍手が構内の中央にある轉轍塔から降りてくる餘裕を與へた上でなければ、戦鬪を開始してはならないといふルールを守らせるために、驛に陣取つてゐたのだ。(私は後にその轉轍塔をみたことがあるが、時間がなくてその彈痕を全部勘定することはできなかった。) サン・フランシスコ號と英國軍艦リーディング號の軍醫と擔架隊とは、待避線のところに控へてゐた。まつたく滑稽な、フットボール試合のやうな光景であつたが、たうとう最後に、ローズといふ、苦々しさうな顔をした、頭の禿げた金持のアメリカ兵が、カリドニア橋のつべん越しに機關銃をぶつ放して、喊聲をあげて突進してくる叛軍の縱列を密集隊形に歸らせた。

コロンビア政府が、軍隊をコロン、パナマの兩港に上陸させ、その兩港と鐵道沿線で作戦する許可を求めてきたのは、かういつた騒ぎを繰返したいといふことである。ヒル博士は、一九一二年當時のボゴタ駐劄アメリカ公使デュ・ボア氏の、非難的な言辭をもつともなりとして引用してゐる。「……ルーズヴェルト大統領は、コロンビアが勃發の形勢にある叛亂を鎮壓せんがため、自國領土に軍隊を上陸せしめ、條約の規定によつて保障された主權を維持する權利を否認した。……それは、コロンビアが過去八十年間支配權を維持し

てきた地域に對する、その主權を維持させることを拒絶せるものである。……」

(註) 前掲書六三頁

八十年間でなく、十八年間といつた方が一層正確であらう。コロンビアが銃劍と機關銃によつて維持してきた主權は、ヒル博士自ら明らかにしてゐるやうに、革命軍に勝つたヌニェス將軍が一八八五年に制定した基本法以外の、何ものに基づいてゐるでもない。然らば、アメリカは一八四六年の條約によつて、ニュー・グラナダが當時現實に保有してゐた主權を保障したのか、それとも、四十年近も後に、武力と銃劍によつて築き上げられる全然異つた「主權」を保障したのであらうか？ パナマ人は、憲法上の分離權を喪失したことを斷じて承認してゐない。たゞ武力のみによつて、多かれ少なかれ屈從を餘儀なくされてきたのだ。だから、一九〇三年、いよいよ現實に地峽地域を掌握するにいたつたとき、パナマ人は、一八三〇年から八四年にいたる五十五年間、法律上も事實上にも存在してゐたかれらの主權を再建した。そして、一八四〇年と五年當時と同じく、パナマを共和國と宣言した。ヌニェスの基本法は、アメリカとの條約の全體の意味を變更する溯及力をもつてゐるであらうか？ クーリッツチ大統領が、一九一七年のメキシコ憲法の溯及條項に對して強硬に抗議し、目的を貫徹したことは、記憶しておく必要があらう。アメリカがメキシコ國民のみならず、自國民に對しても拒んだ、國內法、國際法に溯及的變更を加へる權能を、ヌニェスだけが保有することを承認しない限り、ルーズヴェルトが一九〇三年にとつた行動は、條約の字句のもつとも嚴格なる解釋に正



確に一致せるものである、といふ結論に到達せざるを得ないものと考へられる。

パナマ共和国は即急に組織され、アメリカとの間には條約が締結され、アメリカはそれによつて、地峽横斷の運河を建設し、維持する永久的権利を獲得し、その権利に對して、コロンビアに對する申出と同願の一千萬ドルを支拂ふことになつた。その條約はまた、運河地帯といふ、運河の中心線から左右各々五マイルづつの距離に互る帶狀の地域【總面積五五三方マイル】の領土権をもアメリカに付與した。中米におけるこの一條の地帯は、あらゆる實際的な目的において、ウェスト・ポイントの練兵場と變りのないアメリカ領土である。但し、運河地帯の兩端に位置するパナマ、コロンの兩市だけは扇形に除外されて、パナマ共和国の一部分として残されてゐる。けれども、兩市の港區をなすバルボアとクリストバルはアメリカ領となり、さらにアメリカは、パナマ、コロンの兩市を清潔に維持し、アメリカが、パナマ國人の官憲に秩序維持の能力なしと思惟したる場合には、何時たりとも干渉し得る権利を獲得した。アंकナル・サムは、地峽の汚物と、熱病と、小競合に止めを刺して、仕事に着手しようと思つたのだ。

新フランス運河會社は早速四千萬ドルの支拂を受け、地峽におけるその全財産は、一九〇四年五月八日、正式にアメリカの所有に移つた。かくて、運河の開鑿工事と運河地帯の行政とは、その年三月議會を通過した法令によつて、大統領より任命され、陸軍長官を通して大統領に對して責任を負ふ、七人の委員より成る地峽運河委員會の手に委ねられた。合衆國海軍の退役少將ジョン・ジー・ウォーカーが、その委員長に任命されたが、この人は、以前からパナマとニカラグアの運河路線の比較研究を行ふために任命された、二つの委員會の委員長を勤めてきた人である。陸軍少將ジョージ・ダブリュー・デーヴィスは運河地帯知事に任命された。他の五人の委員はみな權威的な技術者であり、七月には、ジョン・エフ・ウォーレスが技師長になつた。

このウォーカー委員會は、一年と少しの間存続してゐた。その指揮監督の下に、運河地帯の法と秩序とは確立され、多くの有益な調査が行はれ、キュレブラ<sup>カット</sup>切割では、フランスの舊式な側面掘鑿機で少量のバラ土を掘鑿し、従業員部隊の細胞核は結集され、熱病に對する闘争は、ゴーガス軍醫によつて開始された。當時の事情の下においては、一年間の仕事としては優秀な成績であつた。なぜかといへば、I・C・C【地峽運河委員會の略稱】は、ジャングルに對する戦ひを組織すべき多額の豫算も、自由手腕をも與へられず、しかも、莫ばかりではなく、粘土さへも殆んどなしに、煉瓦を焼けといはれてゐたのだからだ。議會は、數百萬ドルの最新式機械を購せねばならぬことも、四世紀の垢と病氣をこそげ落とさねばならぬことも、従業員の大軍を編成し、訓練し、住宅を供給し、飲み食ひさせねばならぬことも認識せず、たゞレセプション會社の二の舞で、また不正事件を惹き起しやしないかといふことばかり心配して、徹頭徹尾金を出し澁つてゐた。それとも知らぬ國民は、南北戦争のときの北部人が、ブル・ランの前で「リッチモンドへ！」と絶叫したと同じ無分別なもどかしさで、「バラ土をぶつ飛ばせ！」と喚き續けてゐる。

そこへもつてきて、一層事態を悪化させたのは、I・C・Cの七人の委員が、——個人としては、みな正直で有能な人物だが、——協調して仕事することが全然不可能になつたことである。かれらはのべつ、技師長と、衛生局長、運河地帯知事と、またお互ひ同志の間で衝突を演じてゐた。ウォーレス技師長やゴータルス軍醫の提出した要求は握り潰されるか、長いことひつばられた後に、ほんの一部分だけ承認されるといつた調子であつた。

スプーナー法によつて創設された、七頭委員会の非能率ぶりを認めたルーズヴェルト大統領は、一九〇五年一月十二日議會に教書を送つて、同法を修正し、なるべく三人の委員をもつて構成する、新しい少数委員會を選任する権能を付與されんことを要請した。さういふ内容を盛つた法案は下院を通過したが、上院において否決された。

そこでルーズヴェルトは、一九〇五年の三月、一人だけ除いて、地峽運河委員會全委員の辭任を要求した。そして、四月一日附新委員會に對して發した行政命令において、委員長、技師長及び運河地帯知事の三人をもつて執行委員會を構成すべきこと、委員長は本國に在勤して執行委員長の職に當り、技師長は地峽に在勤して全建設工事の監督に當り、運河地帯知事は任地において法律と衛生法規の執行に當るべきことを指令した。委員の全體會議は年四回、一、四、七、十の各月、現地において開かれることになつた。

まだ最初の全體會議が開られない六月の二十七日に、ウォーレス技師長は突然辭表を提出した。その結果、

七月一日、後任技師長としてジョン・エフ・ステイヴンスが任命された。それから三、四日経つて、ステイヴンスは、地峽運河委員會の新委員長セオドル・ビー・ジョンツから、ゴータルス工兵少佐に關する手紙を受取つた。

## 第八章前 兆

一九〇五年七月五日

ニューヨークにて

ステイヴンス殿

二日附貴翰拜誦、坐骨神経痛にて御困難の由遺憾の至りに存じます。一日も早く御本復あらんことを期待いたします。

御來示の件については、唯今ダウチーに次の通り打電いたしました。

「ステイヴンス技師長着任スルマデ、工事ノ進行上絶対ニ必要ナルモノノ外、任命、異動マタハ昇給ヲ見合ハセヨ。」

右電文とともに、ストーリー氏に対する前長官ポール・モルトン氏の證言を同封いたしました。次に、エドワーズ大佐が、陸軍部内のもつとも有能なる土木技師なりと評し、タフト陸軍長官も最大級の激賞を寄せ

ざる一陸軍將校に、御注意をむけられんことを願ひ上げます。その名はゴータルスと申します。エドワーズは、かれは今日まで非常に重要な工事を監督いたし、常に優秀なる成績をあげたと申してをります。かれはまつすぐな人物で、工夫に富み、精力的で、はなはだ愉快なる氣性の仕事師です。タフト長官よりかれに關する話があつた際、小生は喜んで貴下にお知らせいたさうと答へておきました。かれに關する一要点、——すでに政府の官吏たる地位にあるので、貴下は何時たりともその働きを求めることができません。小生の提言を聽かれたタフト長官は、貴下に對して報告を送るやうかれに命令を發し、それを長官室の公文書のなかに保存しておかれました。それ故、貴下がこの人物を補佐役の一人に採用することを決定される場合には、軍當局は貴下よりの申出を待つてゐることゝ存じます。 敬具

デー・ビー・ショーンツ

シカゴ市レーク・ショール・ドライブ六七番地

ジョン・エフ・ステイヴンス殿

この手紙に述べてある命令書は、今日でも陸軍省の公文書のなかに保存してある。次の寫しは、陸軍少佐エフ・ダブリュー・ホイットリー氏から提供されたものである。

## 陸軍省 長官室

## 參謀總長及工兵團司令官に對する覺書

「予は、ゴータルズ少佐は、パナマ運河の建設に大いに貢献し得ることを確信する。ショーンツ氏より要請があれば、かれを主任級の輔佐技師に任命してもよろしい。予は、少佐が參謀本部を辭し、委員會の指定するいかなる資格においてもこの事業に従事せしめられることを望む。委員會は、少佐従來の俸給のほかに、附加的危険及び勞務に對する報償として、十分なる俸給を支給するものと信じ得る。しかし、この件は、委員會側の措置によりてのみ實施せらるゝものであり、本件に關する予の命令の覺書として残しおくものである。而して、この覺書は事宜により、陸軍次官及び參謀總長のいづれかに對して適用さるゝものとする。

一九〇五年六月三十日

陸軍長官 ウィリアム・エチ・タフト

委員長が、ゴータルズを輔佐として望むかどうかの決定を、その名儀上の部下たる技師長に委せた行爲は、委員長の特徴を示したものであると同時に、正當な措置でもある。ショーンツ委員長は鐵道事業の實際家では

あるが、現場を踏んだ技術家ではないに反して、ステイヴンス技師長は、かつての鐵道建設の大家である。しかし、工兵とは違つて、閘門や堰堤築造の經驗はもつてゐなかつた。かれは頼みさへすれば、ゴータルズの援助を受けることができたのだが、頼まうとはしなかつた。

ゴータルズはその當時、パナマの運河工事に推薦されてゐた事情を承知してゐなかつたらしく、一九〇五年最初の地峡視察を行つたときでさへ、運河に對して特別な興味を示さなかつた。その年の十月、タフト陸軍長官は、運河地帯の防備に必要な施設に關するある問題を決定するために、パナマ視察にむかつたが、隨行を命ぜられたものは沿岸砲兵團長ストリー將軍、島嶼局長クレアレンス・エドワーズ大佐、ブラック中佐、ゴータルズ少佐、及び工兵團のマーク・ブルック中尉の五人である。一行は、二十七日夜ワシントンを出發してモンロー要塞にむかひ、そこで巡洋艦コロンビア號に乗つて、翌朝解纜、コロンに到着したのは十一月二日であつた。

ゴータルズは生憎、このとき詳細な地峡印象記を残してゐないが、後に「混沌」といふ適切な一語をもつて、その印象を語つてゐる。満潮になると、その當時でもまだ、コロンの慘愴たる勞働者小屋を支へてゐる牀の間には、恐ろしい塵芥が浮いてゐた。ある街は悪臭紛々たる泥濘に埋もれてゐるかと思へば、次の通りは、長いことほうりはなしの下水や水道工事で掘返したまゝになつてをり、三番目の町は、新しい碎石鋪石やコンクリートのサイドウォークで、整然としてゐた。どの家の軒先にも残つてゐる、剝げかゝつた長い紙

片は、その年黄熱病の猖獗を極めたとき、燻蒸消毒によつてステゴミア蚊を殺すために、目張りした部屋であることを語つてゐる。そのとき、三十五人のアメリカ人従業員が黄熱病に仆れ、數百人もの従業員は遮二無二満員の船に割込み、先を争つて北方へ逃げ出した。

「パナマには三種の病氣がある。」と「大葉卷の」ステイヴンスがいつてゐる。——新任の技師長は、荒野のグラントのやうに、のべつ葉巻をくゆらしてゐるので、部下の連中は、もうちやんとこんなニックネームを奉つてゐた。——「それは黄熱病と、マラリヤと、冷足症である。そして、もつとも恐るべきものは冷足症である。」

ステイヴンスは、掘鑿部隊の殆んど全員を市街の工事と衛生班に移し、ゴーガス軍醫を陣頭にマグーン知事と肩を組みつゝ、身を挺して防疫戦のなかへ飛び込んでいつた。戦ひは防疫陣の勝利に歸し、九月の末には、さしもの黄熱病も、それに伴ふ大恐慌も終熄した。

コロんとクリストバルの埠頭には滞貨の山を築き、湖沼には沈没しかけた浚渫船が押合ひをやつてゐる。長官一行を乗せて地峡を横断したパナマ鐵道は、擦り減つた軌道をゼイゼイいひながら走るガタガタの遺物である。ガツンはトタン屋根の教會堂のある、島の上の玩具のやうな村で、シャグル河の彎曲部を掘割つた、フランス運河會社の狭い水路がある。エチ・ジー・ウェルズの未來記物語に多くの挿畫を提供するキュレブラ切割、——そこは、錆びた煙突のなかより生え出した若木や、生ひ繁る蔓草が、十九世紀の鐵道の繪のや

うな廢墟と、異形の死んだ機械を覆うてゐる。新らしい巨大なアメリカ製蒸氣掘鑿機、重い軌條を積んだ新らしい無蓋貨車を牽引する新造の大型機關車は、新時代を表徴する。大統領用の四輪馬車は貴賓を乗せて、パナマ市の新らしい煉瓦舗道のコンクリート路盤を造るために、十七世紀の小石を砕いてゐる輕便碎石機のをばを通つて、大統領官にむかつた。

繪のやうな美しさ、進歩、政治、——ゴータルズ少佐は、さういふものを愛しなかつたのだらうか？ 他の二人の工兵將校と沿岸砲兵團長と一緒に、地峡の防禦工事敷地を檢分したとき、かれはたゞ砲臺の位置とか、射程とか射界などにしか興味を感じなかつたのだらうか？

ブラック少將はかういふことを書いてゐる。

「私はコロンビア號で、ゴータルズ將軍と同室であつた。が、私の知る限りでは、運河工事に關して特殊な批評も試みなかつたし、その工事に對して非常に特殊な興味を示すといふやうなこともなかつた。」

一九〇四年、アメリカ人勞働者を送り込むそもその第一船で地峡に乗込んだ、土木技師のジョージ・エム・ウェルズは、運河が竣功するまで勤続し、その後は、個人的業務關係でゴータルズと交際を續けた人であるが、かれは當時の感想として、かう述べてゐる。「一九〇五年、ゴータルズ將軍がタフト長官に隨行してパナマを訪問したとき、私はアンコンで會つたが、そのときは會つたといへるほどの話をする機會もなかつた。いちばんよく記憶に残つてゐるのは、將軍が軍服を着てゐなかつたことだ。……ニューヨークで、事

業上の関係で交際してゐる間に、將軍は、まだ參謀本部員であつた一九〇五年に、最初のパナマ視察にいつたときの細かな話をたくさんしてくれた。公の建前から、そのパナマ行は防禦工事に関する要務のためと思はれてゐた。が、實際は、ゴータルスの話に對する私の記憶に間違ひがなければ、タフト長官がこれを隨行させたのは、當時地峽に存在した混亂状態に關して現場においてその助言を求めんがためであつた。……それによつても明らかかなやうに、タフト長官は早くもそのころから、將軍の意見を尊重してゐたのであるが、その信任が後に一九〇八年の春、タフト氏をして、ジョン・エフ・スティヴンス氏の後任として將軍を選任せしめるにいたつたのである。」

ワシントンに歸つた少佐は、依然參謀本部と陸軍大學校の勤務を續けてゐた。が、時にはその仕事に退屈を感じて、鬱ぎ込んでゐることもあつたらしい。士官學校生徒時代のゴータルスの愉快な想ひ出をもつ、ウエスト・ポイントとの同級生ジョージ・エヌ・モルガン大佐は、參謀將校としてのがれが浮かぬ氣持であることをみいだした。

「私は後に、一九〇四年の『マナサスの第三次戦』の大野營でかれに會つたが、その當時の陸軍の情勢一切に對して、かれが極端な悲觀的氣分をいだいてゐるのを發見して驚いた。情勢は緩漫ながら、われわれの最後の目標にむかつて動いてゐたので、私は事態の進展の緩漫なことにはすでに慣れつこになつてゐたもの、かれの悲觀ぶりにはまつたく驚ろかされた。かれは當時參謀本部員であつた。」

しかし、私がサム・ハウストン要塞にゐる當時、——確か一九一〇年だつたと思ふ——メキシコ・シティに行く途中、ゴータルスが立寄つてくれた。ガツンの堰堤と同じ理論で造られたそのダムが決潰したので、かれとしては當然その原因を突止めたかつたわけだ。そのときのかれは、あのマナサスの悲觀屋とはまるで別人であつた。かれは自分にピツタリした仕事のできたので、すつかり上機嫌で満足さうだつた。」

長男のジョージは、一九〇四年父の母校ウエスト・ポイントに入學した。トムは私立學校に在學ちうで、ハーヴァード大學の入學準備をしてゐた。父は陸軍大學校の教官であり、母は一九〇三年、ワシントンのS街の家の切盛りをやつてゐた。參謀總長及び技師長に對する覺書は、地峽委員會からの要請がないのでそのまま伏せてあり、ゴータルス少佐は全然その事實を知らなかつた。ゴータルスが最初にルーズヴェルト大統領に會つたときの様子については、いろいろ繪に描いたやうな話が傳へられ、書いたものにも残つてゐる。その會談が行はれるにいたつた経緯は、次の通りである。

一九〇七年の一月、地峽運河委員會委員長シヨントンは、大統領に對して自分の辭表を受理されるやう願ひ出た。それはかねて懇望されてゐた、創立計畫ちうのインターバロー・メトロポリタン鐵道會社（ニューヨークの地下鐵、高架鐵道、市街鐵道の合併會社）の社長に就任するためであつた。ルーズヴェルトは「非常に落膽して」その辭表を受理し、三月四日附をもつて發令すべきことを、ホワイト・ハウスからの懇篤な、衷心の感謝溢る書翰（註）（一月二十二日附）で申し送つた。

(註) この書翰は全文ダブリュー・エル・ベッパーマン著「パナマ運河を建設したものは誰か？」二三八—九頁に収録してある。一九一五年ニューヨーク、イー・ビー・ダットン出版社版

二日の後、ステイヴンス技師長はキュレブラにおいて、地峽運河委員会秘書ジョセフ・バックリン・ピシopp【本書の著者の一人】から、一通の公電を受取つた。それは、ションツ委員長長の辭表提出と、大統領がそれを受理した旨を報じたものであつた。ステイヴンス技師長は早速大統領宛に、「問題ガ十分ニ討議サルルマデ行動ヲトラレヌヤウ願フ」と打電した。

越えて二十五日、ルーズヴェルトは、「貴電ノ意味不明ナルモ、勿論貴下ノ意向ニ接スルマデ行動ヲトラヌ」と返電した。

ステイヴンス技師長は、直接大統領宛に、タイプライターで打つた五頁の手紙を書き、この際運河及び政府關係の仕事から全然手を引き、鐵道事業に戻りたいといふ希望を相當詳しく述べた。この決心をつけるについては、もつと時間の餘裕を得たいと思つてゐたのだが、ションツの意外な辭職のために、急に決心を決めねばならなくなつたのだ。一月三十日附キュレブラ發信のこの手紙は、二月の十二日にホワイト・ハウスに着いた。大統領は直ちにそれをタフト陸軍長官に届け、「この件に關し、午前ちう面談いたしたし。」と書き添へてやつた。

後年、その會見の結果について發表を求められたとき、タフト長官は次のやうに書いてゐる。

「大統領と私とは、異動を行ふべきことに意見一致した。大統領は、工兵團幹部より何人を推薦するかについて質問された。私は豫じめ、當時の工兵團司令官マケンジー將軍と協議したところ、將軍は最適任者としてゴータルス少佐を推薦した。少佐はしばらくの間、マケンジー將軍の輔佐を勤めた経歴がある。私はこの推薦を大統領に傳へた。大統領は、その推薦について私と協議された後、——恐らくマケンジー將軍とも協議されたことと思ふが、將軍推薦の任命案に同意された。……

これは、その詮衡が行はれた経緯に關する私の回想である。ゴータルス少佐の詮衡は、實際にマケンジー將軍が行つたものであり、それが経歴調査の後、大統領より承認を受けたものである。」

タフト大審院長がいつてゐるやうに、これは、そのことがあつてから二十二年後の一般的回想に過ぎない。かれはゴータルス詮衡の名譽を、どこまでもマケンジー將軍に譲つてゐる。が、當時のルーズヴェルト大統領の個人秘書ウィリアム・ロップは、次のやうに異つた見解を述べてゐる。

「運河建設の最高首腦者として、ゴータルス少佐を大統領に推薦したものが、當時の陸軍長官タフト氏であつたといふ貴下のお考へは正鵠を得てゐる。私は、ゴータルス少佐が最初に大統領を訪問したとき、その會談のはじめに同席してゐたことを記憶してゐる。そのとき大統領は、タフト長官が貴下を非常に運河工事に推薦したと語られた。」

これは新聞雜誌などにもたびたび繰返された話だが、地峽にはひとつの傳説がある。「自分の手紙がワシ

ントンに着いてから三時間ほど後に、ステイヴンス技師長は、「貴下ノ辭職ヲ承認ス」といふ電報を受取つた。」といふのである。これはいかにも劇的だが、事實に反する。大統領から電報が發せられたのは二月十四日であり、技師長の一月三十日附の手紙がワシントンに着いてから、四十八時間後であつた。その内容の一部分を摘記すれば、「後任者任命セラレ、貴下ノ下ニ業務ニ習熟シ次第可及的速カニ貴下ノ離任ノ希望ヲ許容スル、……詳細書キ送ラレタシ」とある。

(註) ウィリアム・ジェー・アボット著「パナマと運河」一九一頁。一九一四年ニューヨーク、ダッド・ミード會社版

大統領は、同じ日に認めて發信したステイヴンス技師長宛の書翰に、かう述べてゐる。「私はできるだけ早く、貴下の後任者を地峽に派遣するつもりです。多分軍人の技術者となるでせう。私は勿論、貴下が後任者の着任するまでのみならず、その後任者が十分な期間貴下とともにあつて、工事の正確な状況を十分熟知するまで、繼續して貴下の任務を遂行されんことを期待します。貴下が後任者の現場に到着する以前、また後任者が支障なく工事を繼續せんがために、正確なる状況を完全に熟知する餘裕を與へず、任地を離れるならば、損害を齎らすでせう。」

ルーズヴェルト大統領が、ジョンズ委員長、ステイヴンス技師長兩方の後任者として選んだ工兵將校を招致したのは、やうやく四日の後、——ステイヴンスの辭意を表明した手紙が着いてから六日後であつた。二

月十八日の晩、ゴータルス少佐夫妻が、ウェスト・ポイントの舊友で、七九年級のフィーベガー大佐を饗應してゐるところへ、ホワイト・ハウスからの使がかういふ書状をもつてきた。

ワシントン ホワイト・ハウス

一九〇七年二月十八日

ゴータルス少佐殿

大統領は、明朝(火曜)午前九時半貴官の御來館を願ひ、御面晤いたしたいと希望してをられます。御來駕願へるかどうか、小生までお知らせ願へれば幸甚です。 敬具

大統領秘書 ウィリアム・ロープ

S街一九〇三番地

合衆國陸軍少佐ジョージ・W・ゴータルス殿

ゴータルス少佐は、生れてからこの方、大統領のやうな偉い人には會つたことがないし、大統領がなんのために突然自分を呼んだのか想像もつかないので、非常に驚きながらも、ロープ秘書に電話をかけて、明朝まゐりますと返辭した。そして、受話器をかけて居間に戻つてきたが、手紙を受取つたときよりもつと意外



な顔をしながら、

「大統領は、あゝでなく、早速今夜十時二十分過ぎまでにきてくれといはれるんださうだ。」といった。それと聞いた夫人は、大急ぎで禮装に着換へさせるために、少佐を急がして、すぐ二階に上がつていつたことであらう。もつとも、その晩ホワイト・ハウスにゆくのに、禮装を着けたか着けなかつたかについては、夫人もフィーベガー大佐も、はつきりした記憶は殆んどもつてゐなかつたが……たゞ記憶に残つてゐるのは、大佐の歸りを待つ間の悶へるやうなもどかしさであつた。

## 第九章 「兵とともに進まう！」

ゴータルスは、今日まで未發表の手記に、次のやうな記録を残してゐる。

「私は一九〇七年二月十八日に、運河工事に關してパナマ勤務を命ぜられた。その晩私は、大統領から呼ばれてホワイト・ハウスにいつた。大統領は直ちに運河の問題にはひつて、運河工事の二代目の技師長ジョン・エフ・ステイヴンスが辭職したために、地峽における工事の管理に變更を加へる必要が生じたことは、非常に遺憾に思ふといふ意味のことを述べられた。それから、首腦者が頻々と變るやうな状態の下にあつては、有能で恒久性をもつ従業員軍を維持することは不可能だから、工事の成功の如きは思ひも寄らぬことであること、そこで自分は、大統領の方からその辭職を希望せぬ限り、勝手に辭職できぬやうな人たちの手にすなはち、工事の繼續性を確保するため、工兵の手にその仕事を任せようと決意したと語られた。

大統領は、自分の提案した改組委員會の構成を説明した後、私を委員會委員長兼技師長に任命するに決した旨を附言された。それは、兩椅子を一人に兼任させれば、從來ときどきみられた、兩者間の摩擦をなくせ

ると信ずるからだといふことであつた。それから、工事が七人の委員よりなる委員会、すなはち執行機關の手に委せられてゐることは、それが紛議と摩擦の源泉をなすだけ遺憾に思ふが、その法律を改正せんとした自分の努力は失敗に歸したから、やはりその法律の下に、工事を進めることが必要であつた。然るに、經驗の結果は、委員會の改組により、その法律に従つて工事を進めんとした自分の種々な努力も、結局水泡に歸したことが明らかとなつたので、つひに、その法律によつて大統領に付與されてはゐないが、行使を禁じられてもゐない権限を、行使することに決意したのでと語られた。

ゴータルスは、この手記の冒頭にかう明記してゐる。

「パナマ運河の建設者は、セオドル・ルーズヴェルトであつた。工事の實施は、かれによつて選任され権限を付與された、他の人々によつて指揮監督されたのであるが、もしかかれが、運河工事の土石を全部一人で掘出したとしたところで、工事完成者としての最大の名譽を、今日以上完全に博することはできなかつた。」

ゴータルスは、その言葉を裏づけるために、第一に、ルーズヴェルト大統領が、クレイトン・バルワー條約の廢棄を斷行した事實をあげてゐる。これは、英米兩國のいづれかど建設すべき地峽運河に對する、英米の共同管理を規定した條約であるが、それあるがために、一八五〇年より一九〇一年に亙る半世紀の間、その種のいかなる計畫も絶対に阻止されてきたのである。第二に、ルーズヴェルトは、一九〇三年に「パナマを取つた。」第三に、かれは、無閘門運河に替へて、閘門式運河を建設するといふ方針を決定した。そして

最後に、かれは「工事の最高首腦部の手に絶對的権限を集中した」のだといつてゐる。

一方ルーズヴェルトは、ゴータルスについてかう語つてゐる。

「ゴータルス大佐は、他のあらゆる人々のなかにおいて、その工事の完成者となつた。かれの功績に對しては、どんな讚辭も過褒の言とはなり得ない。パナマ運河こそは、ゴータルス大佐が工事に従事してゐた間、世界ぢうのいかなる人が成就した、いかなる種類の仕事にもまさる最大の事業である。それは、かつて全世界において行はれた同種の工事ぢうで、最大の工事である。ゴータルス大佐は、ほかに對しては、少數の戰勝軍にしかみられぬ精神を、その部下に吹込むことに成功した。」

(註) 「セオドル・ルーズヴェルト自敘傳」五四三頁。ニューヨーク、マクミラン社一九一六年版

お互ひ同志、相手に至上の名譽と最高の稱讚を贈るに熱心であつた。ルーズヴェルトとゴータルスといふ、二人の強力、積極的な人物は、終始摩擦も嫉視もなく協働した。完全な信頼は、滅私的な忠誠によつて報いられたのだ。この合衆國大統領と合衆國陸軍の一將校との仲は、個人としての忠誠と獻身の強い紐帯によつて結ばれてゐたのだ。騒ぎの絶えぬ領地を與へ授けられて、高下の別もなく正義の政事を布いた、フランドル伯と中世のゴータルスとの仲のやうに。……

けれども、世間はまた、一九〇七年の一月から二月に亙つて、舞臺裏で進行ちうだつたこの辭職、新任劇を全然知らなかつた。パナマに對する國民の興味は、運河工事を民間業者に請負はせよといふ提案（一月十

二日提出)を中心とする、議會の討論と新聞紙上の議論に、主として集中されてゐた。ゴータルスとステイヴンスはいづれも、多少とも考慮を要する、二件だけしかない請負契約を解除するといふ、大統領案に同意した。その理由は、第一に、請負人は他から融通を受けた資本によつて従業せねばならぬであらうが、その場合請負人の利益が減少して、その熟練、経験、及び工事に對する直接監督に對する報償を不十分ならしめるといふにあつた。——僅かその數ヶ月後にアメリカを襲つた經濟界の恐慌に際して、たとひどうか多少の資金を引出せたとしたところで、その難點は免かれ得ないわけだ。第二には、契約の骨子は、技師長として工事の監督に當ることを期待されてゐた、ステイヴンス氏の作成したものである。が、その本人が辭任することになつたので、かれが作つた組織を使つて、運河工事を、政府直營でなく民間請負でやらせるといふ、最後の理由は消滅したわけである。

そこでゴータルスは、改組された地峽運河委員會における輔佐役、また同僚として、ウィリアム・エル・サイバート少佐、デヴィッド・デューボイズ・ガイラルド少佐といふ、二人の有能で經驗に富んだ工兵團の同僚の將校を選んだ。この三人の任命、大統領によるシヨント、ステイヴンスの辭表受理、請負契約の解除は、一括して二月二十六日に公表された。新聞の標題は、陸軍が運河建設を擔當することになつたと報じた。鶴嘴とシャベルを擔いだ歩兵部隊、塵芥車をひつばつた砲兵隊が、パナマにむけて進軍する漫畫がでる。失望した請負業者は、仲間同志の間で、またウォール街と政府に非難を浴びせかけた。ティルマン上院議員の如

きは、「このゲームはインチキだ。」と叫んで、調査の動議を提出した。

「現在、ヒソヒソ話や、眼配せや、クツクツ笑ひが非常に目立つてゐる。上院の反ルーズヴェルト派が、この冬を期して、紛亂の運河問題に對する大規模な調査を執行する計畫なることが明らかになつた。かれらは泥を探しだして、それを大統領とタフトに投げつけるだらう。しかも大統領は、パナマ問題のバネに手を觸れ、紛亂を日毎に激化するまゝに放置しておくことによつて、陰謀家の手中に陥りつゝある。」

(註) 「ニューヨーク・タイムズ」紙、一九〇七年二月二十七日

はじめて政界の泥濘ガスを吸つたゴータルス少佐は、ウェスト・ポイント在學ちうの小ジョージに宛てた手紙のなかで、「政界の性格であるこの空氣には、愛想が盡きて、ますます不快になつてくる。」と書いてゐる。それは三月一日附であるが、越えて二日には工兵中佐に昇進した。これは工兵團の古參順による正規の昇進で、地峽運河委員會の技師長拜命とは全然無關係なことであるが、時期が一緒になつたために、當然各方面から誤解を受けるにいたつた。

かれは三月五日附のジョージ宛の手紙に、かういつてゐる。「任命の發表が早かつたために、當地ではいろいろ煩さい騒ぎが起り、なかなか一人ではやつていきません。有名になるといふことは、私には全然不向です。地峽の現状は相當ひどく混亂してゐます。……まづ早速、その善後策にベストを盡さねばなりません。ステイヴンスは委員長に任命され、私がおの後任として着任してから、かれがパナマを去るまでその地

位に留まることになりました。われわれが日曜にステイヴンス夫人をお訪ねしたところ、家についての非常に熱心な説明と、氣候と健康状態に關して非常に氣強さを感じさせられる話をして下さいました。……昨晩、技師たちがラレイで御馳走してくれたので、けさは「怒つた」梟のやうな感じがしています。……私のアドレスは、パナマ國運河地帯地峽運河委員會 G・W・G 中佐です。」

かれは、ニューヨークの友人ヘンリー・シー・メイヤーからの祝ひ狀に對して、「これはたゞ明白な、生粹の義務の問題です。上からの命令を受けた、——否も應もないといふ次第です。」と返事をだした。

當時としてはいかにも打つてつけた、「バラ土の飛ぶを視察に出發」といつたやうな標題で、新聞は、ゴータルス中佐が三月四日、約四十名の上院議員一行とともに、ニューヨークを出帆することを報道した。議會の會期が終つて、例の調査は進行しつゝあつたのだ。

「ゴータルス中佐は、運河工事に關してステートメントを發するかどうかと訊かれたとき、微笑しながら、「運河のことについては、歸つてくる時の方が、よけい知識をもつてらう。」と答へた。」

(註) 「ニューヨーク・タイムズ」紙、一九〇七年三月七日

中佐は三月十日の日曜日、ハイチ島西南沖で、令息のジョージに次のやうな手紙を認めた。「今までのところ、愉快的航海でした。そして、今度の件發表以來の荷物であつた神經の過勞の結果を、すつかり振り落したといふか、征服してしまひました。火曜日にはすつかりまゐつてしまひ、それ以上長いこと無理を續け

られさうにもありませんでした。大統領は、自由意志で今度の件を公表されたのです。といふのは、——ある新聞記者のいふところによれば、——一人でソツとしておくことができなかつたからだといふのです。船旅は、私に元氣をつけてくれました。上院議員連は、案に相違して、邪魔者どころか、なかには愉快的連中がたくさんゐます。いちばんをかしいのは、一度も船に乗つたことのない連中で、出帆以來、ほんのちよつびり面喰つた以外は、別に氣分も悪くならないからといふので、自分らこそあつばれな船乗だと納まり返つてゐます。……われわれは、あの老「ワールン」號が容易に乗切れなかつたやうな海には、まだお目にかゝつてません。この連中は、今では相當の荒天（荒天）に見參したがつてますが、私は、往航にはそんな目に遭はないでくれゝばいゝと思つてます。(火曜日午後)そして、結局遭はずにしまひました。もつとも、恐ろしく猛烈な横揺れがはじまり、それがけさコロンに入港するまで續いたために、手紙を書くのを中斷せねばならなかつたのです。……われわれは差當りゴータス軍醫夫妻のお客になつて、アンコン山に落ち着きました。軍醫は、ステイヴンス氏と一緒に埠頭へ出迎へてくれましたが、ステイヴンス氏が自分の家に泊めてくれさうな様子がないので、博士のお招きをお受けして、お世話になることにしました。一行はパナマにまゐり、テイヴォリ・ホテルで晝食をとり、それから病院の構内を視察しました。ステイヴンス氏は非常に多くの仕事をされ、一般の狀況は以前より非常によくなつてゐる模様なので、私も大いに心強く思つてゐます。」

(註) ロード・アイランド州ニューポートの地方技師の船

五日に互る視察旅行をへたゴータルスは、手紙にかういつてゐる。

「工事の巨大な姿は、私の眼にはますます大きくなつてくる。それは、刻々に膨脹してくるやうな気がする。けれども、ステイヴンス氏は、工事の鐵道の部分に限る限り、非常に立派な組織を完成してをられるので、われわれのなすべき仕事としては、その組織に過去現在におけると同様、立派な仕事をさせていくこと以外には、何も残されてゐません。汽車でそちこちを廻り、かれの残した仕事と、その手によつて完成された組織をみると、かれがなぜ辭職したのか理解できません。こゝの生活は孤獨で淋しいです。が、さらにまた、かれがあまりに多くの細かな事柄を自ら監督しようとした責任感と、明らかに人任せにできぬ性分とのために健康を害つてしまつたのだといふことも考へられます。私のみるところでは、一切の問題を自分で決定したいために、かれは仕事を任せ得る輔佐役といふものを一人もおかなかつたのです。その點からいへば、仕事はあまり大き過ぎたのです。……」

鐵道沿線には、二萬九千人といふ現業員の大部隊がゐます。われわれが、食ふことから何から一切の世話をみてやらねばならない、まつたくの大軍をもつてゐることがおわかりでせう。この大部隊は、あらゆる國の人間が集まつた混成部隊ですが、ゆうべ訪ねてきたウッド中尉の話によれば、間もなくギリシヤ人を乗せた船が一艘着くさうです。従業員部隊のなかには、フランス人あり、イタリア人あり、スペイン人あり、西印度のニグロありといふ具合です。土地には、マラリヤ熱は一切の種類が揃つてゐますが、病氣の数は比較的

的少ないです。

當地に到着するまでの印象は、當然この前の視察以來いであつた印象なのですが、當時は、何もかもが多少とも混亂状態にあり、全體的には一層はなはだしかつたのですが、それだけに、眼のあたり現状をみて、愉快的驚ろきに打たれました。ステイヴンス氏は、なんの名譽も得られない多くの仕事を果されました。いや、たとひ何等かの名譽を得られるとしても、十分といふわけにはいきましますまい。……」

續して、三月二十二日附の手紙にはかういつてゐる。

「仕事はまつたく心を奪はれるほど興味深く、その規模は巨大です。私はこゝの總監督として、土木關係の細目に互る仕事はたくさんやれぬでせうが、他の人たちに働いて貰ふやうにしていかうと思つてます。ステイヴンス氏はいろいろの仕事を仕上げました。鐵道建設の技師で、その部門には完全に精通してをられます。その結果、工事のうちの鐵道の部分は優秀な成績を示してをり、立派な組織の下におかれてゐますが、その組織はこれからも維持してゆくつもりです。水理方面の仕事はそれほどよくなく、ずつと劣つてゐます。かれは、不幸にしてこの部門擔當者の人選を誤まつたのです。かれが當地でみいだした、ミシシッピ河改良工事の古い技手は、浚渫の得意な男でしたが、基礎工事や開門工事の方では何も仕事ができず、従つて重用されませんでした。ステイヴンス氏が、ほかにいろいろの人が欲しいといつたとき、この男はまた浚渫の専門家を數人連れてきました。私は、人にもものを覺へる機會を與へることの重要なことは信じてゐるが、この種

の仕事において、幹部たちの教育をすることには堪へられません。それには再編制が必要なのですが、しかし組織替へを行ふに當つては、工事の他の部門の士氣を沮喪せしめぬやう注意しなければなりません。私はその方面の仕事の状態をみて、相當にびつくりさせられました。ステイヴンス氏は、われわれの習はなかつたやうな方法で、それらの仕事をやつてをられたが、開門とダムの工事なら、私は恐れる心配もしません。工事の困難な部分は、土木關係の部門ではなくなつてゆくでせう。

先週の土曜日、象牙棕櫚俱樂部の會員たちがスモーカー【喫煙自由の集會】を開いて、どうしても私にで、こいといつて背きません。——會員たちは私に會ひたいといふのです。——そのとき私は、アメリカ公使のお宅で晚餐の御馳走になつてゐたのですが、食事が済むとすぐ失禮して、でかけていきました。私はそこで演説をしなければなりませんでした。寫しを同封します。——私の紹介をした會長が話のきつかけを與へてくれたのです。……」

その晩コソサル俱樂部で中佐を待つてゐたのは、親しみをもつた聴衆ではなかつたことを、かれは發見した。運河従業員は不快な疑惑に驅られて、ひどく激昂してゐた。ワシントンの政治家連が「大葉卷の」ステイヴンスを敵首にして、陸軍の將校を後釜に据ゑ、一切切軍隊式にしてしまふのだ。そんならわれわれ現業員は、その人間とそいつの軍隊式をどう思つてゐるか、直接本人にみせてやらうといふ鼻息なのだ。かれらの心理状態は、二週間前に、地方一の新聞に載つた論説によく表はれてゐる。

「工事請負契約解除の報は、先週入手したニュースちう、ステイヴンス氏の辭意表明に次ぐもつとも意外なニュースであつた。……その事實に伴ふ失望の念は、一陸軍將校が地峽工事の監督者に就任するといふ報道によつても、いさゝかも軽減されない。……われわれは不愉快な豫言を試みようとは思はないが、地峽における新しい實驗は、穿鑿好きな興味につき纏はれるであらう。幸ひにして結果が良好であれば、われわれの欣快とするところである。われわれとしては、發表された前技師長の歸國後にはかならず行はるべき、工法の變更に對して準備しておくべきであらう。運河労働者大衆が軍服を着たり、その他の軍隊式な裝備をつけたりして、働らかされるやうなことはないであらう。しかし、今後は雇傭でなくて、編入されたとしても驚ろいてはならない。朝仕事に（或ひは練兵に）でる前に、氏名點呼が行はれたとしても、切割に（或ひは戦線に）ゐる間、上官に對して敬禮させられたとしても、驚ろいてはならない。……」

（註） パナマ「スター・アンド・ヘラルド」紙、一九〇七年三月三日。

集會の座長は、その紹介の辭から察するに、この論説をそらで覺えてゐたものらしかつた。座長以下會衆の面々は、この參謀肩章を吊つた中佐に、現業員がその人間とその軍隊式を、どう思つてゐるかをみせてやらうと手具脛ひいてゐたのだ。

が、新任の技師長がさつぱりした白の詰襟姿で現はれたとき、まづ最初の驚ろきが起つた。續いて起つたいろいろな光景は、一九一五年三月六日、シャグル協會の年次宴會の席上、會員に對して行はれたゴータル

ス知事の告別演説のなかで、非常に生々と想起されてゐる。

「八年前のけふ、私はこの工事の監督の地位につくためニューヨークを出帆しました。三月の十七日——やはり八年前です、コロサル倶楽部でスモーカーが開かれ、私はそこへ招待されました。そこで、出席いたしました。喝采はみなステイヴンス氏のために送られました。その後任者についてなんとかいふものがあつても、たゞ冷靜な沈黙で迎へられました。今夜こゝに御出席になつてゐる座長は、軍隊のことをすこし述べられ、そこに列席してゐた上院議員の一團に對して、各位が工事を視察して廻られるならば、勞働者たちが突然道具をほうりだし、兵隊のやうに直立不動の姿勢をとつて、軍隊式の敬禮をするのに出會はれるだらう、人間を『機關車』扱ひなさつてはいけない、たゞ工事の監督に當る新機關の準備を十分やつていたゞきたい、といつたやうなことを述べられました。「カイト氏の方にむかつて」君はそれを覚えてるでせうか、カイト君。そればかりではなく、ほかにいろいろ軍隊に對するあてこすりや悪口がでたので、私もいさゝか腹が立つてきたのですが、それからいよいよ處女演説をやりました。そのとき、私は諸君にかう申しました。あの會にでゝゐた方は記憶してをられるだらうと思ふが、——私は諸君の利益を、自分自身の利益のやうに護るつもりである、だれでも私に面談する権利をもつてゐると申しました。——そして、私はその約束を守つたのです。」「確かにその通り！」と呼ぶ聲あり」

ゴータルスは、一九〇七年のそのコロサル倶楽部における處女演説を、かう結んだのであつた。

「私はかう申上げよう、自分は技師の師團長になるつもりである、と同時に、各部の主任たちには聯隊長に、工夫長には中隊長に、第一線に立つ工夫には兵になつて貰ふつもりです。今後における軍隊式といつても、過去におけるもの以上にはでないと思ひます。私はもう、合衆國陸軍の指揮官ではないのです。私は現在、パナマ軍を指揮してゐるのだ、そして、われわれの戦はんとしてゐる敵は、キュレブラ切割カットであり、運河の兩端を扼する閘門と堰堤であると考へてゐるのです。自分の義務を果すものはだれにせよ、軍隊式に對して不平をいふ理由は、決してないだらうと思ひます。」

(註) ジェー・ビー・ピショップ著「パナマ運河」

「私は、かれらの精神に軍隊式といふ觀念を徹底させようとしたのです。」かれは、ウエスト・ポイントの令息への手紙にかう書いた。「かれらは、私のヒットだと評判してゐる。私は、これまで接してゐた兵につくはしたのです。私は、兵とともに進まう！」

## 第十章 足を大地につけて

當時運河工事に對する、多數の上院議員の敵意に満ちた疑惑的態度は、一九〇七年の三月末に、ゴータルス中佐が令息ジョージに續けて書き送つた二通の手紙に、鮮明に描き出されてゐる。西印度諸島の視察にむかつた、非常な重要使命をもつ下院議員團の一行が、ラグアイラ港に碇泊した。そこは、當時黃熱病發生のために、運河地帯衛生當局から交通遮断を命ぜられてゐた地域である。その一行がコロンに到着したとき、議員連中は即時上陸の許可を要求したが、——ゴータルスの言葉によれば、——「ゴータルス軍醫は、……隔離期間の満了するまで上陸を許可しなかつた。隔離期間は、ラグアイラ出帆のときから滿六日間で、あすをもつて満了するわけです。かれらは、ゴータルス軍醫を最高の判決者などゝは認められぬといひだしました。ステイヴンス氏は、私に異論がない限り、博士の處置を認めるといひ、——私は異論がなかつたのです。かれらは亂暴な連中だといふ評判でしたが、結局泣寝入りせねばなりませんでした。法律は遵守されるために作られてゐるのです、下院議員たちによつてさへも。……」

ところが、その日の午後、——ゴータルスの次の手紙にあるやうに、——だれかど、議員連にかういふ話を傳へた。「衛生局の役人が、たつた三日前にラグアイラを出帆した遊覽船の乗客を上陸させたので、その結果轟々たる非難が起つたことがあるといふのです。衛生當局では隔離期間ちう停船を命じ、やつときのふ議員連の上陸を許しました。かれらはゴータルス軍醫の處置に憤慨し、自分らを讒詰したのは、ステイヴンス氏が地峽の現状を知られたくないからだなどゝ放言しました。かれらは醜惡な連中で、物見遊山の團體以外の何ものでもありません。このことは、自分の馬鹿をさらけだしてゐた——州選出の——氏においては、特にはなほだしいでした。かれは駄々つ兒のやうな振舞ひをし、運河と運河の役員に對してひどい侮辱的言辭を弄したのでから、ピシャリ喰はしてやる値打があつたのです。かれらはだれからも好感をもたれず、I・C・C（地峽運河委員會）からは特にさうなので、委員會經營のホテルにいくのを避けるために、銘々紙箱入りの辨當を抱へ、途中で腹持ちへをしたわけです。われわれは七時五分の汽車でパナマをたち、コロンから約十一マイルのところまで一行を迎へ、それから一緒にパナマに戻りました。かれらはあまりに無作法であり、非紳士的な態度なので、私はステイヴンス氏に、一行をコロンまで送つていくことはできないといつたところが、かれは、自分も汽車がキューブラに着いたら、別れるつもりだといはれました。そこで私は、きのふの三時半、パナマで一行にアデューしました。」

議員連の無作法を訴へたこの子供らしい表現は、新舊技師長の間に、被害者同志の友誼的感情を醸成する



上に効果があつた。二人は、個人としては懇篤に別れた。けれども、ゴータルスは、スティヴンスの出帆に際して、運河従業員が開催した示威的公開送別會への招待は、婉曲に断はつた。

ゴータルスは、かれがいつてゐるやうに、四月馬鹿の日【四月一日】に正式に就任した。四月四日附の消息には、かう認めてある。「これも息に宛てた手紙であるが、譯文は普通の文體をとる」。「過去の奮闘的な生活も、この五日間に較べれば、子供の遊びごとのやうな気がする。私は今、運河工事指揮監督の全權を委ねられ、さらに、パナマ鐵道汽船會社の社長に選任されたといふ電報を受取つてゐる。長官「タフト」は、メイフラワー號で土曜日の朝來着された。かれは、この岩が開門の基礎に適するかどうかを鑑定させるために、三人の顧問技師を帶同された。私は、日曜日の朝からこの三人と一緒に過越し、アメリカ公使館の長官歡迎晩餐會に、やつと間に會ふ時間に戻つてきた。晩餐が終るとすぐ歡迎會に移り、それが十二時まで續いた。われわれは、主賓が歸らないうちに席を立つわけにはいかないので、特に晝の仕事で相當くたびれてゐたこととて、恐ろしく辛い思ひをした。月曜日には、沿線數ヶ所の住宅區域等の視察をした上に、……また同じ思ひをしなければならなかつた。われわれが戻つてきたのは九時であつたが、私はそれからまた長官と二次會をやつた。われわれは、まつたくあまり「懇意」になり過ぎてゐる。

火曜日、郵便物を見るためと、蒸氣シャベル係、機關手、車掌の代表者と會見するために本部に顔をだした。——この連中はみな、増給しなければ辭めると脅かしてゐる。長官が蒸氣シャベル係に會見することになつたが、ほかの代表者も同じ特權を要求した。長官は、私自身が問題の解決に當つた方がよからうといふ考へであつたが、私にはやれさうに思へなかつた。小問題は解決したが、かれらは勿論増給の要求を突つ張つたので、私は、きのふ午後コロンで長官と會見ができるやう取計らつてやり、七時半にアンコンに戻つた。それから、パナマ共和國大統領主催の長官歡迎會に出席するため、服を着換へねばならなかつた。これも十二時組の豪華なリセプションであつた。

われわれはきのふ八時に出發して、コロンにむかつた。そこで一行は、われわれの施工してゐた市關係の工事を視察した。それから貯水池に赴き、晝食後、かねて命じておいたある改良工事に關して、パナマ人から報告を聴取した。それがグラ〜と非常に時間がかゝつて、退屈であつた。それが終ると、罷業をやらうといふ連中と會見したが、その要求は長官において考慮し、數日うちに長官が訪問する豫定になつてゐる、キューバから決定條件を申し送るとになつた。長官は乗船のため、六時に出發する豫定であつた。——で、私はその時間までに、特別列車の用意をしておくやうに命じた。罷業を計畫ちうの連中は、七時四十五分にいたるまで罷業決行の肚を明かさなかつた。私は、そのとき引返したいと思つた。しかし、——二、三最後に話したいことがあつたので、どうにもならなかつた。のみならず、長官を船まで見送り、遅い午餐をともしながら、二、三最後の打合せをしなければならなかつた。

それは、なんとかして御免蒙りたいと思つてゐたのだ。メイフラワー號は半マイルほど沖合にかゝつてを

り、海はひどく荒れて、風はますます吹き募つてゐた。けれども、どうしても乗出すほかはない。あまり波が荒いのでランチはだせない。そこで、われわれは一隻のカッターと艦長の二輪馬車——本式の捕鯨ボート型の舟で乗出した。襲ひかゝる大波に頭から潮水を浴びながら、散々に揺り上げられ、ローリングしてゆく光景を、御身はさぞ面白がつてゐることだらう。ところが、艦の舷側のところをもつといけなかつた。昇降路を作らうとしてゐるうちに、足を滑らしてボートの水溜りに落ちこみ、膝から下ズブ濡れになつたが、別に怪我はなかつた。艦ではおいしい御馳走がでたが、非常に腹が空いてゐたので、饅腹御馳走になつた。長官との打合せは午後の九時に終り、それから陸岸さして歸路についた。歸り路もひどく波が荒れてゐたので、全身ズブ濡れになつてしまつた。

われわれは、九時四十分の特別仕立てのヨコロンをたち、こゝへ着いたのが十一時四十五分、すつかり疲れ切つてゐた。長官は私に對して、全權と自由裁量を與へようとしてをられる。私は長官が與へないものをひとも要求しなかつた。さうだ、自分自身の仕事につき、その全權をもつことを、私は喜んでゐる。何か仕事したいと思ひながら、それができずにのらくらしてゐることは、退屈でもどかしいことであつた。多分必要な条件ではあつたらうが、それが過ぎてしまつたのでうれしい。」

それから、中佐はちつくり腰を据ゑて、仕事に取り掛かつた。かれは社交的な煩累の多いアンコンから、ステイヴンスの引揚げで空いたキュレブラの家に移つた。ウエスト・ポイントのジョージに、またかういふ

消息を寄せてゐる。「こゝへ移つて以來、朝は七時半から夜の十時まで、殆んどぶつ通しに事務所に閉ぢ籠つてゐる。いさゝかこたへるが、よく眠り、よく食ふやうにとめてゐる。それに、こゝでは仕事以外には絶対にすることがないのだから、仕事に没頭してゐる方が、かへつていい。私は今、一切の思索や讀書欲をノックアウトする、一種の『神經疲勞』に陥つてゐる。」

けれども、かれはその口の下から、この種の生活は、「いさゝか退屈になりつゝある。」といふことを認めてゐる。「私は今、否でも應でも汽車で出歩くことに決めたところだ。この月曜からはじめて、隔日に仕事のいろ／＼な部分を見て廻り、それから、その間々の日に事務所の仕事をやることにするつもりだ。……勿論、そちこちをみて廻れば時間をとられる、——けれども、運動をしなければならぬ、——現在以上に、

——それで、どうでもかうでも出歩かうといふ決心になつたのだ。工事はどうかかうか、自然に整頓してくだらう。」

その後間もなく、ゴータルスは、現場廻りとデスクの仕事を隔日にやるどころか、毎朝定期的に汽車でかける運動をはじめ、午後になつて、キュレブラのデスクに歸るやうになつた。かれは樂しみと運動のために、一頭のアメリカ馬を國からもつてゐたが、乗馬の時間は殆んど、いやまつたくといつてもいゝほどなかつた。その乗馬が、赴任の年の十一月、事故で汽車に轢かれて死んだ後は、かはりの馬を飼はなかつた。そのかはり私有車のラフランスから、——フランス會社は、延長五十マイル足らずの鐵道に、三臺の私有車を

残っていた——貨物列車の車掌車や機關車の運轉室にいたるまで、あらゆる鐵道車輛を乗り廻した。そして、何か興味あるものが眼に留まると、汽車から降りて調査した。かれは、切割の基地の側を上つたり下つたり、ぞんざいに敷設された建設列車線に沿つて、活潑な歩調で散歩したりして運動した。沿線のあるちつぽけな補給局食堂の油布をかけたテーブルで食事してゐた、數人の鑿岩機係と起重機係は、かれが同じテーブルに並んで、一緒に三十セント・ランチを食べてゐるのを發見した。そのうちに、食堂の支配人やボーイたちは、毎日々々抜き打ちの検査が行はれかねないことがわかつて、かれを煙たがりはじめた。ところが、一人のボーイが、ドアをはひつてくる白詰襟の姿を眼ざとくみつけて、丁寧にお辭儀した。晝の汽車で、顔は知らないが愛想のいゝ、白服を着た客と隣り合はせになつて、工事は陸軍でやることになつたから、もうバナマにはゐまいと思ふが、どう思ふかなど、話してきたばかりの一人の従業員は、それを見てびつくりした。この男は、その隣りの客に、年收五千ドルの口がかゝつてゐるので、エクアドルに行くことになつてゐると語つた。客はその話に非常に興味をもつて、今どんな仕事をしてゐるか、どれだけ貰つてゐるかをたづねた。そこでかれは、たゞ話を印象的にするために、現在貰つてゐる給料に五割だけ懸値して答へたのであつた。

「おゝ、ありやだれだい？」ゴータルスが労働者たちの間に腰をおろすや否や、その男がボーイに訊いた。かつて工兵第二大隊E中隊の軍曹であつたそのボーイは、ちよつと嚴格な態度をみせて、教へてやつた。

間もなく、その姿がみえると同時に、中佐だなど氣づかないものは、バナマの新米だけになつてしまつた。厄介なのは、かれがいつ、どこに現はれるか、だれにも見當がつかないことであつた。ある朝、八時が鳴るのを聞きながら、かれはある區の診療所にはひつていつた。アメリカ人の事務員が一人と、一人二人の黒い西印度人がデスクにむかつてゐたが、肝腎の保健醫の顔はまだみえない。その保健醫が出動したとき、中佐が自分を待つてゐるのにぶつかつた。

「君は、なぜ三十分近くも出勤時間に遅れたんだね？」

「受持の保健區を廻つてをりましたので、……」保健醫は、明らかに不安さうな顔で答へた。

「そこを？」

「ずつとむかふの、グアシャパリの塵芥捨場です。」

中佐は、保健醫のきれいにアイロンのかゝつた白い麻ズボンと、きれいに靴クリームを塗つたズック靴を——グアシャパリの塵芥捨場の、粘土ねはつちのなかを視察してきたばかりだといふ——マジマジと眺めた。

「君がこの次また、三十分も出勤時間に遅れるときは、もつと人を納得させられる口實を考へておきたまへ。」

來意も告げずに診療所をでゝゆくとき、ゴータルス中佐はさういつた。四月末ごろのジョージ宛の手紙に、かれはかう書いてゐる。

「これまでは、委員長、鐵道の管理、技師長はみな別々の職分であつたが、今ではそれがひとつになつてゐる。ときには相當苦しいこともあるが、決して悲鳴をあげてはゐない。輔佐をしてくれるほかの技師たちがゐるお蔭で、土木關係の問題の大部分はその方々にお任せして、自分の時間はそれ以外の問題に捧げてゐる。」

ある日、さういつた土木關係「以外の問題」に没頭してゐるゴータルスは、衛生局の細かな問題に關して、ゴーガス軍醫と長時間協議を行ひ、また「警察、消防部、裁判所、徴稅官、都市の改良事業、學校等々の問題にも互つた。私が朝の七時五十分にコロンの着くとすぐ始まり、私が午後五時十五分にコロンをたつまで、——ゴーガスを五時半の汽車に間に合はせるため——私はぶつ續けに協議をしてゐた。」

「私は、ステイヴンス氏が個人秘書に任せてゐた多くの細かな事項を、自分で背負ひ込んでゐるやうに思ふが、その同じ人を個人秘書に使つてはゐるけれども、さういふやり方では満足にいかない。けれども、事はだんだん調子よく捗るやうになつてきた。技師長事務所の書類處理にも十分經驗を積んだので、迅速に處理できるやうになつた。」

ステイヴンス時代から引き繼いだ個人秘書に不満をもつてゐたゴータルスは、非常に不便を感じた揚句、新委員の一人である、ケンタッキーのジョセフ・シー・ビー・ブラックバインに相談をもちかけた。この人は、以前多年の間上院議員の地位にあつた人だが、打つてつけの理想的な人間を知つてゐると、ゴータルス

に話した。それは、かれの友人でこのころ逝去した、メリーランド州選出の上院議員ゴーマンの個人秘書を勤めてゐた、ウィリアム・エチ・メイといふ人間である。メイは、そのブラックバインの百パーセントの推薦によつて、個人秘書の地位を提供され、それを引受けた。個人秘書としてのビル・メイは、實によくゴータルスを助けた。どんな長官といへども、これほど能率的に、或ひは忠實に、役所の雑多な仕事を處理してくれる助力者を得たものはあるまい。

ゴータルスはその當時、いはゆる「永續會期」ちうの地峽運河委員會の會議や、首腦部の役割決定の理田について語つてゐる。「サイバートの開門と堰堤における經驗は、これをその方面の主任者たらしめることを非常に必要ならしめた。海軍士官のルソーは、建築物、機械工場等々の専門家だ。……そこで、ガイラルドは<sup>カット</sup>切割を擔當しなければならなかつた。」

一貫して衛生局長の地位にあつたゴーガス軍醫大佐は、新たに委員に任命された。マーク・サリヴァン氏は、その歴史書「現代の合衆國、一九〇〇—一九二五年」の第一卷（四四六頁以下）において、次のやうに述べてゐる。

「ゴーガスは、同じ陸軍の將校を首腦者とする、改善された現在の管理組織を迎へ、かつ自らも委員會の一員に列したので、今こそ、獨自の方法による惡疫との闘争を許されることゝ期待してゐた。が、かれはふたゝび失望させられた。困難は、ゴータルス委員長が衛生局に對して、節約強化と能率増進を要求したとこ

ろから発生した。ゴータルスは、どの記録も完全と認めなかつた。そして、節約された経費でより、多くの成績をあげるやう、各幹部を督勵した。ゴータルスは擔任の保健衛生事業に、年三十五萬ドルの経費を費つてゐた。これは、保健衛生以外の事業に注ぎ込まれる年數百萬ドルの経費に較べれば、決して法外な額ではない。全事業の成否を左右する従業員軍の健康は、比較的少額な経費によつて購はれてゐたのだ。にもかゝらず、ゴータルスは、それを贅澤だと思ふといふのだ。で、ゴータルスは、四年前ゴータルスがウォーカー提督とやり合つたやうに、ゴータルス相手に議論し、他から束縛されず、かつ經驗の結果最善と信ずる方法によつて、擔任の仕事させて貰ひたいと、いつも主張してゐた。

(註) 保健衛生費の正確な数字はない。ゴータルス自身はその経費を、ざつと、全従業員に一日だけビール一本づゝ飲ませるくらゐの額だといつてゐた。——サリヴァン氏の脚註

ある日、特に議論が熱してきて、ゴータルスは將に痾癩玉を破裂させさうになつた。ゴータルスはかういつたのだ。

「ゴータルス、君が殺す蚊一匹毎に、合衆國政府は十ドルづゝかけてゐるといふことを知つてゐるかね。」  
ゴータルスは、ほんのちよつぱり悪意を帯びた微笑をうかべながら答へた。

「だが、ちよつと考へてみたまへ、その十ドルの蚊の一匹が君を刺したとしたら、國家にとつていかに莫大な損害になるかね。」

黄熱病は、運河地帯においてゴータルスが注意を怠らぬ唯一の疾病ではなかつた。かれは最初から、マラリヤ絶滅の計畫を樹てゝゐた。一九〇六年から一九一三年にいたる間に、毎月病院のマラリヤ病室に入院を許される運河従業員の割合は、全入院患者の四十パーセントから十パーセントに減少した。もつと好成績をあげ得なかつた理由については、ゴータルスが、一九一五年セント・ルイスで試みた演説において述べてゐる。

「パナマ地帯においては、われわれがハヴァナでやつたほどの、徹底的なマラリヤ絶滅を行ひ得なかつたことに對して、私は非常に失望した。私はその實現に對して十分に期待をいだいてゐた。そして、地帯に赴任するや、ハヴァナで非常な成功を収めた、同じマラリヤ豫防法を實施した。この豫防法は、最初の四年間強力に推進された。その四年間の闘争をへた一九〇八年の五月、地帯における一切の権能はたつた一人の人物、委員長の手集中された。この役員は、衛生施設の方法に何等か根本的な變更を加へた方がいゝといふ意見であつた。委員長の命によつてその變更が行はれた結果、マラリヤ豫防の仕事は衛生當局の手を離れて、マラリヤ豫防の特殊知識をもたない人々の手に移管された。私は極力反對したが、無駄であつた。熱帯地衛生施設における、私の十五年に互る體驗を顧みるとき、私が以前一九〇八年にいたるまでとつたと同じ方法を、パナマで繼續することができたならば、結果はハヴァナにおけると同様であり、運河従業員は、ハヴァナ市民と同様、全然マラリヤから解放されたであらうと信ずる。」

サリヴァンの著書にさういふ記述が發表されたので、ゴータルス將軍は一九二六年四月十二日、著者宛に

長文の手紙を送り、まづ若干の事實と期日の間違ひに注意を喚起した後、赴任當時の自分については、いくつかの言説を否認した。<sup>(註)</sup> ゴーガス問題に對するゴータルス<sup>(註)</sup>の回答は、次の通りである。

(註) これらの記述は、サリヴァン氏の著書の後の版で削除されてゐる。

「四六八頁にでゝゐる、ゴーガスと小生との議論の如きは起つたことがなく、全然無根の話である。私は衛生施設の豫算を作成せず、ゴーガスの提出した豫算を承認したのだ。私はそれを積極的に支持はしなかつたが、その實行を許した。事情かくの如くであるから、その經費に對して、私は責任がなかつたわけである。

私は、一九〇八年の行政命令の權限によつて、建設部隊を再組織することを決意した。それは、各委員はもう『各局』の監督に當る必要がなくなつたからだ。一九〇八年の五月、タフト陸軍長官は、ジャックソン・スミス<sup>(註)</sup>を罷免するために、パナマを訪問された。スミスに對しては、以前からアメリカの労働組合、市民聯合、商人その他から非難が起つてゐたのだ。<sup>(註)</sup>

(註) ジャックソン・スミスの挿話については、本書一五九頁以下をみよ。

私は長官の滞在ちう、すでに部分的にできあがつてゐた組織と、除去すべき困難と、完成すべき結果について説明した。長官は、衛生局に對してはどうするつもりかたづねられたので、『全然手をつけな』と答へた。長官は、衛生局の經費に對して放たれてゐた非難と、だれでもゴーガスの行政家でないといふ事實を認めてゐる結果である、何等かの措置を講ずべきだといふ非難を説明された。私は、もし傳染病が発生す

れば自分がその責任を負はねばならなくなるから、どんな變更を命ずる責任もとりにたくない、しかし、長官もしくは議會から命令があれば、それに従ふつもりだといふことを説明した。

長官は、シー・エー・デイヴォル大佐を派遣することに決定してゐた。私は知らない人だが、長官が非常に尊敬してゐる人物で、労働住宅補給局に代る補給局の首脳に据ゑようといふのであつた。長官は、フィリップンや陸軍の營舎でやつてゐるやうに、醫師が仕事の命令をし、補給係がその實行に當るといふことがなげできないのか、合點がいかかなかつた。私は、さういふ制度を實施することはできるのだが、ゴーガスの同意を得ずにはやらないつもりだと答へた。

私はゴーガスに會ひ、七月一日から實施する豫定の建設部隊の再組織と、内定した人事異動について説明した。私はタフト長官から指示を受けた計畫の概要を説明したが、現在の衛生監督官は、それによつて、草刈りの地域と時日を指令し、衛生技師は(すべてゴーガスの命を受ける)草刈りを實施する區劃とその實施方法を大體決定する、そして、運河工事の監督に當つてゐる技師たちと協力の下に實施すべきことになつた。同時にかれは、河溝等の撤油、鐵道終點都市及び交通遮斷區域の衛生施設の全責任を負ふわけである。居住地域外にある河溝、沼澤に對する撤油は、マラリヤ蚊の繁殖所を壊滅させるのだ。私は、かういふ制度にすれば、從來必要であつた、よけいな勞力が省けるから、草刈りの經費が減少するだらうと述べた。現在、運河建設工事に關係なく掘つてある溝や濠は、工事が進捗してきたから、今後は破壊しないことにするが、そ

れに對する撤油は、かれの命令によつて行はれる。大體かういふ説明をしたところが、かれは、さういふ組織では斷じてうまくいかないといふので、私は、その發案者であるタフト長官と直接話し合つてみてはどうかといつた。長官がデイヴォル大佐をよく知り、かつ信頼してゐることを念頭において……

問題の結末は、後日になつて、ゴークス軍醫大佐が、その組織はうまくいかないに違ひないが、進んで半年間だけ試験的に實施してみよう、と申し出たことによつて免がついた、私は、その『命令法』の成績が優良であつた場合には、その後も繼續する、さうでなかつた場合には、現在の方法に還元し、建設計畫と進度に適應するやう、溝や濠の掘鑿計畫を修正しようといふ諒解の下に、その提案を承認した。

組織の變更は、豫定通り一九〇八年七月一日から實施された。結果が良好であることは、マラリヤの率によつて決定された。……

私は衛生統計には十分通じてゐるし、かつこの方法はうまくいく筈がないと斷言されてゐるので、新制度實施後、特に毎年かならず患者の増加をみる、秋期の進行するに従つて、當然マラリヤ患者が増加するものと期待してゐた。ところが、實際はそれと反對で、罹病件数は引續き減少を示してゐた。このゲームに、ゴークスを敗けさせた妨害者が、二、三の衛生監督官のなかにあつたが、その連中はみな注意人物になつてゐた。半年の試験期間が終らうとするとき、ゴークスは、新法は失敗であつたからと稱して、仕事を自分の所管に戻して貰ひたいと申込んだ。記録によれば、以前より少額な經費で、遙かに廣大な地域の草刈りが行は

れ、濠の掘鑿も以前より低費で、從來にまさる成績をあげ、罹病率（實際に診斷を受けたもの）も、過去六ヶ月間に、現實に、一貫して低下を示してゐる。さういふ事情の下に、私はかれの還元を要求を拒絶した。この問題に關しては、爾來それ以上の議論が起つたことがなく、罹病率は低下を續けてゐた。かれは撤油すべき地域の全權を握つてゐたのだから、希望によつては、全運河地帯を撤油地域に指定することも自由であり、それによつてマラリヤを完全に絶滅し得たかもしれない。

意外の長文に互り、お邪魔申上げたことを御諒願ひたいが、しかし貴下は、お飽きになつたら、紙屑籠にほうりこめる有利な地位にをられる。近ごろ、パナマ運河の話のなかに、非常におびたゞしい間違つた記述が現はれてゐるが、それが『歴史』と銘打つてある場合には、私の世界から取り除くことに決めてゐる。』著者サリヴァンは返事を書いた。

「貴下の御回想とゴークス將軍のそれとの不同な點については、勿論小生も考慮いたすつもりです。貴下も多分御承知の如く、ゴークスの見解はその名によつて、及びゴークス夫人の名によつて發表されたものに現はれてをります。」

「一匹十ドルの蚊」の話と、セント・ルイスの演説の抜萃とは、いづれも最初にゴークス將軍の傳記(註)に現はれたものである。その傳記には、ほかに、ゴークス將軍に對する無数の非難的な記述があるが、それに對してかれは、後に當のゴークス將軍とともに、サリヴァンの「現代史」に協力させられるまで、一顧も

與へなかつた。そのときゴータルスは、自分の側の立場を述べたが、本書に採録したものがそれである。

(註) マリー・デー・ゴーガス、バートン・ジェー・ヘンドリック共著「ウィリアム・クロフォード・ゴーガス」  
その生涯と事業」一九二四年ニューヨーク、ダブルデー・ページ出版社

將來このエピソードの真相を確かめようと思ふ歴史家は、基礎的な資料を涉獵する必要がある。——衛生局及び建設局の記録と統計、一九〇六年、一九一二年のバナマ地方の戸口調査(人口数の有益な調査として)等がそれである。

ゴーガスの場合と正反対であつたのは、ゴータルスと委員會の海軍側の委員、エチ・エチ・ルソー少將(現在在郷軍人局の主席參與)との間に存した完全な理解である。この二人は、摩擦もなければ疑惑もいだが、一緒に働らいた。バナマ運河建設におけるルソー提督の功勞について、ゴータルスは一九一三年から述べた。

「その技術的訓練と過去の経験とは、その行政的手腕と相俟つて、かれをしてすばらしい適任者たらしめた。かれは、工場、都市關係の工事、建築工事、鐵道終點、及び乾ドックと貯炭所の設計、造築工事の主任として監督の任に當つた。組織、簿記、豫算の編成等に對する、その助言は非常に有益であつた。かれの手腕はホッヂス大佐(註)と並んで、私にとつて缺くべからざるものであつた。海軍省は、二度もそのワシントン歸任を希望し、一度は、海軍長官から大統領に對して、海軍省自らその手腕を揮はせるために、かれの地峽に

おける任務を免ぜられんことを、特に要請した。(註)

(註一) 本書一八三頁以下をみよ。

(註二) ジェー・ビー・ビショップ著「バナマ運河」一八二頁

サイバート大佐とガイラルド大佐の功勞については、次章で述べることにしよう。個人秘書のビル・メイを推薦して、ゴータルスから終生の感謝を受けた、ケンタッキーの前上院議員のブラックバーンは民政局長で、「知事」の尊稱を貰つてゐた。かれは、旅團長として南北戦争に出征し、祭日には、官舎に南部同盟の軍旗をひるがへしたものだ。一九〇七年、エチ・アイ・コーン少佐(現少將)麾下の驅逐艦隊が、バナマに入港したとき、ゴータルス大佐は、公式歓迎會の席上、同僚の委員連の席へ歩み寄つて、かれ獨得の、すこぶる專擅的な低い聲で、「だれか演説をやらにやならんが、早くやりたまへ！」といつた。

ブラックバーン「知事」がすぐそれに應じて、舊式な南部流の雄辯を一席莊重にやつてのけて、型の如く歓迎の意を表したが、その演説は、列席のバナマ人に深い感銘を與へた。バイロンの詩のやうに、かれの美辭麗句は結構翻譯に値ひする値打ちものである。中佐は演説をやつたり、公式の歓迎の辭を述べるといふやうなことが苦手であるが、その代役として、かれほどの適任者はほかになかつた。

最後に、ジャックソン・スミスがある。かれは地峽運河委員會でこそ新顔だが、ヴェテランの運河人キャナルマンであり、非常に重要な勞働住宅補給局の局長の地位にあつた。かれは、バナマの勞働者軍の補充、住宅、給養



に非常に功勞があつた。一九〇七年春における運河地帯の生活状態は、確かに従来より非常によくなつてゐた。しかし、まだまだ改善の餘地あることも疑ひを容れなかつた。けれども、その改善方策に關する意見は、勞働住宅補給局では有難がらなかつた。ジャックソン・スミスは、物事を規則と公式で片づけることのすきなやかまし屋であつた。給料一ドルに對して一平方フィートといふ具合に、各人の給料に應じて、住宅の坪數を割當てる規則にしてゐたので、「平方フィート」スミスといふニックネームがついてゐた。このやり方は、面倒な議論が省けるので、かれが辭めた後もそのまま踏襲された。が、ほかの公式は、はなはだ賛成できないものであつた。従業員のだれかど、食ひ物がまづいと、宿舎がひどいと、スミスの局のだれかに不當な扱ひを受けた、といつたやうな苦情をもちこむたびに、ジャックソン・スミスは、かう浴びせかけるのが十八番であつた。「よろしい、この待遇が氣に喰はないつていふんなら、五日に一回のアメリカ行の船便があるぜ。」

このジャックソン・スミスに對する、恐らくもつとも公平な批判は、陸軍長官宛のゴータルス中佐の秘密報告に現はれてゐる。「スミス氏に關しては、私は二つのことを確信してゐる。第一は、その擔當する局の首腦者としての仕事に示された、かれの才能である。第二は、その不人望は、擔當局の能率を著しく阻害する程度に達してゐるといふことである。」

住宅に關して非常に苦情が多かつたこと、かつ現在もなほ多いといふことは否定できない。少なくとも、

ある程度まで、この状態は避け得ない。この問題に關して、スミス氏に加へられた非難の非常に多くの部分  
が不當であることは疑ひを容れないが、氏は不平もこぼさず、抗議もせず、その非難を甘受した。但し、その非難の非常に多くの部分は、氏の部下に對する態度と取扱ひがもつと別であつたならば、避け得られたであらうといふことも同様に確信する。」

後に、中佐はこんなことをいつた。

「スミスは厳格な學校で教育を受けたので、それがあゝいふ厳格な人間を作り上げたのだ。」

スミスとの衝突は、四月の末に突發した。

中佐は例によつて、令息のジョージへの手紙でかういつてゐる。

「こゝに、どつちかといへば敵意をもつた人間が一人ゐる。火曜日に多少の證據をみせつけられる以前から、私は察してゐた。その日、委員の一人が會計検査官長にむかつて、私がかれの所管の物品購買に干渉を加へるならば、——私がかれの肚であると、人づてに聞いた通り、——自分は辭職すると通告した。購買方法は、われわれの考へからすれば規則に合つてゐないので、私は金曜日に中止を命じた。土曜の朝、命令が實行されるとすれば、辭職せざるを得ないといふ電報を、かれから受取つた。私は強硬な態度にで、電報で免職してやつた。かれはゆうべ辭意を撤回したいと申し出たが、時機すでに遅かつた。これは、全従業員の共同一致を齎らす上に役立つだらう。かれらが頑張れるなら、私は頑張れる。」

「連日大車輪の奮闘を續けてゐる。」續けて、次の手紙にいつてゐる。「もつとも、全體の狀勢にはますます通じてきたし、仕事は以前より樂に捗るし、委員長が斷乎たる態度をみせて以來は、従業員もよく一致してきてゐる。月曜にコロンにいつたが、そこで、主任の——君が打つた、私は狀勢の判斷を過まつてゐる等々、かれは屈伏するだらうといふ電報は、全部誤まりであつたことを聞いた。しかし、命令はすでに發せられてゐる。私は斷じて後へ退かない。私が異動を行つたとすれば、問題の禍因をなしたホテルと食堂は、ウッド中尉監督の下にあるといふことだつたので、早速中尉にその改善の全責任を負はせた。それ以來、といふよりは以前通り、なんの面倒も起らなかつた。」

問題は結局、新體制の決定的勝利に歸した。委員長が斷然強硬態度にでるや、全従業員の足並は揃つた。従業員の一人は、自分らはみな、「中佐が命令を發した以上、その問題で従業員大會を開くことはできない。」といふことを知つたと語つた。今では、食ひ物や宿舍に不満をもつた労働者も、パナマの待遇が氣に喰はないんなら、五日に一回出帆の船便がある、と放言する人間にもちこまなくともよくなつた。さういふ時代は過ぎ去つた。工事は一層順調に進むやうになつた。

地峽運河委員會秘書のジョセフ・バックリン・ビショップは、ワシントンから地峽に轉任（一九〇七年八月）後、ルーズヴェルト大統領宛の最初の手紙に書いてゐる。

「工事は順調に進んでをり、中佐は日増しに全事業の統率者たる實をあげられつゝあることが、明らかに

窺はれます。中佐は疲れ切つた顔をして、正真正銘の「時間の地獄」を味はつたといはれましたが、私はかならずそれに打ち勝たれたことゝ信じてゐます。私がさう申したところが、中佐は、「ふうむ、わからないな。」と申されました。しかし、中佐は、最悪の時期は過ぎて、これからはもつと滑りがよくなるだらうとお考へになつてゐると思ひます。勿論この點に關しては、こゝの生活が長くなるに従つて、もつとはつきりしたことを申上げられるでせう。」

八月十八日附の手紙。——

「その後一週間の觀察の結果は、先便で申上げた、萬事實に好調に進んでゐる、といふ私の見解は確證されました。ステイヴンスの辭任後に起つた不満と不安とは殆んど解消し、「反對分子」は日増しにその數と勢力を減じてゐるといふことは、すべてのものが斷言してをります。どんな場合でも、いくらかの反對者があるといふことは申すまでもありませんが、現在ゴータルス中佐に敵意をいだいてゐるものゝ數は、人氣の絶頂時代におけるステイヴンスに對する反對者以上ではないと確信いたします。」

その點については疑ひありません。——中佐は工事を統率する能力を示されました。その能力を疑ふものはだれもありません。私は數日前、私の着任以來最初の委員會々議に列席いたしました。それは本物の會議でした。各委員みな討議に加はり、いづれも全工事に對する完全な知識を發揮してをりました。委員長と技師長だけが積極的な役割を演じてゐた、舊委員會の會議とは著るしいコントラストを示してをります。現在

の委員会は、すべて工事に對して熱心な興味をいだき、積極的に従事してゐる、有能勤勉な人々の實質的な實行機關であります。時折り輕微な摩擦が起ります。ゴータルス中佐が私に申されたやうに、こゝに働らいてゐるものはみな、大收穫をあげてゐるやうにみえますが、作物を踏みつけずに足を踏みだすことは困難であります。それは確かに氣候の關係に基づくのですが、非常に多くの場合、特權保持に對する鋭敏な感受性といふ形をとつてをります。中佐はそれをユーモアをもつて眺めてをり、従つて非常に巧みに善處してをられます。今までのところ、さういふ摩擦は、委員會自體のなかには殆んどみられませんでした。」

しかし、それから僅か二十四時後に、ビショップは、非常にはつきり政策樹立機構の内幕を覗かせる瞥見を試みて、前便の記述を補正した。

「私は昨日發信の卑翰を追補して、今朝長時間に亘つて中佐と會談した結果、中佐が、委員會は多くの點において、厄介な、非能率的な機關であると確信されてゐる事實を知つたといふことを、申し上げたいと思ひます。——すなはち、委員長は拒否權をもつてゐるが、委員の多數が反對である、いかなる場合においても無力であり、中佐は、さういふ反對派の結成されることを、絶えず恐れてゐるといふことであります。かれの希望は、現在の委員會を廢止し、單に技師長、副技師長及び行政長官の三名をもつて構成する機關を新設し、工事の各部門を擔當する主任技師をもつて諮問機關を構成するにあります。この機構によれば、權限の分裂も起らなければ、結束や軋轢の機會もないであらうといふのであります。委員會にはすでに若干の

軋轢が行はれ、かつ現に、別な不和の發生が氣遣はれてゐるものと思はれます。しかし、重大な紛争といふものは、これまで起つてをりません。中佐は、私がこの事實を閣下にお知らせしてゐることに、勿論全然氣づいてをられません。」

この親展書は直接ルーズヴェルト大統領宛發信され、大統領が自分の手で開封した。それはペンで書いてあつたが、その理由については、ビショップが次の親展書で説明してゐる。「私はタイプライターで打たせることを憚らつたのです。それは、當地では何もかも『漏洩する』ので、私が閣下に卑翰を差上げるといふ事實が、歪曲されるに違ひないからであります。」

その一九〇七年の夏、パナマに關する歪曲された事實と、捏造された虚構とは、盛んに流布されてゐた。そこで、セオドル・ルーズヴェルトはその真相を確かめ、それを國民に知らせたいと思つたのであつた。

「地峽の現状に關する貴下の報告に對して、私は筆紙に盡し難い欣快を覺えました。」かれはビショップ宛の返事を書いてゐる。「ゴータルス中佐に、私の衷心よりの好意をお傳へ下さい。そして、貴下が報告された中佐の偉大なる成功は、私の豫想したことではあるが、それにしても、更めてその報に接することは欣快に堪へない、と御鳳聲下さい。それから、これはぜひ、——貴下が結構と思はれるならば、御傳言願ひたい。中佐は、いつまでも現地で働らき詰めではいけない。必要な場合にはいつでも休暇をとつて、ぜひこちらへやつてこられるやうにと。」

「ゴータルス中佐は、閣下よりの御傳言に接して、いひ表はせぬほど喜ばれました。」本人に劣らず喜んで、ビショップからの返書である。「閣下のお言葉はかれに勇氣を與へ、中佐自身の力に對する自信を強めました。中佐がそれによつて非常に鼓舞されたことは、その態度全體に明らかにでるをります。」<sup>(註)</sup>

(註) 久しく物發を氣遣はれてゐた、蒸氣シャベル係労働者のストライキがいよいよの土壇場になつて、數日の間に失敗に歸した後の五月二十五日、中佐は令息ジョージへの手紙にかう書いた。「ワシントンには、われわれを惱ます唯一の存在です。……」大統領をガツチリ後楯にしたかれは、後顧の憂ひなく、自由に仕事を進めることができた。

「ジャックソン・スミスがワシントンで、中佐が私を地峽で使ひたいと思つた理由は、私が『非常に大統領に接近してゐる』からだ」と私に語つたことは、閣下も御記憶のことと存じます。それは曲解でありました。中佐は數日前私にむかつて、自分が私をこゝで使ひたかつた主なる理由は、『真相を大統領に直接通じたい』ためであり、私とその仕事に當れることを知つてゐたからだと申されました。そして、私から閣下に御報告いたしてゐることを知らずに、當地における状況について、私から閣下に自由かつ詳細にお知らせして貰ひたい、それは、自分の望むことは、閣下に真相に通じていたとくといふことだけだからだと申され、かつ、自分は誤解以外には何ものも恐れないといふことを、お傳へして貰ひたいと申されました。貴翰は、私の措置が正しく中佐の希望に副つてゐたといふ證據を提供するに、ちやうど適當な時期に到着いたしました。これは、閣下と私との間に非常にたびたび起つた、はつきりした精神的理解の表現の一例でありました。閣

下よりの御傳言をお傳へいたしたとき、中佐は靜かに微笑しながら、たゞ、自分の望むことは、閣下に真相を知つていたとくといふことだけだ、と繰返されただけでした。

さて、私はみたまゝの眞實を御報告いたしました。そして、それは大部分中佐の功勞であります。私は今時々刻々、人としての中佐に對する欽仰と、かれこそこの事業に當るべき唯一人者であるといふ信念を増大してをります。」

「ゴータルスは明らかに、この事業に當るべき打つてつけの人物です。」と、セオドル・ルーズヴェルトは返事に書いた。「かれを得たといふことは、なんとといふ幸運であらう！」後に、かれは、「私は、あらゆる點において、中佐を支持しよう。」と語つた。

大統領は、その誓言を直ちに行動に移した。ジョセフ・バックリン・ビショップはすでに、「タフト長官不在につき、閣下宛に、八月ちうの掘鑿及び工事の成績を、直ちに翌一日に、特別電報をもつて報告されるやう、中佐に提案いたしたところ、中佐は直ちに採納して、私にその準備を命ぜられました。多分九月の四日或ひは五日になると思ひますが、その報告をお送りいたします。閣下において賢明なりとお考へになるならば、それを新聞に發表さればよろしいと存じます。さうすれば、各紙ともに掲載せざるを得ないでせうから、もつとも廣汎に真相を聞いて貰へるでせう。その結果、委員會の提出する不足經費の要求が、一般に是認されるにいたるでせう。」